

佐賀市文化財調査報告書第53集

# と 友 貞 遺 跡

(1区～6区の調査)

佐賀市教育委員会



# 発刊にあたって

金立南部地区における農業基盤整備事業は平成2年度に始まり、今年度で4年目をむかえます。同事業に伴う発掘調査は、すでに久富遺跡（平成2年度）、千布二本黒木遺跡（平成3年度）、友貞遺跡〔7区〕（平成5年度）の調査を行なって多数の成果をあげております。本書は平成4年度に発掘調査を実施した友貞遺跡〔1～6区〕の発掘調査報告書であります。

今回の発掘調査地区は水田部に計画されている水路予定地と畑地が地下げされる計画にある部分にあたります。発掘調査の結果、弥生時代～中世の集落であることがわかりましたが、調査区が狭隘なため、その全貌を明らかにするには至りませんでした。しかし、それでも弥生時代の掘立柱建物・古墳時代の土壇・井戸・中世の方形区画溝の一部やその内側に所在する掘立柱建物・井戸等を検出し多数の成果を得ることができました。特に中世の集落は平成5年度に発掘調査を実施した友貞遺跡7区（土生島－神代氏の館）との関連を考える上で大変重要な資料になるものと考えられます。

これらの資料は佐賀市域の歴史を研究する上で貴重なものであり、この報告書が郷土の歴史と文化財に対する認識と理解に少しでも役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しましてご協力いただきました佐賀県農林部、佐賀県教育委員会、並びに地元の方々に対しまして、心から厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

佐賀市教育委員会

教育長 野口 健

# 例 言

1. 本書は農業基盤整備事業に伴い、平成4年度に発掘調査を実施した佐賀市金立町所在の友貞遺跡（1～6区）の発掘調査報告書である。
2. 調査は佐賀県農林部委託金・国庫補助金を受けて、佐賀市教育委員会が実施した。
3. 調査地の所在および規模等は以下のとおり。

遺跡登録番号	2067・3085・4027・5047	遺跡略号	TBS-1～6
調査地	佐賀市金立町大字千布字友貞	開発面積	310,000㎡
調査対象面積	3,913㎡	調査実施面積	3,913㎡
調査期間	平成4年8月6日～5年1月7日		

4. 発掘作業・整理作業・報告書作成の分担は以下のとおり。  
表土除去                    株式会社 木塚組  
空中写真                    有限会社 空中写真企画  
遺構実測                    有限会社 若楠測量設計  
遺構個別実測                福田義彦  
遺構・遺物写真              福田義彦  
遺物復元                    西首金子・柴村悦子  
遺物実測                    貞包洋子  
製図                         貞包洋子
5. 調査・整理記録および出土遺物（Ⅰ種）は、佐賀市文化財資料館（佐賀市本庄町大字本庄）で一括保管している。また、出土遺物（Ⅱ種）については佐賀市循誘収蔵庫で保管している。
6. 本書の執筆・編集は福田がこれにあたった。

# 本文目次

I. 序 説	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の位置と環境	3
1. 遺跡の位置	3
2. 歴史的環境	3
III. 調査の概要	5
1. 調査区設定等の概要	5
2. 調査成果の概要	5
IV. 調査の記録－1区－	7
1. 土壌と出土遺物	7
2. 溝と出土遺物	8
V. 調査の記録－2区－	12
1. 土壌と出土遺物	12
2. 溝と出土遺物	17
VI. 調査の記録－3区－	22
1. 土壌と出土遺物	22
2. 溝と出土遺物	32
3. 掘立柱建物と出土遺物	41
VII. 調査の記録－4区－	49
1. 土壌と出土遺物	49
2. 溝と出土遺物	50
3. 掘立柱建物と出土遺物	60
VIII. 調査の記録－5区－	63
1. 土壌と出土遺物	63
2. 井戸と出土遺物	76
3. 掘立柱建物と出土遺物	83

4. 周溝状遺構と出土遺物 .....	89
5. 溝と出土遺物 .....	90
IX. 調査の記録－6区－ .....	92
1. 土壙と出土遺物 .....	92
2. 井戸と出土遺物 .....	92
3. 溝と出土遺物 .....	93
X. 小 結 .....	95

## 凡 例

1. 遺構については略記号を用いる。調査区毎に連番号をつけ、番号の前に遺構分類記号をつけた。

SB：掘立柱建物	SD：溝	SK：土壙	SE：井戸	SR：周溝状遺構	P：柱穴等
----------	------	-------	-------	----------	-------

2. 原則として、遺構の測定値はm単位、遺物のそれは 単位とした。
3. 表示した方位はすべて座標北（G.N）である。
4. 遺物の実測図は基本的に、須恵器の断面を黒塗り、その他の土器を白ヌキとしている。

# 插图目次

Fig. 1 :友貞遺跡周辺主要遺跡分布図……………2	Fig. 31 :SK304土壙実測図……………22
Fig. 2 :友貞遺跡周辺見取図……………6	Fig. 32 :SK304土壙出土遺物実測図……………22
Fig. 3 :SK006土壙実測図……………8	Fig. 33 :SK305土壙実測図……………22
Fig. 4 :SK007土壙実測図……………8	Fig. 34 :SK314土壙実測図……………22
Fig. 5 :SK008土壙実測図……………9	Fig. 35 :SK317土壙実測図……………23
Fig. 6 :1区検出溝断面図……………9	Fig. 36 :SK317土壙出土遺物実測図……………23
Fig. 7 :友貞遺跡1区遺構配置図……………10	Fig. 37 :SK318土壙実測図……………24
Fig. 8 :友貞遺跡1区出土遺物実測図……………11	Fig. 38 :SK318土壙出土遺物実測図……………24
Fig. 9 :SK107土壙実測図……………12	Fig. 39 :SK323土壙実測図……………24
Fig. 10 :SK108土壙実測図……………12	Fig. 40 :SK324土壙実測図……………25
Fig. 11 :SK109土壙実測図……………13	Fig. 41 :SK328土壙実測図……………25
Fig. 12 :SK110土壙実測図……………13	Fig. 42 :SK328土壙出土遺物実測図……………25
Fig. 13 :SK111土壙実測図……………13	Fig. 43 :SK329土壙実測図……………26
Fig. 14 :SK112土壙実測図……………13	Fig. 44 :SK329土壙出土遺物実測図……………26
Fig. 15 :SK113土壙実測図……………14	Fig. 45 :SK333土壙実測図……………26
Fig. 16 :SK114土壙実測図……………14	Fig. 46 :SK333土壙出土遺物実測図……………27
Fig. 17 :SK115土壙実測図……………14	Fig. 47 :SK335土壙実測図……………27
Fig. 18 :SK116土壙実測図……………14	Fig. 48 :SK335土壙出土遺物実測図……………29
Fig. 19 :SK117土壙実測図……………15	Fig. 49 :SK341土壙実測図……………29
Fig. 20 :SK118土壙実測図……………15	Fig. 50 :SK341土壙出土遺物実測図……………31
Fig. 21 :SK119土壙実測図……………15	Fig. 51 :SD340溝出土遺物実測図……………34
Fig. 22 :SK120土壙実測図……………15	Fig. 52 :SD302溝出土遺物実測図……………36
Fig. 23 :SK121土壙実測図……………16	Fig. 53 :SD325溝出土遺物実測図……………37
Fig. 24 :SK122土壙実測図……………16	Fig. 54 :SD326・332溝出土遺物実測図……………37
Fig. 25 :SK123・124土壙実測図……………16	Fig. 55 :SD339溝出土遺物実測図……………38
Fig. 26 :SK125土壙実測図……………16	Fig. 56 :友貞遺跡3区北半遺構配置図……………39
Fig. 27 :SD102溝実測図……………18	Fig. 57 :友貞遺跡3区南半遺構配置図……………40
Fig. 28 :SD104溝実測図……………19	Fig. 58 :SB347掘立柱建物実測図……………41
Fig. 29 :2区溝出土遺物実測図……………20	Fig. 59 :SB348掘立柱建物実測図……………42
Fig. 30 :友貞遺跡3区遺構配置図……………21	Fig. 60 :SB349掘立柱建物実測図……………43

Fig. 61 :SB350掘立柱建物実測図 ……………43	Fig. 91 :SK533土壙実測図……………67
Fig. 62 :友貞遺跡3区掘立柱建物配置図 ……45	Fig. 92 :SK530土壙実測図……………67
Fig. 63 :友貞遺跡3区遺構配置図 ……………47・48	Fig. 93 :SK536土壙出土遺物実測図 ……68
Fig. 64 :SK405土壙実測図……………49	Fig. 94 :SK505土壙実測図……………68
Fig. 65 :SK414土壙実測図……………49	Fig. 95 :SK505土壙出土遺物実測図 ……69
Fig. 66 :SK415土壙実測図……………50	Fig. 96 :SK517土壙実測図……………70
Fig. 67 :SK416土壙実測図……………50	Fig. 97 :SK517土壙出土遺物実測図 ……70
Fig. 68 :SD401・402溝実測図 ……………50	Fig. 98 :SK525土壙実測図……………70
Fig. 69 :SD404溝実測図……………51	Fig. 99 :SK525土壙出土遺物実測図 ……70
Fig. 70 :4-1区畦遺構配置図及びSD406・ 417・418溝実測図……………52	Fig. 100:SK526土壙実測図 ……………71
Fig. 71 :4-2区遺構配置図及びSD409・ 410・412溝土壙図……………53	Fig. 101:SK526土壙出土遺物実測図 ……71
Fig. 72 :SD401溝出土遺物実測図 ……………54	Fig. 102:SK537土壙実測図 ……………72
Fig. 73 :SD406溝出土遺物実測図(1) ……55	Fig. 103:SK537土壙出土遺物実測図 ……72
Fig. 74 :SD406溝出土遺物実測図(2) ……56	Fig. 104:SK542土壙実測図 ……………73
Fig. 75 :SD404・412・419・411 溝出土遺物実測図 ……57	Fig. 105:SK542土壙出土遺物実測図 ……73
Fig. 76 :SD410溝出土遺物実測図 ……………58	Fig. 106:SK548土壙実測図 ……………73
Fig. 77 :SD417溝出土遺物実測図 ……………59	Fig. 107:SK540土壙出土遺物実測図 ……74
Fig. 78 :SB403掘立柱建物実測図 ……………60	Fig. 108:SK557土壙実測図 ……………74
Fig. 79 :SB403掘立柱建物出土遺物実測図 ……60	Fig. 109:SK557土壙出土遺物実測図 ……75
Fig. 80 :友貞遺跡4区遺構配置図 ……………61・62	Fig. 110:SE513井戸実測図 ……………76
Fig. 81 :SK538土壙実測図……………63	Fig. 111:SE513井戸出土遺物実測図 ……77
Fig. 82 :SK538土壙出土遺物実測図 ……63	Fig. 112:SE531井戸実測図 ……………77
Fig. 83 :SK540土壙実測図……………64	Fig. 113:SE531井戸出土遺物実測図(1) ……78
Fig. 84 :SK540土壙出土遺物実測図 ……64	Fig. 114:SE531井戸出土遺物実測図(2) ……79
Fig. 85 :SK541・550土壙実測図 ……………65	Fig. 115:SE532井戸実測図 ……………80
Fig. 86 :SK540土壙出土遺物実測図 ……65	Fig. 116:SE532井戸出土遺物実測図(1) ……81
Fig. 87 :SK549土壙実測図……………65	Fig. 117:SE532井戸出土遺物実測図(2) ……82
Fig. 88 :SK549土壙出土遺物実測図 ……66	Fig. 118:SB502掘立柱建物実測図 ……84
Fig. 89 :SK551土壙実測図……………66	Fig. 119:SB503掘立柱建物実測図 ……84
Fig. 90 :SK528土壙実測図……………66	Fig. 120:SB552掘立柱建物実測図 ……84
	Fig. 121:SB553掘立柱建物実測図 ……84
	Fig. 122:SB554掘立柱建物実測図 ……85
	Fig. 123:SB555掘立柱建物実測図 ……85

Fig.124:SB556掘立柱建物実測図 ……………86	Fig.133:友貞遺跡5区遺構配置図 ……………91
Fig.125:SB559掘立柱建物実測図 ……………86	Fig.134:SK604土塋実測図 ……………92
Fig.126:SB562掘立柱建物実測図 ……………87	Fig.135:SE603井戸実測図 ……………92
Fig.127:SB563掘立柱建物実測図 ……………88	Fig.136:SE603井戸出土遺物実測図 ……………93
Fig.128:掘立柱建物・柱穴出土遺物実測図 ……88	Fig.137:SD601溝実測図……………93
Fig.129:周溝状遺構実測図 ……………89	Fig.138:SD601溝出土遺物実測図 ……………93
Fig.130:周溝状遺構出土遺物実測図……………89	Fig.139:友貞遺跡6区遺構配置図 ……………94
Fig.131:SD501溝実測図……………90	Fig.140:調査地区配置図並びに周辺見取図…95
Fig.132:SD501溝出土遺物実測図 ……………91	



# I. 序 説

## 1. 調査に至る経過

平成4年度の金立南部地区における農業基盤整備事業は31haを対象としてその施工が計画された。これに先立ち、平成3年度の11月に当該地区の埋蔵文化財確認調査を実施した。調査は掘削計画にある水路予定地や地下げ計画にある高畑を中心に、任意に試掘坑を設定した。試掘坑の掘削は機械力及び人力によって行なった。調査の結果、友貞集落の南方の水田部分と高畑部分を中心に46,830㎡の及ぶ遺跡の存在を確認した。この調査結果にもとに、佐賀県農林部、佐賀県文化財課、佐賀市土地改良課、佐賀市教育委員会の4者で埋蔵文化財の保護に関する協議を実施した。その結果、水路予定地と高畑の削平計画にある遺跡部分3,913㎡の発掘調査を実施し、記録保存とすることになった。

発掘調査は平成4年8月6日から開始し、5年1月7日で全ての現場作業を終了した。また、整理作業及び調査報告書作成は、平成5年4月12日から平成6年3月にかけて佐賀市文化財資料館で行なった。

## 2. 調査の組織

調査主体	佐賀市教育委員会	
事務局	佐賀市教育委員会	文化課
	文化課長	中野和彦（平成4年度）
	文化課長	北原 学（平成5年度）
	課長補佐兼	
	文化係長	江副勝利（平成5年度）
	文化係長	野口義通（平成4年度）
	文化財係長	福田義彦（本調査担当）
	事務吏員	増田耕輔（庶務担当）
	同	西田 巖（試掘担当）
発掘作業員	広瀬八重子・広瀬幸子・村川キクエ・生田美代子・福田妙子・武富園枝・武富サチコ・大林里子・宮崎久枝・平方スミ子・杉町スミ子・杉町英子・野中ツタエ・金崎タキヨ・福田スマ子・野田富子	
調査協力	佐賀県教育委員会・佐賀県農林部・中部農林事務所・佐賀市土地改良課・金立土地改良区・地元各位	

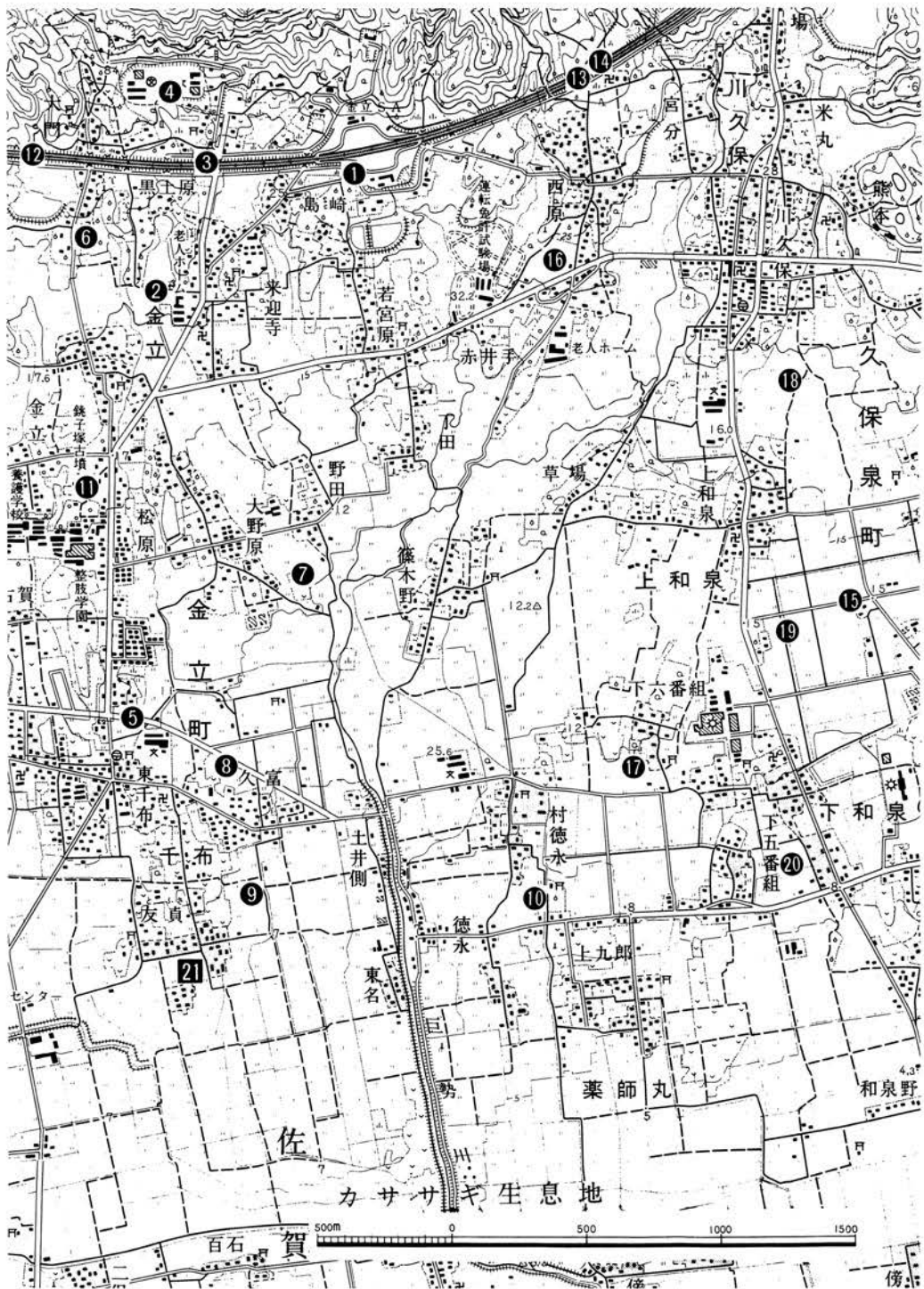


Fig. 1 友貞遺跡周辺主要遺跡分布図 (S = 1/25,000)

- ①金立開拓遺跡 ②来迎寺遺跡 ③大門西遺跡 ④黒土原遺跡 ⑤東千布遺跡 ⑥大門遺跡
- ⑦大野原遺跡 ⑧久富遺跡 ⑨千布二本黒木遺跡 ⑩村徳永遺跡 ⑪銚子塚前方後円墳
- ⑫三郎山遺跡 ⑬西原遺跡 ⑭鈴限遺跡 ⑮泉三本栗遺跡 ⑯大日遺跡 ⑰古村遺跡
- ⑱原ノ町遺跡 ⑲上和泉遺跡 ⑳立野遺跡 ㉑友貞遺跡

## Ⅱ. 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置

佐賀市は佐賀県の南東部に広がる佐賀平野のほぼ中央に位置し、東は神埼郡神埼町・千代田町・佐賀郡諸富町、西は佐賀郡大和町・小城郡三日月町、北は佐賀郡大和町・神埼郡脊振村、南は佐賀郡東与賀町・川副町と接しており、概観すると南北に長い市域である。

友貞遺跡の所在する金立町は、市域の北部にあたり、町域の北部が脊振山系に連なる山塊が所在し、南部がそこから延びる低丘陵や水田・畑地が広がっている。

友貞遺跡は同町南部の金立町大字千布字友貞にあって、地形的には沖積地との境に近い複合扇状地に立地している。周辺は水田が広がり、その中に高畑が点在している。現代の開発はこの調査地周辺にはほとんど及んでいないが、地元で聴取した数十年前に高畑の一部を地下を行なったということであった。発掘調査地区はこのような地区の水田・高畑であり、標高は4～5mを測る。高畑の部分は遺構の残存状況も良好であったが、水田部分は地元聴取のとおりに削平がなされていた部分もあった。周辺には平成3年度に発掘調査を実施した千布二本黒木遺跡や昭和58年度に発掘調査を実施し甕棺墓群を検出した東千布遺跡等がある。

### 2. 歴史的環境

佐賀市域北部は埋蔵文化財の宝庫であり、特に金立・久保泉町が所在する脊振山系南麓がその密度が高い。以下Fig. 1の遺跡分布図の範囲内で周辺遺跡の様相を概観する。

旧石器時代では、久保泉町の藤付E遺跡で台形石器等の断片的資料が採集されているのみで詳しい状況は現在のところ明らかではない。

縄文時代では、金立山南麓周辺で近年発掘調査例が増え、その概要が少しずつ明らかになってきた。<sup>註1</sup>金立開拓遺跡で早期・前期・後期・晩期、<sup>註2</sup>来迎寺遺跡で中期・後期、<sup>註3</sup>大門西遺跡では後期・晩期の資料が得られている。また、金立町の南部に位置する低湿地遺跡である東名遺跡では縄文早期の遺物を検出しており、その遺物の重要性だけでなく、縄文時代の海岸線を研究する上で貴重な遺跡である。

弥生時代になると遺跡占地在南域に及び、遺跡数・範囲ともに拡大する。金立町では支石墓<sup>註4</sup>を検出した黒土原遺跡、甕棺墓<sup>註5</sup>を検出した東千布遺跡・六本黒木遺跡・金立開拓遺跡・大門遺跡、<sup>註6</sup>堅穴住居<sup>註7</sup>を検出した大野原遺跡、<sup>註8</sup>久富遺跡、<sup>註9</sup>掘立柱建物を検出した千布二本黒木遺跡、久保泉町では100基以上の支石墓<sup>註10</sup>を検出した丸山遺跡、<sup>註11</sup>堅穴住居<sup>註10</sup>を検出した琵琶原遺跡・村徳永遺跡、掘立柱建物を検出した立野遺跡。村徳永遺跡等がある。

古墳時代では墳墓としては、4世紀末の築造と推定される銚子塚前方後円墳・6世紀前半の関行丸前方後円墳をはじめとして、脊振山南麓及びその南部周辺には多数の古墳群が築造さ

れ、この周辺はさながら古墳のベルト地帯とも言える様相を呈している。その発掘調査は九州横断自動車道（現長崎自動車道）建設に伴う発掘調査が大半を占め、西から三郎山遺跡・大門西遺跡・六本黒木遺跡・金立開拓遺跡（以上金立町）、藤付遺跡・西原遺跡・鈴隈遺跡等（以上久保泉町）がある。

同時代の集落遺跡については、古墳の調査ほど充実はしていないが、それでも近年その調査例が増加してきている。西原遺跡・泉三本栗遺跡・徳永遺跡・大野原遺跡等があり4～5世紀の堅穴住居を検出している。

奈良・平安時代では、大日遺跡・古村遺跡・原ノ町遺跡から掘立柱建物、泉三本栗遺跡・上和泉遺跡からは井戸・土壙等や同時代の良好な遺物が出土している。また、平成3年頃に発掘調査を実施した大野原遺跡は、古代官道の推定地にあたり、道の側溝と考えられるものを確認している。

中世以降の遺跡には、立野遺跡・本村遺跡・徳永遺跡等があり、本村遺跡の調査では一辺40～70mの方形区画溝を伴う居館跡を、徳永遺跡では一辺100～130mの方形区画溝（発掘調査中）を検出した。近年この時代の調査例が増加してきており、佐賀市域の中世の集落・居館の在り方が少しずつ解明されてきている。

- 註1:高瀬哲郎ほか【大門西遺跡】 佐賀県文化財調査報告書第51集 佐賀県教育委員会 1980
- 註2:蒲原宏行ほか【金立開拓遺跡】 佐賀県文化財調査報告書第77集 佐賀県教育委員会 1984
- 註3:加藤元信 【来迎寺遺跡】 佐賀市文化財調査報告書第27集 佐賀市教育委員会 1990
- 註4:福田義彦 【黒土原遺跡】 佐賀市文化財調査報告書第19集 佐賀市教育委員会 1987
- 註5:福田義彦 【東千布遺跡】 佐賀市文化財調査報告書第15集 佐賀市教育委員会 1985
- 註6:木下之治 【大門遺跡-第1次調査-】 佐賀市文化財調査報告書第8集 佐賀市教育委員会 1972  
木下之治 【大門遺跡-第2次調査-】 佐賀市文化財調査報告書第9集 佐賀市教育委員会 1973
- 註7:西田 巖 【大野原遺跡】 佐賀市文化財調査報告書第48集 佐賀市教育委員会 1993
- 註8:木島慎治 【久富遺跡】 佐賀市文化財調査報告書第39集 佐賀市教育委員会 1992
- 註9:西田 巖 【千布二本黒木遺跡】 佐賀市文化財調査報告書第47集 佐賀市教育委員会 1993
- 註10:木島慎治 【村徳永遺跡-E・F・G・H地区】 佐賀市文化財調査報告書第32集 佐賀市教育委員会 1990
- 註11:木下之治 【銚子塚】 佐賀市教育委員会 1976
- 註12:田平徳栄ほか【三郎山遺跡】 佐賀県文化財調査報告書第 集 佐賀県教育委員会
- 註13:田平徳栄ほか【西原遺跡】 佐賀県文化財調査報告書第66集 佐賀県教育委員会 1983
- 註14:蒲原宏行 【鈴隈遺跡】 佐賀県文化財調査報告書第 集 佐賀県教育委員会
- 註15:福田義彦 【泉三本栗遺跡】 佐賀市文化財調査報告書第18集 佐賀市教育委員会 1987
- 註16:木島慎治 【大日遺跡】 佐賀市文化財調査報告書第25集 佐賀市教育委員会 1989

- 註17:木島慎治ほか【南宿遺跡・本村遺跡・阿高遺跡・牟田寄遺跡・村徳永遺跡・古村遺跡】佐賀市文化財調査報告書第28集 佐賀市教育委員会 1990
- 註18:西田 巖ほか【原ノ町遺跡・東高田遺跡・樺木遺跡・北宿遺跡・南宿遺跡】佐賀市文化財調査報告書第38集 佐賀市教育委員会 1992
- 註19:福田義彦 【上和泉遺跡】佐賀市文化財調査報告書第20・21集 佐賀市教育委員会
- 註20:福田義彦 【立野遺跡・村徳永遺跡】佐賀市文化財調査報告書第26集 佐賀市教育委員会 1989
- 註21:前田達男 【本村遺跡-1・2区の調査-】佐賀市文化財調査報告書第29集 1990

### Ⅲ. 調査の概要

#### 1. 調査区設定等の概要

調査地点は水路予定地及び高畑削平予定地であるため、点在することになり1～6区に分割されている。1・5区が畑地、2・3・4・6区が水田部分であった。

調査は、機械力による表土掘削から行なった。表土除去後、国土座標を基準に5m方眼に杭打ちをし、遺構配置図及び全体平面図作成の基準とした。グリッド名はこの方眼杭に任意に東西方向にアルファベット、南北方向に算用数字を用い、それが交わる区画をそのグリッド名称とした。(例 A-1グリッド)

遺構の呼称は、その遺構の分類記号の後に算用数字を入れ、連番号とし番号が重複しないようにしている。遺跡の略号はTBSであり、区毎の表現はTBS-1などとした。

#### 2. 調査成果の概要

1～6区に分割されているため、以下その概要を各調査区ごとに述べる。

1区 高畑部分であり、60～70cmの耕作土・堆積土下(暗黒褐色系)に茶褐色系の基盤面があり、そこに遺構が掘り込まれている。検出遺構には土塋・溝・小穴がある。調査区が支線水路予定地で狭隘なため溝の全容は不明。検出遺物は土塋・溝から中世の土師器等を検出したが細片が多い。

2区 水田部分であり、幹線・支線水路予定地である。調査区はL字状を呈する。遺構は耕作土下20～30cmの淡黄褐色(粘質土)の基盤に掘り込まれ、土塋・井戸・溝・小穴を検出した。これらの遺構の中でL字の角にあたる付近で検出した溝は方形区画溝のコーナー部分にあたるものと推定されるが、大半が調査区外に当り、現況水田下に保存されている。概観すると室町時代の出土遺物が主流である。

3区 水田部分である。1・2区の所在する水田・畑地の間には現況水路が所在しているので、この水路が中世にも所在したのものならば3区の遺跡の広がりには別の性格を有するものか。深さ・基盤面等は2区同様であった。検出遺構には溝・土塋・井戸・掘立柱建物・小穴等がある。これらの中で南北方向の大溝と掘立柱建物の軸線がほぼ平行関係にあるので、この溝は集落もしくは館を囲むものである可能性もある。時期的には室町時代を中心としたものとする。

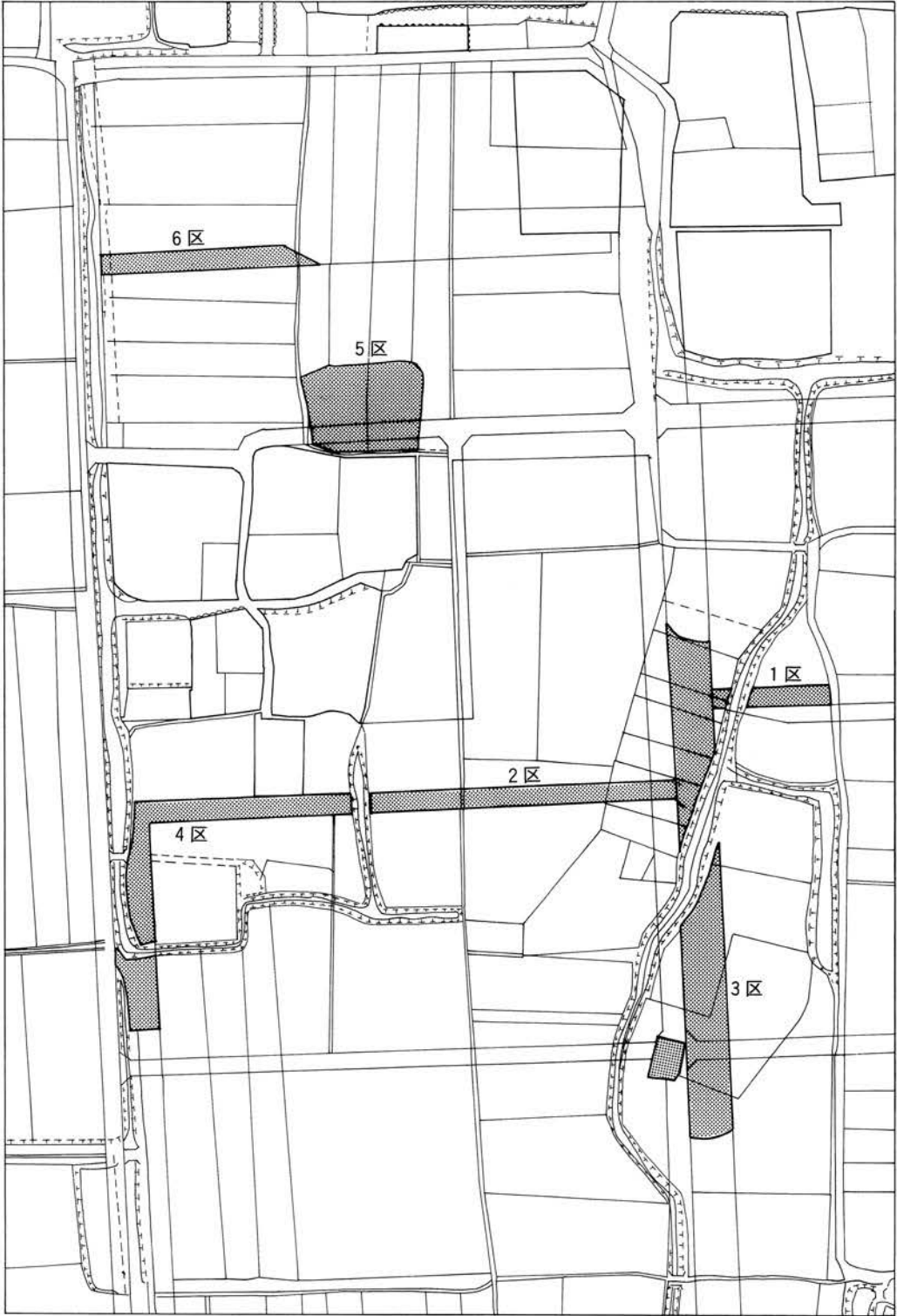


Fig.2 友貞遺跡周辺見取図 (S = 1/2,000)

4区 水田部分であり、今回の調査地区では最西端にあたる、この地点の南部と西部には遺跡がないことが平成3年度と平成4年度の確認調査で明らかになっている。遺跡の端部にあたっているためか埋土も他地点よりも深く、基盤層は耕作土下50~70cmに検出した。この地区は2区から西に延びる支線水路予定地であるため狭隘で細長い調査区となった。主な検出遺構には、土壌・掘立柱建物・溝・小穴がある。時期的には室町時代を中心とするものである。この地区に接して、地元で「中島」と呼ばれている部分がある。平成5年度調査区の「土生島」と呼ばれている部分は、中世の館（砦）であったことを考えると、今回の調査地区周辺にも中世の館が所在していた可能性が高い。

5区 高畑部分であるが、西半部は数十年前宅地であったらしい。埋土は集落に接する南部が深く、北部が浅い。その深さは地表下60~80cmを測る。基盤面は黄褐色の若干砂が混入する粘質土を主体としていた。検出遺構は弥生時代・古墳時代・中世の所産であった。弥生時代のものとしては、1間×1間の掘立柱建物、土壌等を検出した。古墳時代の主な検出遺構には井戸がある。この中の1基からは甕がほぼ完形の状態で7個体分一括して検出した。中世の遺構には溝・小穴がある。溝は調査区外に及んでおり、その全体規模・性格等は不明。

6区 東西に延びる支線水路予定地である。耕作土下30cmで黄褐色粘土の基盤層に至る。検出遺構には井戸・土壌・溝・小穴がある。時期的には室町時代から江戸時代の所産である。今回の調査区では最も遺構密度が低い地点であったが、調査区中央で検出した幅3m程度の溝は区画溝である可能性があり、中世集落の占地を考える上で重要なものとなろう。

## IV. 調査の記録 — 1区 —

### 1. 土壌と出土遺物

調査区南西隅で2基検出した。双方とも楕円形を基調とするものである。

#### SK006土壌 (Fig. 3)

E-2グリッドで検出した。上面の平面形は東西にやや長い楕円形を呈する。掘込み面中央部で南北1.14m、東西1.57m、深さ0.98mを測る。底面は上面掘込みの面積に比して狭く起伏がある。壁は細かく湾曲しながら比較的角度をもって立ち上がる。

埋土はセクションの崩壊で図化できなかったが、淡褐色を基調とし下層になるに従い粘質を増す。出土遺物には土師器があるがほとんど細片であった。

#### SK007土壌 (Fig. 4)

E・F-2グリッドで検出した。上面の平面形は南北に長い楕円形を基調とするものと考えられるが、南端部が調査区外に及んでいるため確定できない。中心部で南北の検出長2.1

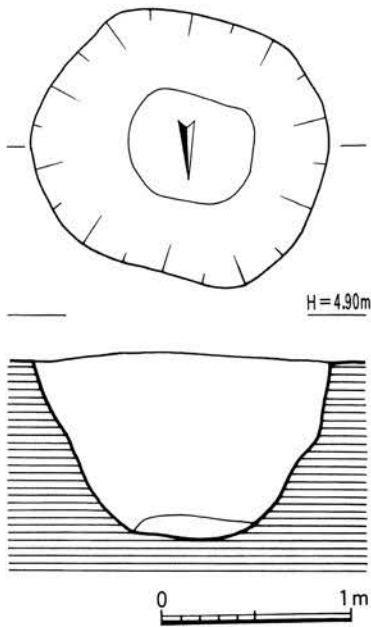


Fig. 3 SK006 土壙  
実測図 (S = 1/40)

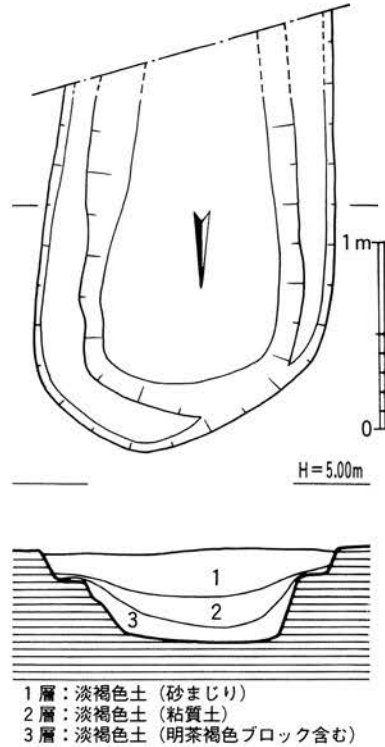


Fig. 4 SK007 土壙  
実測図 (S = 1/40)

- 1層：淡褐色土 (砂まじり)
- 2層：淡褐色土 (粘質土)
- 3層：淡褐色土 (明茶褐色ブロック含む)

m、東西1.55m、深さ0.48mを測る。掘り方は2段掘り状であり、掘込み下0.1m付近に平坦な部分がある。底面は舟底状を呈し壁は比較的角度をもって立ち上がる。

埋土は3層に分類でき、概観すると下部に向うに従い粘質を増す。出土遺物は土師器皿等を少量検出したがその大半が細片であった。

#### SK008 土壙 (Fig. 5)

E-1グリッドで検出した。上面の平面形は円形を基調とするものであるが、南北方向にやや長い。中心部で南北0.66m、東西0.53m、深さ0.76mを測る。掘り方は2段掘りの様相を呈し、掘込み下0.6m付近に平坦部分がありほぼ一巡する。この部分が壁方向にやや広がり遺構断面は袋状を呈する。底面は狭くわずかな起伏がある。

埋土は基本的には3層に大別でき、上層から淡黒褐色土・淡褐色土・淡黄褐色土となっている。出土遺物は他の遺構同様少なく、土師器細片を少量検出した。

## 2. 溝と出土遺物

この調査区では7条検出した。その中で残存状況の良好なものを抽出し以下に記す。断面図はFig. 6、平面図はFig. 7を参照のこと。また、出土遺物については僅少であるためまとめて記述する。

### SD001 溝

調査区東端から中央部分まではほぼ東西方向に延び、そこから南折してコーナーをつくる。検出全長約20m、幅0.65m、深さ0.25~0.35mを測る。SD002・005溝を切っている。

埋土観察はFig. 6中のA-B及びC-D間で行ったが淡黒褐色系の土壌を基調とし2・3層に分類できた。出土遺物は土師器のみであった。比較的残存状況が良好なものも検出したが、埋土上層からのものが多い。

### SD004 溝

調査区東南隅から中央部に向けて直線的に走る、検出全長14m、幅0.58m、深さ3mを測る。土層観察を行ったF-Eの断面は片側2段掘りの様相を呈するが、普遍的には1段掘りの溝である。SK009とSD002を切っている。埋土は淡茶褐色系を基調している主な出土遺物には土師器皿がある。

### SD005 溝

調査区の東端にあって南北方向に走る溝である。この溝は浅い2段掘りである。今回の調査では全長の検出もさることながら、幅さえも不明である。ただ、この溝の東部にトレンチを設定し幅を確かめるべく試したが東端は検出できなかった。しかし、底面の状況から判断すれば4m程度の幅を有するものと推定する。深さは最深部で0.35mを測る。

### 友貞遺跡1区出土遺物 (Fig. 8)

1~8まではSD001出土遺物。1・2は土師器杯。1で口径13.3cm、器高2.3cm、底径6.6cm。色調は淡褐色を基調とするが、内面の一部に煤が付着している。2は口径12.8cm、器高3.3cm、底径8.4cm。色調は淡褐色を基調とする。3は黒色土器A類の碗。底径7.8cm、残存器高2.4cm。4は土師器碗。底径7.9cm、残存器高4.4cm。5は黒色土器A類の碗。底径7.6cm、残

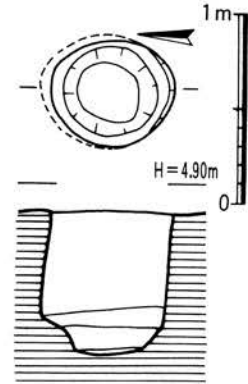


Fig. 5 SK008  
土壌実測図  
(S = 1/40)

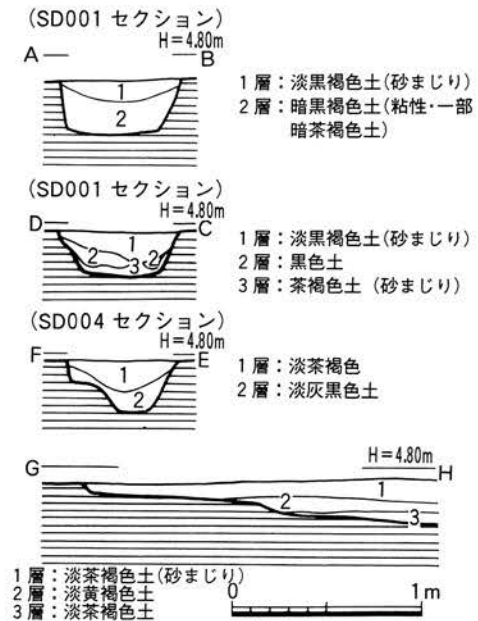


Fig. 6 1区検出溝断面図  
(S = 1/40)

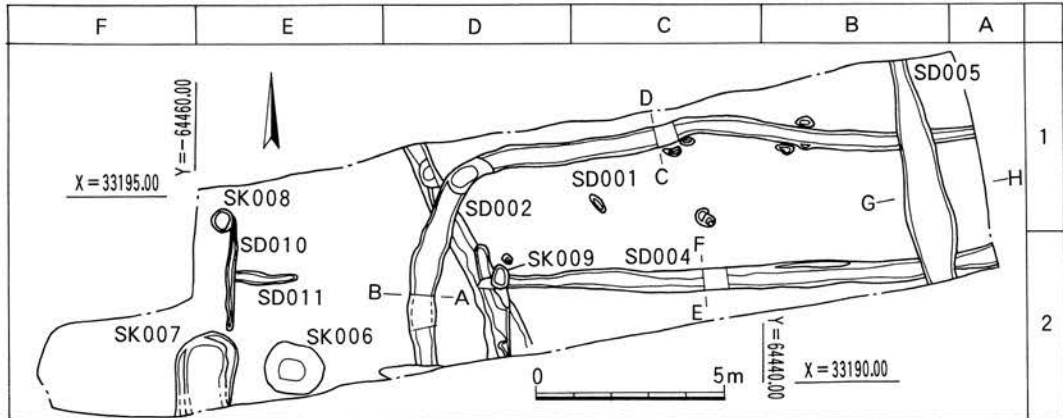


Fig. 7 友貞遺跡1区遺構配置図 (S = 1/200)

存器高1.6cm。内面にはヘラミガキが観察できる。6は黒色土器A類の碗。口径15.7cm、器高6.1cm、底径8.8cm。器面は摩耗が進んでおり調整はナデがわずかに観察できる。7も黒色土器碗。口径15cm、器高5.4cm。底径8cm。調整はナデ・ヨコナデを基調としている。9はSD002出土遺物。弥生土器の甕。残存器高3.4cmを測り、色調は褐色を基調としている。10～14はSD004出土遺物。10は青磁碗。色調は暗灰緑色を基調としている。残存器高は2.4cm。11は土師器杯。残存器高1.7、底径5cm。底面には糸切り痕を観察できる。色調は淡褐色を基調としている。12も土師器杯。口径10.6cm、器高3.6cm、底径3.6cm。色調は淡褐色を基調とする。外面底部には糸切り痕がある。13・14は土師器鍋。13で口径27.2cm残存器高8.8cm。調整は内面ハケ目、外面ナデを基調としている。14は残存器高9.4cm。調整は13と同じ。色調は淡褐色を基調としている。15～17はSD008出土遺物。3個体とも瓦質土器の摺り鉢。15で残存器高4.6cm、16で残存器高6.9cm、17で口径28.4cm、器高11.2cm、底径10.4cmを測る。調整は摩耗のため明確ではないが、ヨコナデ・ナデを基調としている。色調は褐色・明褐色を主体としている。18はSK009出土遺物の杯。口径7.7cm、器高2.5cm、底径3.9cm。底面外部には糸切り痕がある。19・20は1区の表土下層からの出土遺物。19は弥生土器の甕。残存器高7cm。調整はナデ・指頭圧を基調としている。20は陶器鉢か。残存器高2.5cmを測り、色調は暗緑色・を基調としている。

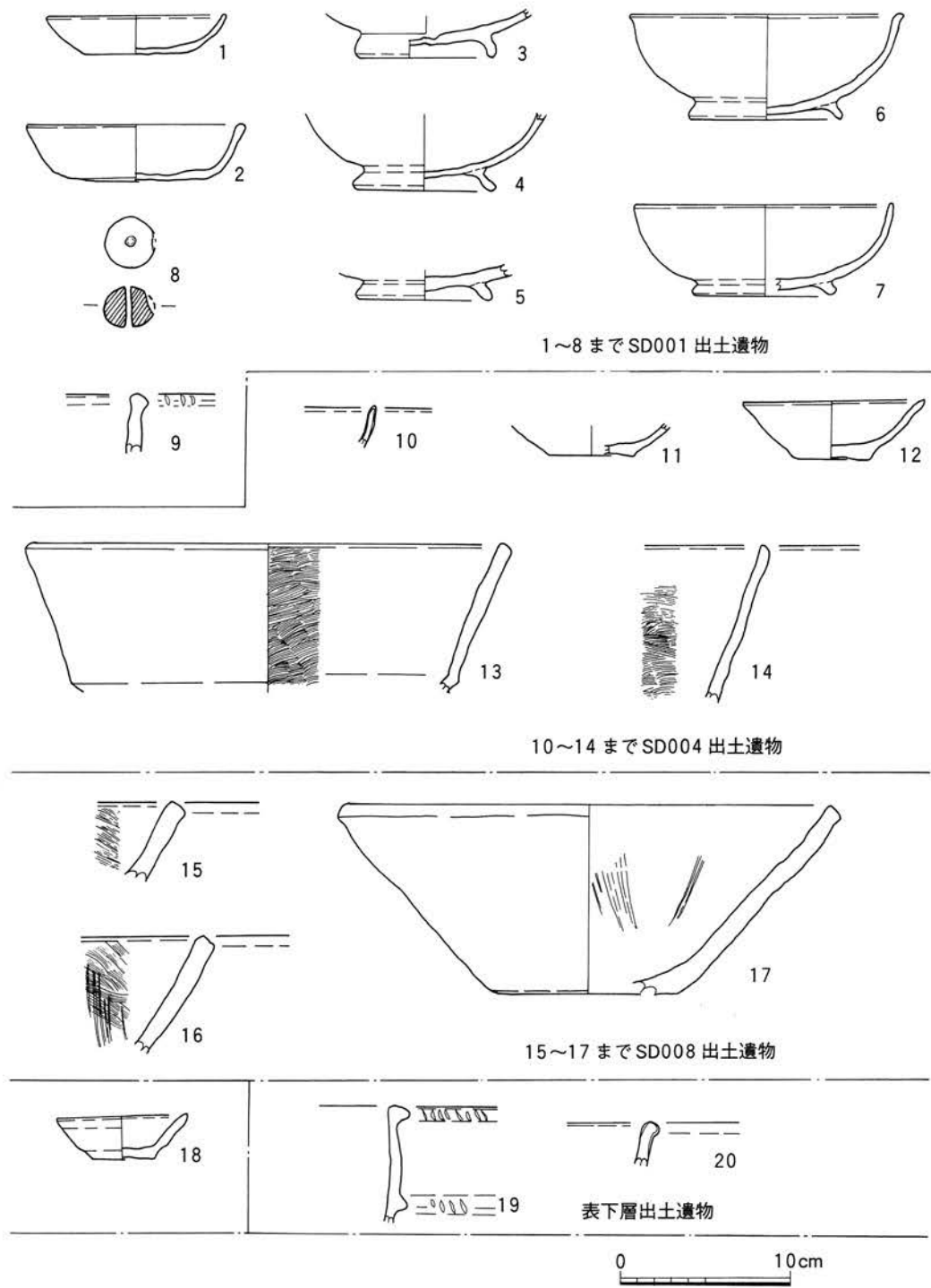


Fig. 8 友貞遺跡1区出土遺物実測図 (S = 1/4)

## V. 調査の記録 ー 2 区 ー

土壌・井戸・溝を検出した。この調査地点は中世集落の縁辺部にあたるものと思われ遺構密度は低い。

### 1. 土壌と出土遺物

南北方向の幹線水路予定地南半に集中する傾向を見せる。上面の平面形は楕円形・隅丸長方形・不定型等があり、バラエティに富んでいる。しかし、埋土の状況や出土遺物の状況等を観察すると全体的に似通っており、その性格は共通しているものかもしれない。遺構の時期は細片ではあるが中世の土師器を検出したのでこの時代に比定した。

#### SK107土壙 (Fig. 9)

E-10グリッドに所在する。上面の平面形は東西に長い楕円形を呈する。中心部で東西1.01m、南北0.65m、深さ0.27mを測る。底面には小さな起伏があり、壁は比較的なだらかに立ち上がる。東端部の段掘りは遺構の切り合い関係を示すものではない。

埋土は2層に分かれ、淡黒褐色系土を基調としている。出土遺物には弥生土器・須恵器・土師器等があったが全て細片であった。

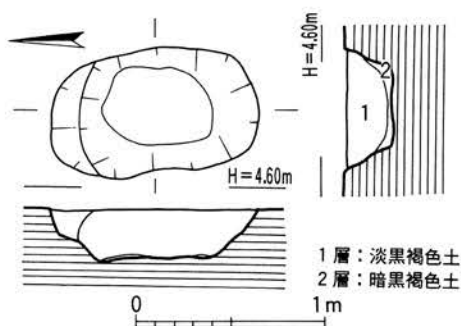


Fig. 9 SK107土壙実測図 (S=1/40)

#### SK108土壙 (Fig. 10)

D-10グリッドに所在する。上面の平面形は東西に長い楕円形を呈するが、東端部分は他遺構と切り合っている。中心部で東西1.43m (推定)、南北0.7m、深さ0.36mを測る。底面にはわずかな起伏があるが概ね平坦である。壁は四方とも比較的角度的をもって立ち上がる。

埋土は黒灰色土系のものであった。出土遺物は鉢と考えられる土師器片を1点のみ検出した。

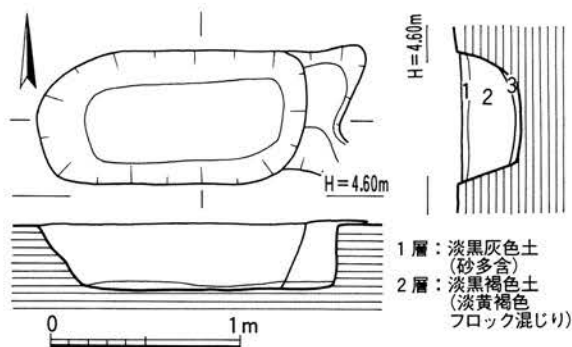


Fig. 10 SK108土壙実測図 (S=1/40)

#### SK109土壙 (Fig. 11)

D-10グリッドに所在する。上面の平面形は東隅丸の三角形状を呈するが、元来南北にやや長い楕円形を呈していたものか。中心部で南北0.96m、東西0.73m、深さ0.36mを測る。東壁ぎわには掘込み下0.07m付近に弧状の平坦部分がある。底面は概ね平坦である。壁は南

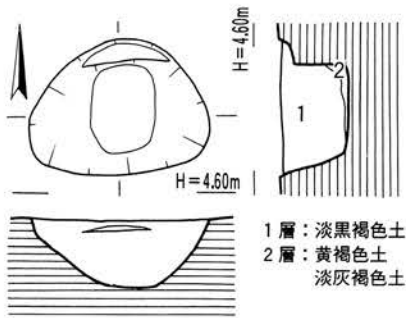


Fig. 11 SK109 土坑実測図 (S = 1/40)

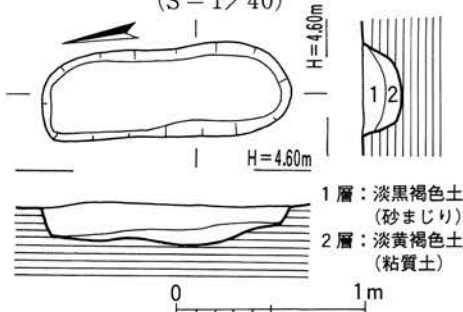


Fig. 12 SK110 土坑実測図 (S = 1/40)

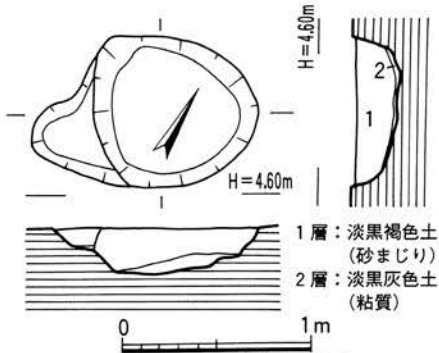


Fig. 13 SK111 土坑実測図 (S = 1/40)

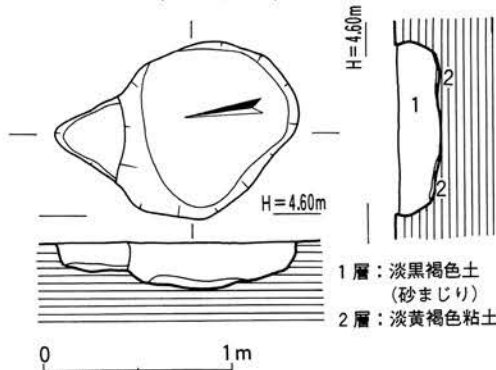


Fig. 14 SK112 土坑実測図 (S = 1/40)

北が比較的なだらかで、東西が角度をもって立ち上がる。

埋土は2層に分類でき淡黒褐色系土を基調とする。出土遺物には弥生土器・土師器等があるがいずれも細片であった。

#### SK110 土坑 (Fig. 12)

D-10グリッドに所在する。上面の平面形は南北に長い楕円形を呈する。中心部で南北1.27m、東西0.5m、深さ0.23mを測る。底面には大きな起伏があり、断面は舟底状を呈する。壁は南北が比較的的角度をもって立ち上がるのに対し、東西は緩やかな立ち上がりを見せる。

埋土は淡黒褐色土系を基調とし2層に分類できる。出土遺物には土器極細片を微量検出したが、弥生土器か中世の土師器かの識別はできなかった。

#### SK111 土坑 (Fig. 13)

C-9グリッドに所在する。上面の平面形は不定型を呈するが、北西部の突出部分は他遺構との切り合いと考えられる。遺構本体の中心部で東西0.87m、南北0.8m、深さ0.36mを測る。底面は全域にわたって起伏があり、壁は比較的的角度をもって立ち上がる。

埋土は黒褐色土系を基調としたもので、2層に分層できる。出土遺物には土師器皿等の細片を12~13点検出した。

#### SK112 土坑 (Fig. 14)

C-8グリッドに所在する。上面の平面形は不定型を呈する。これもSK111cmと同じく北部の突出部分は他遺構との切り合いを有するものである。新旧関係は明確にで

きなかった。遺構本体の上面の中心部で東西0.93m、南北1m程度、深さ0.25mを測る。底面には大きな起伏があり、壁は内傾しながら立ち上がる。

埋土は淡黒褐色土系のものを基調とし、2層に分層できる。出土遺物は土器の極細片を微量検出したが、弥生土器か土師器かの識別もできない程度であった。

#### SK113 土壙 (Fig. 15)

D-8グリッドに所在する。上面の平面形は東西に長い隅丸長方形を呈する。中心部で東西0.97m、南北0.67m、深さ0.2mを測る。底面には前面にわたって小さな起伏があり、壁は内傾しながら立ち上がる。

埋土は淡黒褐色土系の砂混じりのものを基調とし2層に分層できる。出土遺物は土師器細片を2点検出したが、時期・器形とも不明。

#### SK114 土壙 (Fig. 16)

D-12グリッドに所在する。上面の平面形は長楕円形を基調としているが、南部がやや崩れている。中心部で南北1.62m、東西0.59m、深さ0.1mを測る。定面には全域にわたって小さな起伏がある。

埋土は2層に分層でき、淡黒褐色土・淡褐色土からなっている。出土遺物は弥生土器細片を検出した。しかし、遺構埋土の状況・遺構の位置・形

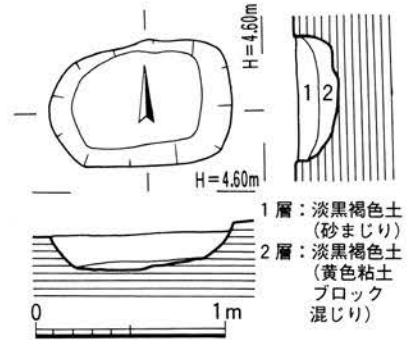


Fig. 15 SK113土壙実測図 (S=1/40)

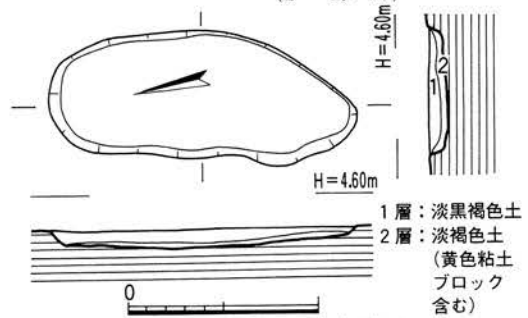


Fig. 16 SK114土壙実測図 (S=1/40)

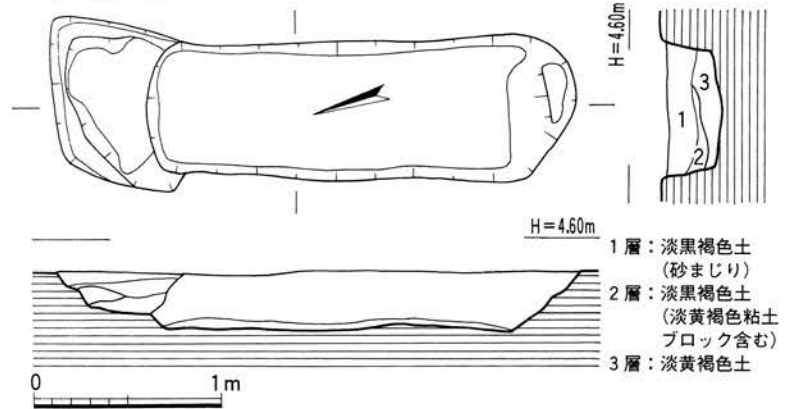


Fig. 17 SK115土壙実測図 (S=1/40)

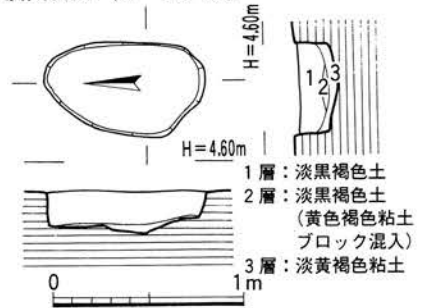


Fig. 18 SK116土壙実測図 (S=1/40)

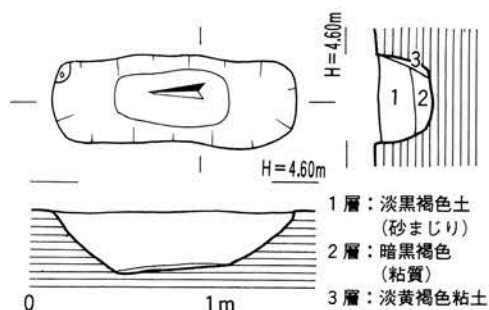


Fig. 19 SK117 土坑実測図 (S = 1/40)

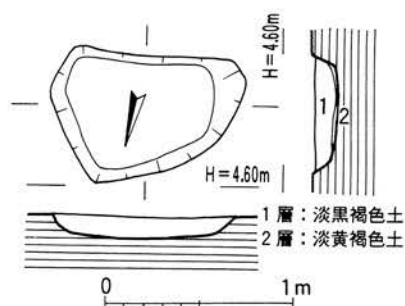


Fig. 20 SK118 土坑実測図  
(S = 1/40)

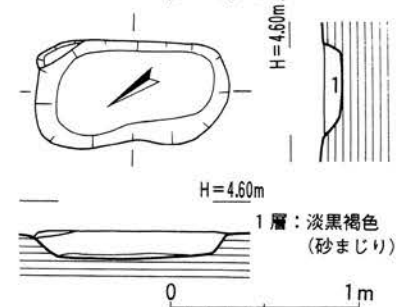


Fig. 21 SK119 土坑実測図  
(S = 1/40)

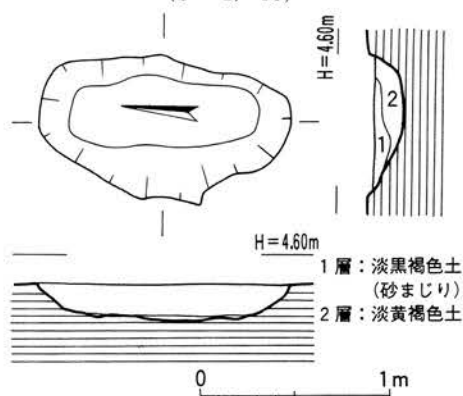


Fig. 22 SK120 土坑実測図  
(S = 1/40)

態等を考えると、当遺構も中世の所産の可能性  
がある。

#### SK115 土坑 (Fig. 17)

D-7グリッドに所在する。上面の平面形は  
溝の様相を呈する、南北に細長い土坑である。  
北端部は他遺構と切り合っており、当遺構が新。  
底面には全体的に起伏がある。壁は南北が比較  
的緩やかに立ち上がるのに対し、東西が垂直に  
近い角度で立ち上がる。

埋土は3層からなり、黒褐色土系の砂混じり  
土を基調としている。出土遺物には黒曜石片・  
弥生土器細片・須恵器細片を微量検出した。

#### SK116 土坑 (Fig. 18)

C-8グリッドに所在する。上面の平面形は  
南北に長い楕円形を基調としている。中心部で  
0.86m、東西0.48m、深さ0.23mを測る。底  
面は概ね平坦であるが中心部に5cm程度の凹  
みを有する。壁は四方とも垂直に近い角度で立  
ち上がる。

埋土は黒褐色土系のものを基調とし3層に分  
層できる。出土遺物には中世の所産と思われる  
土師器細片を3点検出した。

#### SK117 土坑 (Fig. 19)

C-7グリッドに所在する。上面の平面形は  
南北に長い隅丸長方形を呈する。底面は遺構上  
面に比して狭く、小さな起伏がある。壁は南北  
のものが緩やかに立ち上がるのに対し東西の  
ものは垂直に近い角度で立ち上がる。

埋土は3層に分層できるが、3層は壁崩落に  
よるもので、基本的には2層であるものと考え  
る。

#### SK118 土坑 (Fig. 20)

C-6グリッドに所在する。上面の平面形は

不定型を呈する。中心部で東西0.98m、南北0.63m、深さ0.12mを測る。底面には小さな起伏があり、断面は舟底状を呈する。壁は四方とも比較的なだらかに立ち上がる。

埋土は2層に分層でき、淡黒褐色土を基調としている。出土遺物は土器片が数点出土したが、細片のため弥生土器か土師器かの識別はできなかった。

SK119土壙 (Fig. 21)

C-6グリッドに所在する。上面の平面形は南北に長い楕円形を呈する。中心部で南北1.05m、東西0.5m、深さ0.15mを測る。底面は北に向けてやや傾斜しているが、概ね平坦。壁は西壁がやや角度をもって立ち上がり、他3壁は比較的緩やかな立ち上がりを見せる。

埋土は淡黒褐色土を基調とし、やや砂が混じる。出土遺物は土師器・瓦器の微細片を検出した。

SK120土壙 (Fig. 22)

D-6グリッドに所在する。上面の平面形は南北に長い隅丸長方形を呈する

が、東西掘込み部分が崩落により一部形が崩れている。中心部で南北1.34m、東西0.77m、深さ0.19mを測る。底面は全体的に小さな起伏があり、断面は舟底状を呈する。壁は四方とも緩やかに立ち上がる。

埋土は2層に分層でき、淡黒褐色土・淡黄褐色土からなる。遺物は全く検出しなかった。

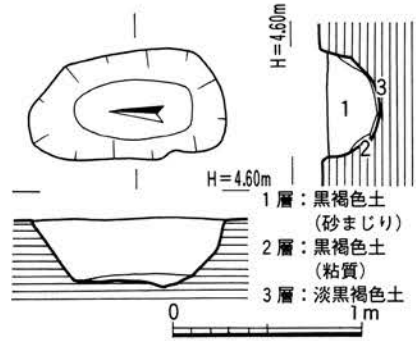


Fig. 23 SK121土壙実測図 (S=1/40)

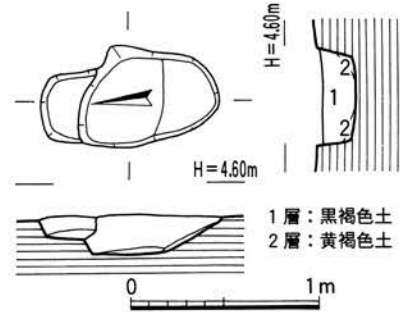


Fig. 24 SK122土壙実測図 (S=1/40)

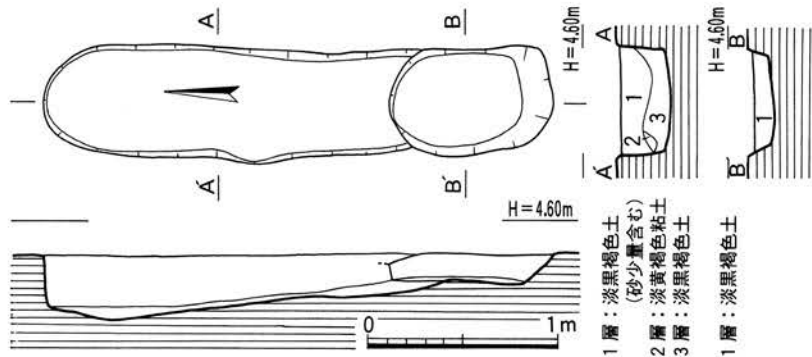


Fig. 25 SK123・124土壙実測図 (S=1/40)

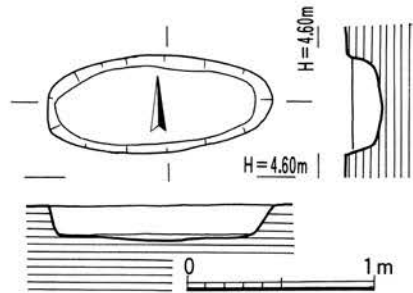


Fig. 26 SK125土壙実測図 (S=1/40)

### SK121土壙 (Fig. 23)

D-6グリッドに所在する。上面の平面形は南北に長い隅丸長方形を基調とするが、北部掘込み付近の形が一部崩れている。中心部で南北1.03m、東西0.58m、深さ0.34mを測る。底面には起伏があり南北の壁ぎわが少し深くなっている。

埋土は3層に分層でき、黒褐色土系のものを基調としている。遺物は弥生土器の細片が数点出土した。

### SK122土壙 (Fig. 24)

D-6グリッドに所在する。上面の平面形は不定型を呈するが、元来楕円形を基調としていたものと考えられる。北側の突出部分は他遺構と切り合っているものであるが、新旧関係は明らかにできなかった。当遺構本体の中心部で東西0.54m、南北0.73m、深さ0.21mを測る。底面はほぼ平坦である。壁は東西がほぼ垂直に立ち上がるのに対し、南北は緩やかに立ち上がる。

埋土は2層に分層でき、黒褐色土を基調としている。遺物は弥生土器の細片を検出した。

### SK123・124土壙 (Fig. 25)

D-5グリッドに所在する。この2遺構は切り合いがあり、SK123が新。SK123で掘込み上面の中心部で。東西0.56m、南北0.87m、深さ0.15mを測る。埋土は淡黒褐色土の1層で出土遺物はなかった。SK124は中心部で南北2.2m程度、東西0.59m、深さ0.28mを測る。底面にはわずかな起伏があり、概ね平坦であるが北壁に向って傾斜している。埋土は3層に分層でき淡黒褐色土系のものを基調としている。出土遺物は弥生土器細片を数点検出した。

### SK125土壙 (Fig. 26)

F-10グリッドに所在する。上面の平面形は東西に長い楕円形を呈する。中心部で東西1.19m、南北0.53m、深さ0.19mを測る。底面は概ね平坦で南北断面は舟底状を呈する。壁は比較的角度をもって立ち上がる。

埋土は淡黒褐色土の1層からなる。出土遺物は弥生土器細片を数点検出したのみである。

## 2. 溝と出土遺物

2区で6条検出した。これらの中で幅0.5m程度のもは出土遺物もなく、規模も小さいので割愛する。以下記述するものは確実に方形区画溝であるものや規模の大きいものである。

### SD102溝 (Fig. 27)

B~G-10~12グリッドに所在する。上面の幅はA-B部分で4.41m、深さ1.02m、東部に設定したベルト付近で幅2.8m深さ0.95mを測る。今回検出したものは(長)方形区画溝の北部短辺にあたる部分と考える。この溝の短辺の長さは約28m程度と推定できる。また、溝の内側の短辺は20.5mを測る。溝断面は土層図作成部分では若干の起伏があるが、概ね上面幅に比して浅いU字形を呈するものである。溝北端部には突出部分があるが、これは他遺構

と切り合っているものである。新旧関係は明らかにできなかったが、埋土の色調からみてさほど時代差がないものとする。

埋土は7層に分層できる。上層は淡茶褐色土（砂混じり）、下層は淡黒褐色粘質土を基調としていた。出土遺物は埋土中全域から検出したが、溝の規模から考えると出土量は少ない。検出遺物には土師器皿・鉢等がある。

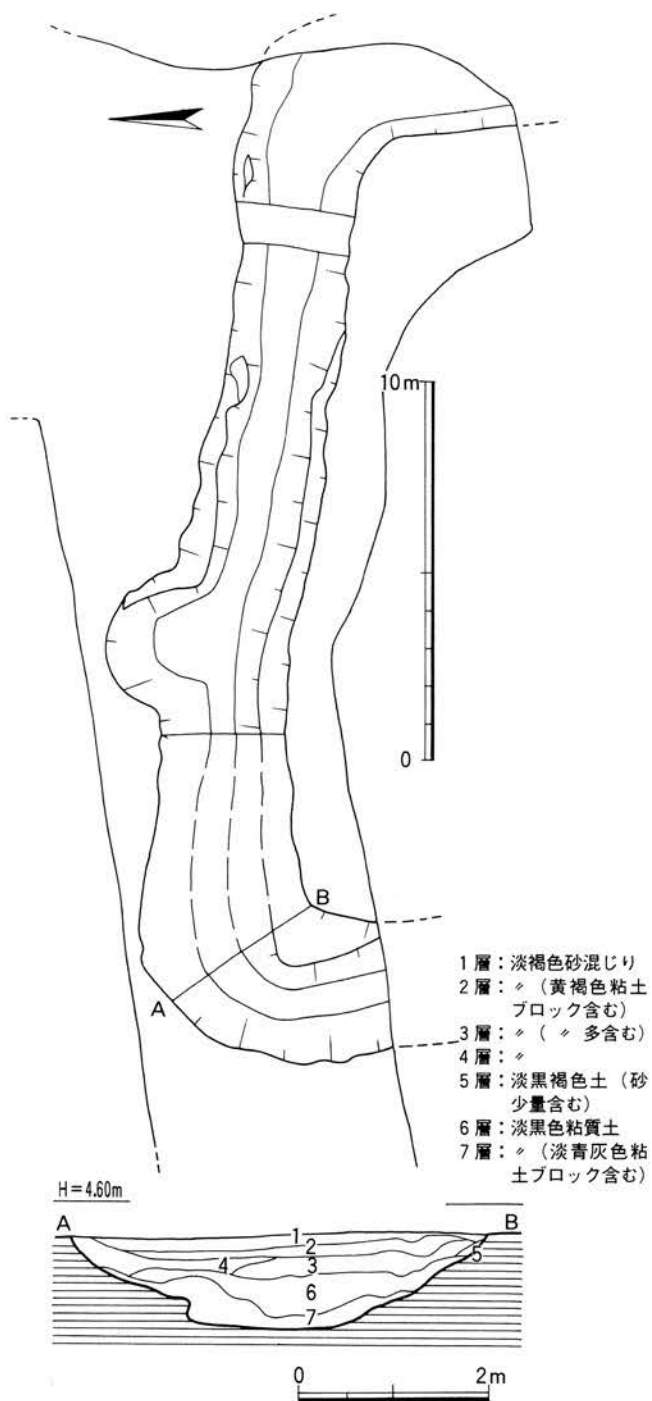
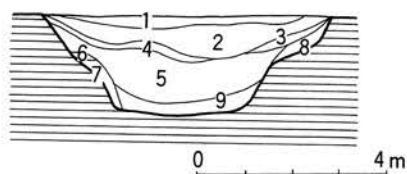
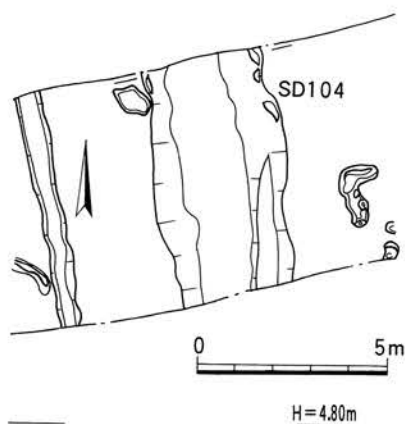


Fig. 27 SD102 溝実測図 (S = 1/200 · 1/100)



- |                           |               |
|---------------------------|---------------|
| 1層:淡茶褐色土(砂まじり)            | 5層:暗黒色土       |
| 2層:淡褐色土(黄色粘土ブロック多含む)      | 6層:黄褐色土       |
| 3層:淡黒褐色土(黄色粘土ブロック少量含む)    | 7層:淡暗黒色土      |
| 4層:淡黒褐色土(黄色、淡青灰色粘土ブロック含む) | 8層:淡黒色・黄色粘土   |
|                           | 9層:暗黒色土(砂まじり) |

Fig. 28 SD104溝実測図(S=1/200・1/100)

できる。22は口径6.6cm、器高1.9cm、底径3.2cm。底面には糸切り痕がある。23は口径7.7cm、器高2.1cm、底径4.2cm。調整はナデ・ヨコナデ、底面には糸切り痕がある。25は土師器鍋。残存器高3.6cm。調整は摩耗が著しく観察不能。色調は褐色を基調としている。26は須恵質土器の鍋。残存器高5.1cm。調整は主としてナデ・ハケ目による。色調は灰黒色を基調としている。27は土師器鍋。残存器高9.7cm。調整は主としてナデによる。28は須恵質土器の鍋か。残存器高3.1cm。調整はハケ目・ナデ、色調は灰黒色を基調としている。29・30は土師器釜。29は口径19cm、残存器高9.6cm。肩部外面に菊文様のスタンプが配されてる。調整は主としてナデ・ヨコナデによる。色調は褐色・灰褐色を基調としている。30は残存器高9.6cm。口縁部・底部を欠く。調整は主としてナデ・ヨコナデによるが、一部に工具によるナデが観察できる。色調は褐色・赤褐色を基調としている。31は青磁碗。口径は計測不能。残存器高2.8cm。釉は灰緑色を基調とする。32は青磁碗。残存器高2.6cm、高台径4.4cm。内面見込みに草花紋を配する。釉は畳付き部までかかる。色調は灰緑色を基調としている。33は青磁碗。残存器高2.5cm、高台径5.8cm。内面見込み付近にハケ目紋を配する。色調は淡灰緑色を呈する。34は青磁碗。残存器高2.5cm、高台径4.2cm。釉は畳付き部までは及んでいない。35は白磁碗。残存器高2.5cm、高台径4.2cm。釉は高台内外面には及んでいない。色調は乳白色を基調としている。36～39はSD105出土遺物。36・37は瓦質土器の鍋か。36で残存器高5.6cm。調整は

### SD104 溝 (Fig. 28)

QR-12~14グリッドで検出した。検出全長6.5m、セクション作成部分で幅3.06m、深さ1.08mを測る。東西方向の水路予定地で南北に走る溝なので方形区画溝になるかどうかの積極的な資料は得ることができなかったが、その規模から考えるとその可能性もある。底面は概ね平坦であり、断面は概観するとU字形の部類に入るのはないだろう。

埋土は9層に分層でき、概観すると上層が淡黒褐色系の砂混じりの土で、下層になるに従い粘性を増す。出土遺物は土師器皿等を少量検出した。

### 2区溝出土遺物 (Fig. 29)

21~35はSD102出土遺物。21~24は土師器杯。21は口径6.4cm、器高1.9cm、底径3cm。色調は褐色を基調とし、底面には糸切り痕が観察

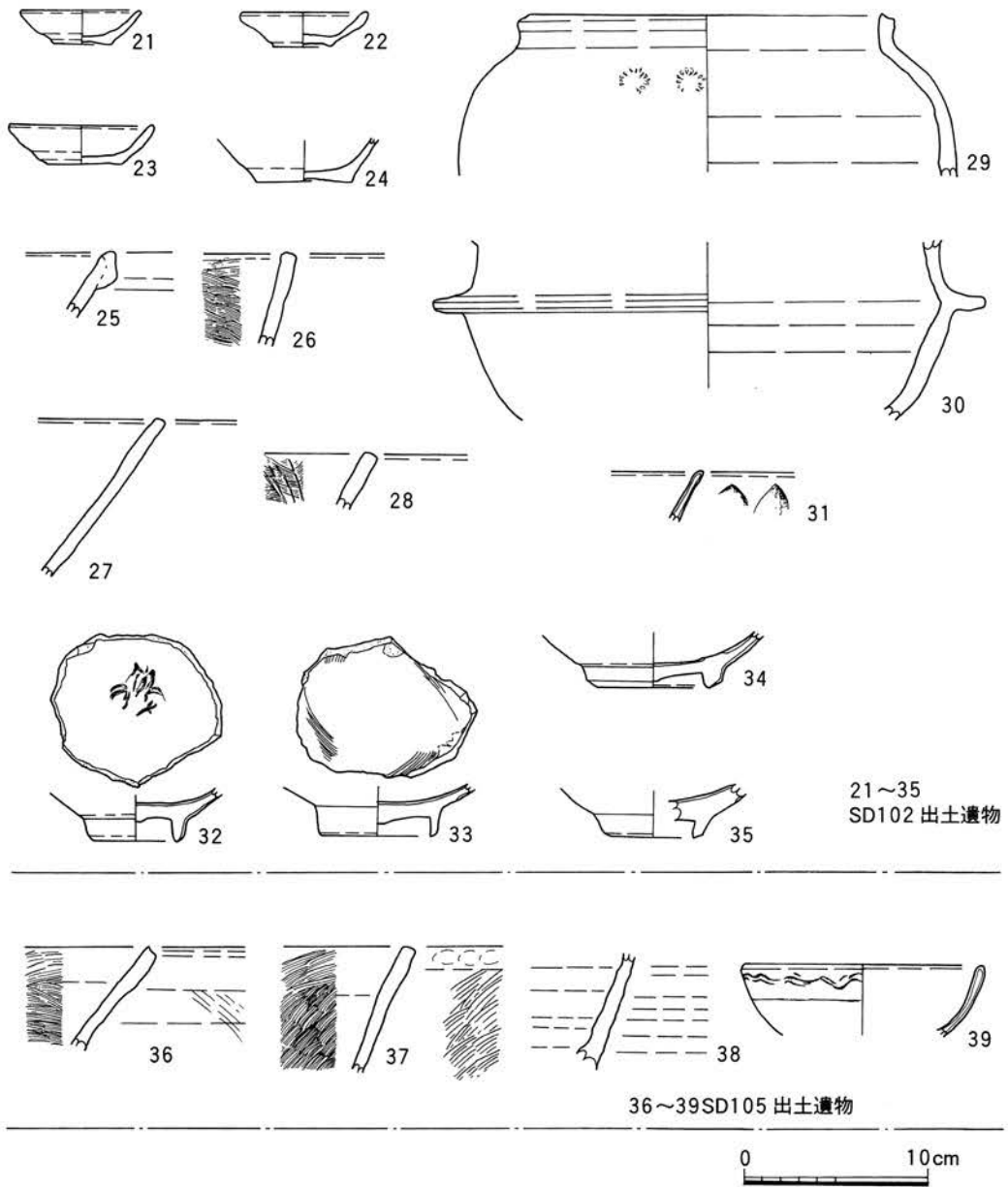


Fig. 29 2区溝出土遺物実測図 (S = 1/4)

内面ハケ目、外面ナデ・指頭圧によっている。色調は灰褐色・黒褐色を基調としている。37は残存器高6.9cm。調整は内面比較的細かいハケ目、外面粗いハケ目と口唇部は指頭圧によっている。38は陶器の壺か、残存器高6.1cm。色調は灰褐色を基調としている。39は青磁碗。口径12.8cm。残存器高3.8cm。比較的厚い釉が施され、色調は灰緑色を基調としている。

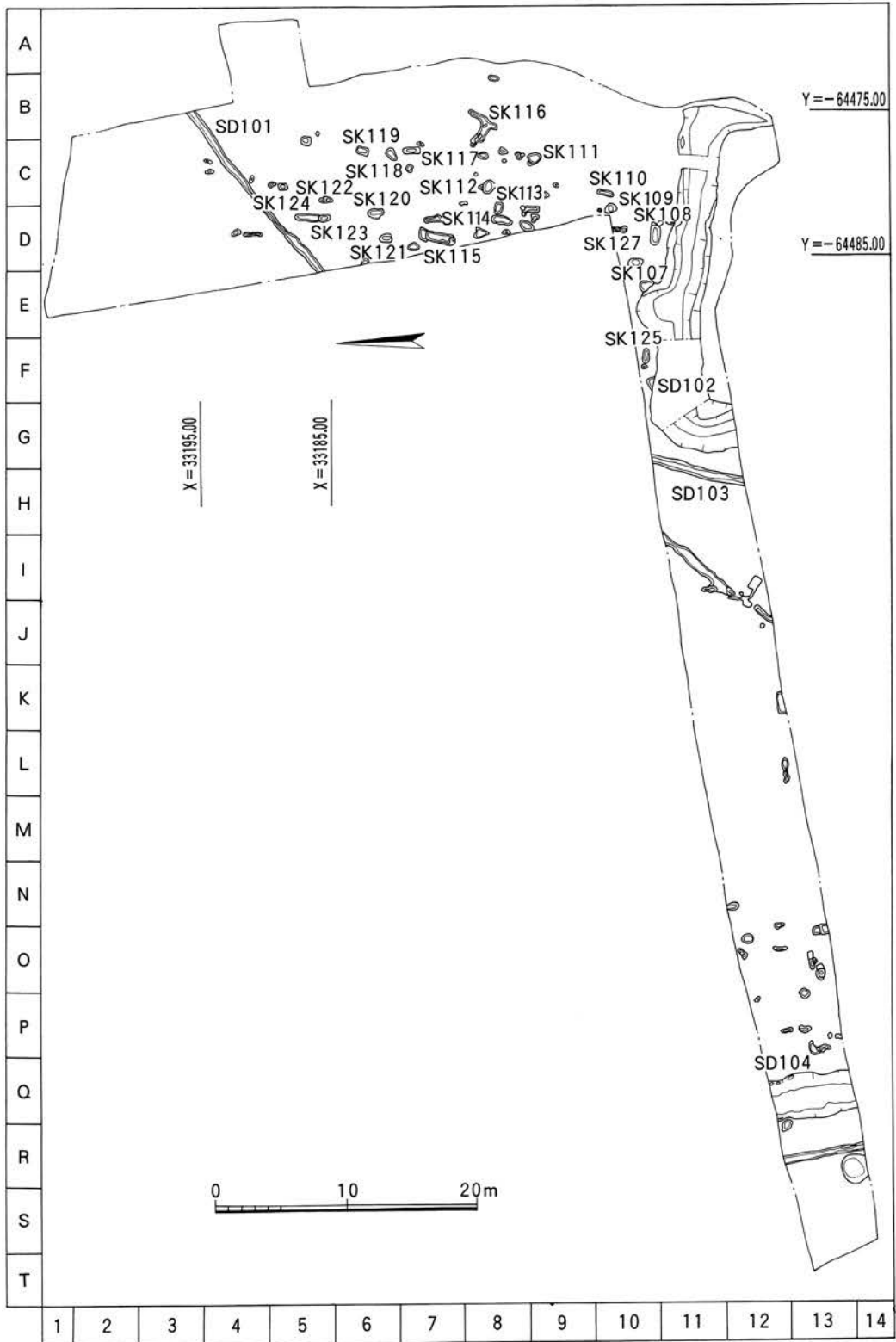


Fig. 30 友貞遺跡3区遺構配置図 (S = 1/500)

## VI. 調査の記録 — 3区 —

### 1. 土壌と出土遺物

調査区のほぼ全域で検出した。形状は円形を基調としたものが多いが、規格性が認められるものやその性格がある程度想定できるものはほとんどない。時期的には鎌倉時代から室町時代にかけてのものが大半を占める。これらの土壌の中で比較的検出状況が良好なものを抽出し以下にその詳細を記す。

#### SK304 土壌 (Fig. 31)

B-16グリッドに所在する。上面の平面形は円形を基調とするが、東西方向がやや長い。中心部で東西0.83m、南北0.84m、深さ0.51mを測る。底面は概ね平坦で壁は湾曲しながら立ち上がる。北側の掘込み下0.15m付近に平坦な部分があり半周している。

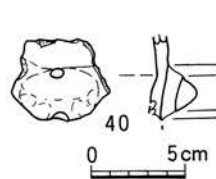


Fig. 32 SK304  
土壌出土遺物  
実測図 (S=1/40)

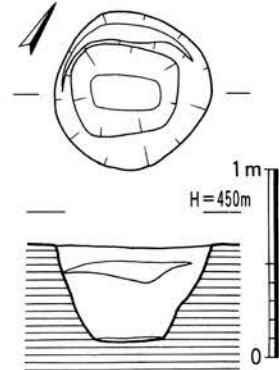


Fig. 31 SK304  
土壌実測図  
(S=1/40)

埋土は3層に分層でき、上層から淡黒褐色土・淡褐色度・灰褐色土(粘質)からなっている。出土遺物は埋土上層から微量検出したが、いずれも土師器細片であった。

#### SK304 土壌出土遺物

(Fig. 32)

40は瓦質土器の釜か。残

存器高4.4cm。調整は主として指頭によるナデ、工具によるナデが施されている。色調は暗褐色を呈する。

#### SK305 土壌 (Fig. 33)

C-15グリッドに所在する。上面の平面形は東西に長い楕円形を基調としている。中心部で東西0.9m、南北8.3m、深さ0.3mを測る。底面にはわずかな起伏があるが概ね平坦である。壁は比較的角度をもって立ち上がる。北東部掘込み下0.1m付近に平坦な部分がある。

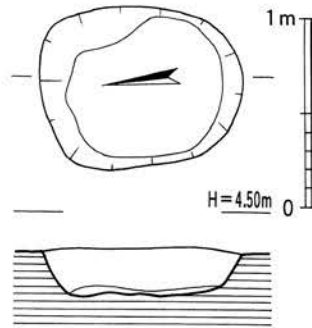


Fig. 34 SK314 土壌実測図  
(S=1/40)

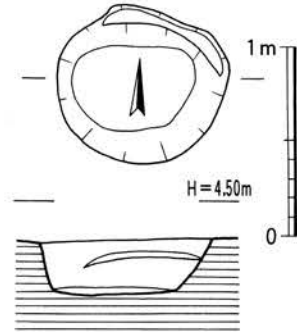


Fig. 33 SK305  
土壌実測図  
(S=1/40)

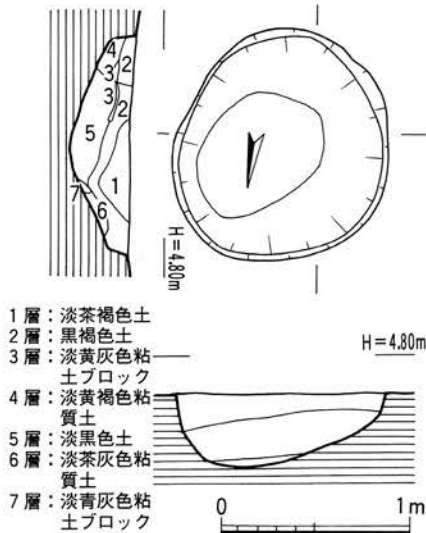


Fig. 35 SK317 土壙実測図  
(S = 1/40)

SK317 土壙 (Fig. 35)

D・E-13 グリッドに所在する。上面の平面形は元来円形を基調としていたものと思われるが、検出時にはややいびつな状況であった。中心部で2.3m、東西2.22m、深さ0.76mを測る。底面は遺構上面の面積の割りには小さく、西方に偏っており、断面は舟底状を呈する。壁は緩やかな角度でのび、掘込み下0.2~0.4m付近から直角に近い角度で立ち上がり掘込み面に至る。

埋土は7層に分層できる。ただし、南壁寄りの2~4層はその堆積状況から考えると他遺構

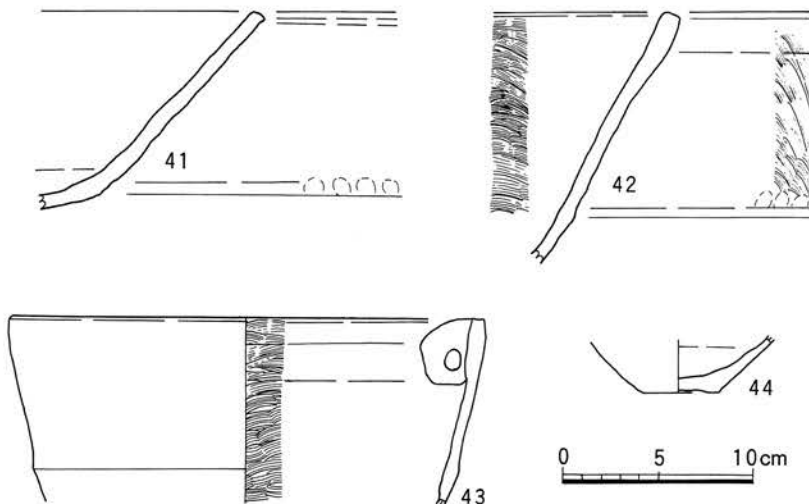


Fig. 36 SK317 土壙出土遺物実測図 (S = 1/4)

埋土は2層に分層でき、上層淡黒褐色土、下層淡褐色土からなる。出土遺物は土器微細片を検出した。

SK314 土壙 (Fig. 34)

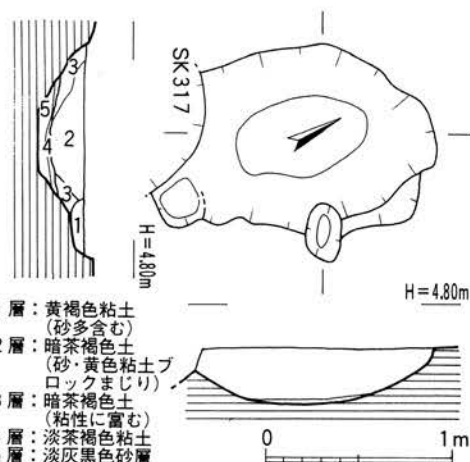
B-14 グリッドに所在する。上面の平面形は南北に長い楕円形を呈する。中心部で南北1.07m、東西0.84m、深さ0.34mを測る。底面には全体的に小さな起伏があり、壁は比較的緩やかに立ち上がる。

埋土は2層に分層でき、上層淡黒褐色土(砂混じり)、下層淡褐色土(粘質)からなっている。出土遺物は土師器細片を数点検出したが、いずれも細片であり図化できなかつた。それら細片のなかに皿底部の細片があり、外面には糸切り痕が観察できた。

との切り合  
 いである可  
 能性が高い。  
 出土遺物に  
 は土師器片  
 を少量検出  
 した。

SK317土壙出土遺物 (Fig. 36)

41~43は瓦質土器の釜。41は残存器高10.4cm。調整は外面はハケ目が施されている。内面の調整は摩耗が進んでおり不明。42は残存器高13.2cm。調整は内外面共にハケ目、口唇部がヨコナデ。色調は褐色を基調としている。43は口径25cm残存器高9.9cm。調整は主としてハケ目。外面に煤が付着している、44は土師器杯。残存器高4.1cm、底径4.1cm。底部はやや上げ底状になり、糸切り痕が確認できる。



- 1層：黄褐色粘土 (砂多含む)
- 2層：暗茶褐色土 (砂・黄色粘土ブロックまじり)
- 3層：暗茶褐色土 (粘性に富む)
- 4層：淡茶褐色粘土
- 5層：淡灰黒色砂層

Fig. 37 SK318土壙実測図 (S = 1/80)

SK318土壙 (Fig. 37)

D・E-12・13グリッドで検出した。SK317土壙と切り合いがあり当遺構が古。また、南側掘込み付近でも小穴2個から切られている。上面の平面形は南北に長い楕円形を呈する。中心部で南北検出長1.24m、東西1.2m、深さ0.29mを測る。

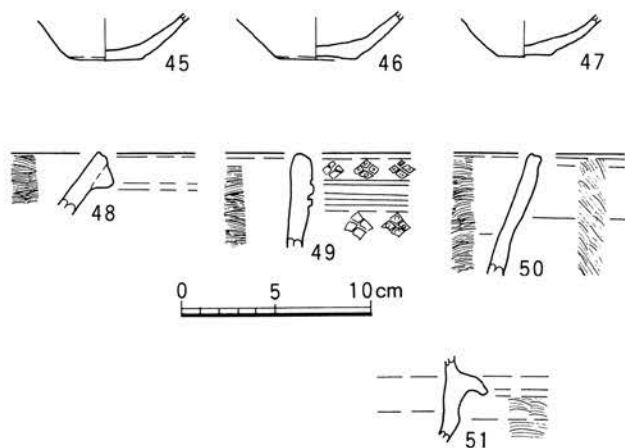


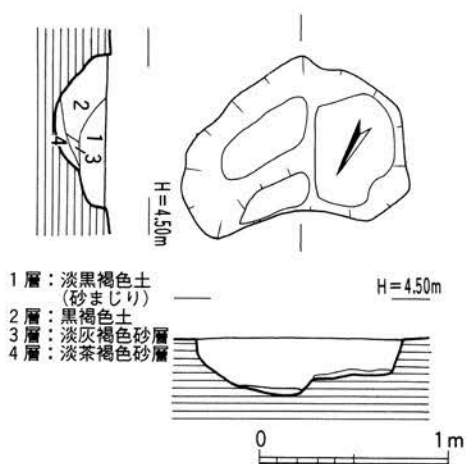
Fig. 38 SK318土壙出土遺物実測図 (S = 1/4)

底面はほぼ平坦であり、南北断面では底面と壁との境が不明瞭である。

埋土は遺構本体は4層に分層でき、茶褐色系の埋土を基調としている。出土遺物は土師器片を少量検出した。

SK318土壙出土遺物 (Fig. 38)

45~47は土師器杯。45は残存器高2.2、底径4cm。調整はナデ・ヨコナデによる。46は残存器高2.3cm、底径4.2cm。底面はやや上げ底状を呈し、糸切り痕が観察できる。47は残存器高2cm、底径2.8cm。調



- 1層：淡黒褐色土 (砂まじり)
- 2層：黒褐色土
- 3層：淡灰褐色砂層
- 4層：淡茶褐色砂層

Fig. 39 SK323土壙実測図 (S = 1/40)

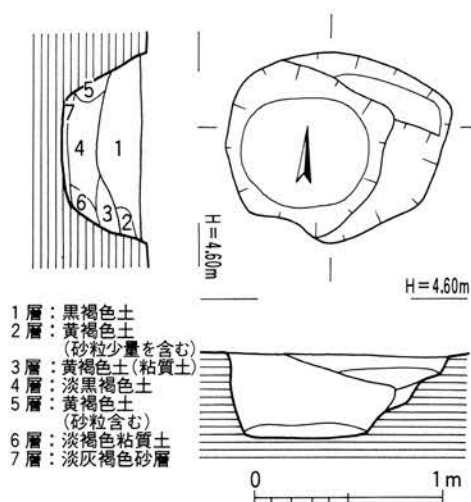


Fig. 40 SK324 土壌実測図 (S = 1/40)

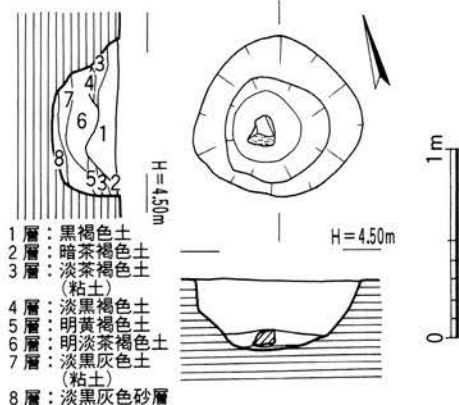


Fig. 41 SK328 土壌実測図 (S = 1/40)

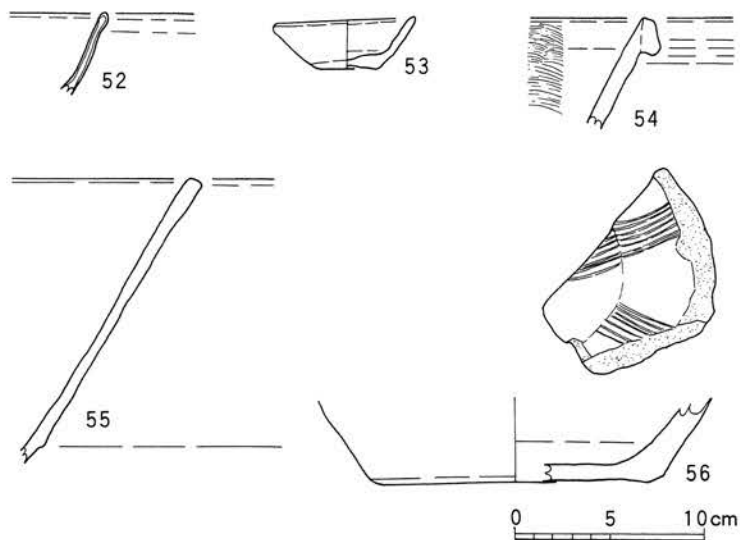


Fig. 42 SK328 土壌出土遺物実測図 (S = 1/4)

整・底部の状況は46と同様。48は土師器質土器の鍋。残存器高3.3cm。主たる調整はハケ目とヨコナデによる。49は瓦質土器の鉢。残存器高5cm。口縁部外面にはスタンプが2条の沈線の上下に配されている。調整は主としてハケ目。色調は灰黒色を基調としている。50は瓦質土器の鍋。残存器高6.6cm。調整は内外面共にハケ目。色調は褐色を基調とする。51は瓦質土器の釜。残存器高4.5cm。

SK323 土壌 (Fig. 39)

D-12グリッドで検出した。上面の平面形は不定型を呈する。中心部で東西1.64m、南北2.10m、深さ0.6m程度を測る。断面や土層の状況から考えると2遺構が切り合っている可能性が高く、南部のものが北部の土壌を切っているものと推定できる。底面は南北とも小さな起伏があり、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。

埋土は4層に分層でき、黒褐色系のものを

を基調としている。

出土遺物は土師器細片を微量検出したが、図化できるものはなかった。

SK324 土壙 (Fig. 40)

D-12グリッドで検出した。上面の平面形は不定型を呈する。中心部で東西1.16m、南北1m、深さ0.43mを測る。底面は概ね平坦であり、壁は北壁をのぞく3壁は垂直に近い角度で立ち上がる。北東部に掘込み下0.2付近に平坦な部分があり、他遺構との切り合の

可能性もあるが明確にはできなかった。

埋土は7層に分層でき黒褐色系・黄褐色系のものを基調とし

ている。また、砂粒が多く含まれている層もある。出土遺物には土師器があるが、いずれも細片であり図化できなかった。

SK328 土壙 (Fig. 41)

C-9グリッドで検出した。上面の平面形はややいびつな形であるが、元来円形を基調としていたものと考え。中心部で径1.70m程度、深さ0.70mを測る。

底面は狭くほぼ平坦である。壁は掘込み下0.6m付近に稜を有し、一周する。壁は上半部では比較的角をもつて立ち上がる。

埋土は8層に分層でき、黒褐色系・茶褐色系のものを基調としている。最下層付近で長さ20cm

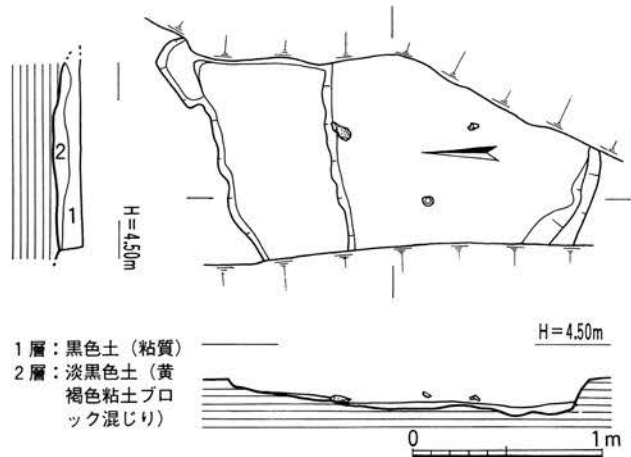


Fig. 43 SK329 土壙実測図 (S = 1/80)

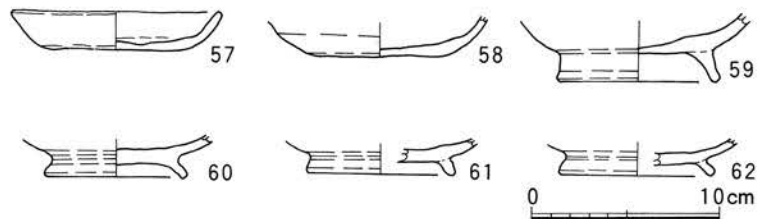


Fig. 44 SK329 土壙出土遺物実測図 (S = 1/4)

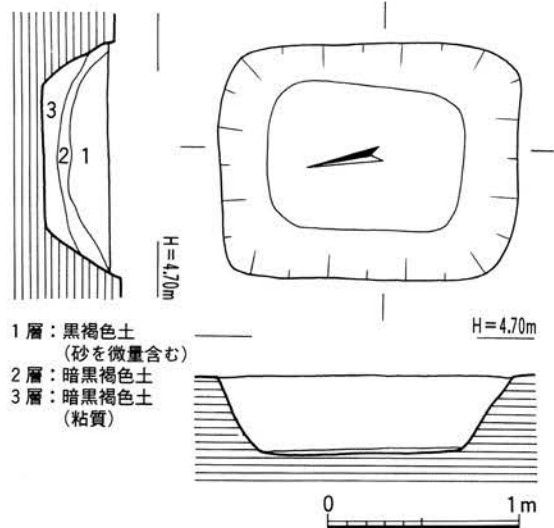


Fig. 45 SK333 土壙実測図 (S = 1/40)

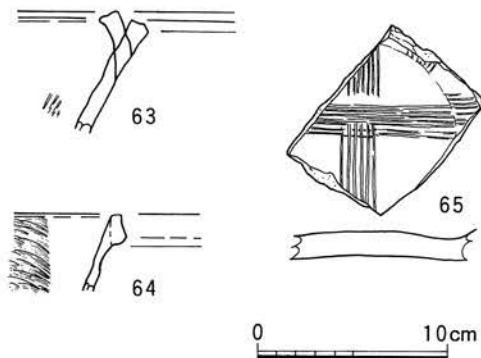


Fig. 46 SK333 土壙出土遺物実測図  
(S=1/4)

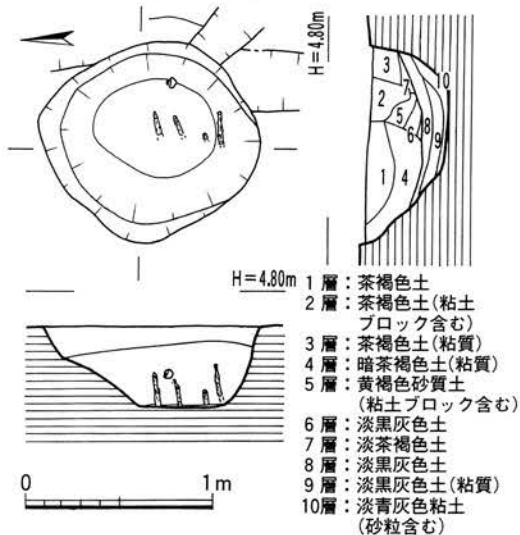


Fig. 47 SK335 土壙実測図 (S=1/80)

#### SK329 土壙 (Fig. 43)

C-8グリッドで検出した。上面の平面形は東西の掘込み面を2条の溝により大半を削平されているため本来の形状が推定できない。中心部で南北長2.7m、東西検出長2.02m、深さ0.35mを測る。底面は全体的に小さな起伏が多く、南部と北部では段差が認められる。壁は南北とも比較的角度をもって立ち上がる。

埋土は基本的には2層に分かれ黒色系のものを基調とし、粘性が非常に強いものであった。出土遺物は土師器皿を中心に少量検出した。

#### SK329 土壙出土遺物 (Fig. 44)

57~60は土師器、61・62は黒色土器。57は杯。口径10.8cm、器高2cm、底径8cm。ほぼ完形であり、色調は淡褐色を基調としている。58は残存器高2cm、底径7.8cm。内面の摩耗が進んでいる。59は残存器高3.2cm、高台径8.1cm。調整はナデ。ヨコナデによっている。

程度の礫質の石を検出した。なんら加工はされていない。出土遺物は土師器片を微量検出した。

#### SK328 土壙出土遺物 (Fig. 42)

52は青磁碗。残存器高4.3cm。釉は全面にかかり、色調は暗緑色を呈する。53は土師器杯。口径7.3cm、器高2.8cm、底径3.3cm。完形品である。底面はやや上げ底状を呈し、糸切り痕が観察できる。54は土師器鍋。残存器高5.9cm。調整は内面ハケ目、外面ナデを主体としている。口唇部外面には1条の沈線がある。55は土師器鍋。残存器高15.2cm。調整は主としてナデ・ヨコナデによる。56は土師器搦鉢。残存器高4.5cm、底径15.4cm。調整は主としてナデによっている。色調は淡褐色を基調としている。

60は残存器高2cm、高台径7.2cm。色調は淡褐色を基調としている。61は残存器高1.6cm、高台径7.6cm。色調は黒灰色を基調としている。62は残存器高1.8cm、高台径7.8cm。色調は黒灰色。

#### SK333 土壙 (Fig. 45)

D-6・7グリッドで検出した。上面の平面形は南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。中心部で南北1.58m 東西1.25m、底面はほぼ平坦、壁は比較的緩やかに立ち上がる。

埋土は3層からなり、黒褐色系のものを基調としている。出土遺物は土師器片を少量検出した。

#### SK333 土壙出土遺物 (Fig. 46)

63は土師器播鉢か。残存器高6.4cm。調整はナデ・ヨコナデ・指頭圧によっている。色調は淡褐色・褐色を基調としている。64は土師器鍋。残存器高4.1cm。調整は内面がハケ目、外面がヨコナデ・ナデを基調としている。65は須恵質土器の播鉢。残存器高1.7cm。底径は小片であるため復元不能。調整は主としてナデによっている。色調は淡褐色を基調としている。

#### SK335 土壙 (Fig. 47)

D・F-8・9グリッドで検出した。上面の平面形は円形を基調としていたものと考えるが、検出時には少々いびつになっており、南北にやや長い楕円形を呈する。中心部で南北2.3m、東西2.1m、深さ0.9mを測る。底面はほぼ平坦であり、壁は南部が急角度で立ち上がり、他は比較的緩やかな角度である。掘込み下0.2m程度付近に稜を有する。底面では径5cm程度の木杭状のものを6本検出した。

埋土は非常に複雑な堆積状況を呈し、10層に分層できた。淡褐色系のものを基調としているが、全体的にみて砂や粘土ブロックを含んでいる層が多い。出土遺物には土師器・陶器片などがある。

#### SK335 土壙出土遺物 (Fig. 48)

66~77は土師器皿。そのほとんどの底面に糸切り痕が観察できる。66は口径5.8cm、器高2cm、底径2cm。67は口径6.5cm、器高2.4cm、底径3.8cm。68は口径6.9cm、器高2.4cm、底径4cm。69は口径7.3cm、器高2cm、底径3.6cm。70は口径7cm、器高2.4cm、底径4cm。71は残存器高2.7cm、底径4.8cm。72は残存器高1.5cm、底径4.6cm。73は口径8.9cm、器高2.2cm、底径4.8cm。74は口径7cm、器高3.2cm、底径5.4cm。今回検出した皿のなかでは、特異な形状を呈する。75は口径10.2、器高3.2cm、底径5cm。76は口径11.2cm、器高3.5cm、底径4.6cm。77は残存器高3.2cm、底径4.1cm。68・70・74は完形品。78は須恵質土器の壺。残存器高7.6cm、底径7cm。底面はわずかに上げ底状を呈する。調整はロクロなどで、底面には糸切り痕がある。色調は灰褐色を呈する。79は土師器鍋。残存

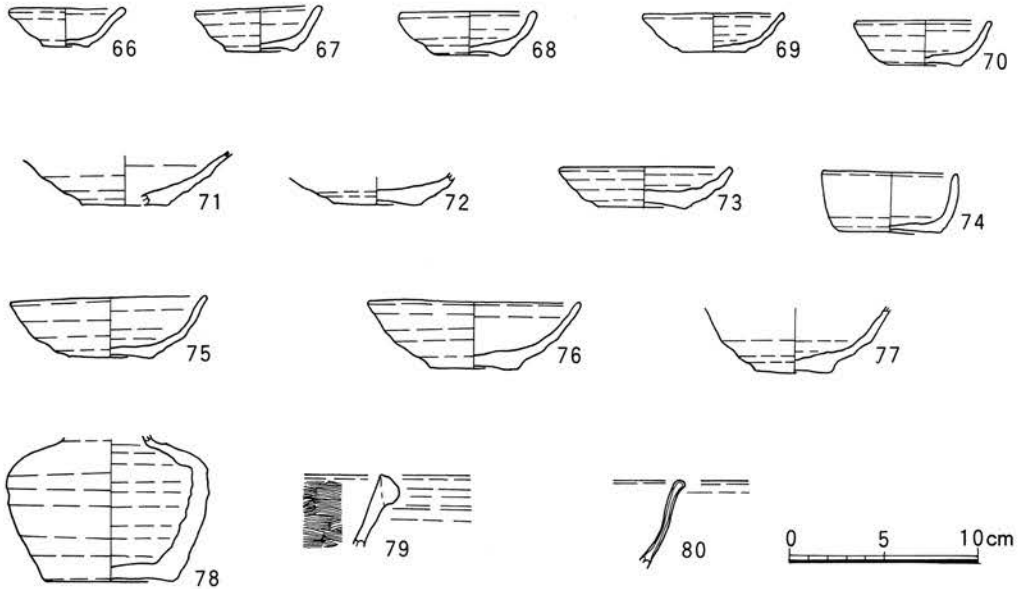


Fig. 48 SK335土壙出土遺物実測図 (S=1/4)

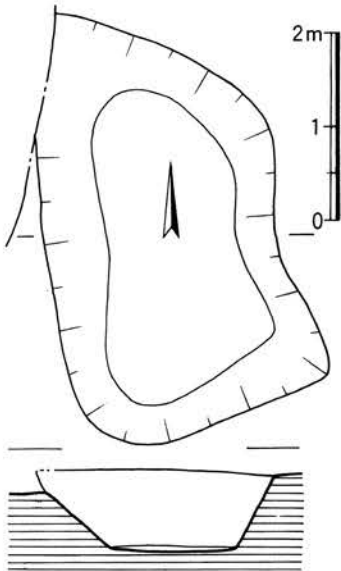


Fig. 49 SK341土壙実測図 (S=1/80)

器高3.9cm。調整は内面ハケ目、外面ヨコナデを主体としている。80は青磁碗。残存器高4.6cm。全面に釉がかかる。色調は暗緑色を基調としている。

SK341土壙 (Fig. 49)

調査区北端のD-2・3グリットに所在する。上面の平面形は不定型を呈するが、元来隅丸長方形を基調としていた当土壙と、他の土壙が切り合って検出時の形状となったものとする。中心部で南北4.25m、東西2.43m、深さ0.87mを測る。底面には緩やかな起伏があり、壁は西壁を除いて比較的角をもって立ち上がる。

埋土は3層に大別でき、上層から淡黒褐色土・褐色土(少量の砂が混じる)。淡褐色土(黄褐色の粘土ブロックが混じる)となっている。出土遺物は埋土全域から検出し、その種類には土師器杯・皿・鍋、磁器皿・杯等がある。

SK341 土境出土遺物 (Fig. 50)

81・82は土師器皿。81で口径6.6cm、器高1.9cm、底径3.8cm。底面は糸きりと思われるが明確ではない。82は口径6.8cm、器高2.3cm、底径3.3cm。底面には明確に糸切り痕が観察できる。83～93は土師器杯。83は口径9.9cm、器高2.9cm、5.4cm。内外面に煤が付着している。84は口径10.3cm、器高3.5cm、底径4.2cm。底面には糸切り痕が確認できる。内面の一部に煤付着。85は口径10.4cm、器高3cm、底径4cm。底面は糸きり。86は口径9.6cm、器高3.3cm、底径4cm。ほぼ完形品。87は口径9.9cm、器高3.5cm、底径4.7cm。外面の一部に煤。炭化物が付着している。88は口径10.5cm、器高3.7cm、底径4.8cm。口縁部は比較的外反傾向にある。底面は糸きり。89は口径10.5cm、器高3.8cm、底径4.4cm。ほぼ完形品。90は口径11cm、器高3.2cm、底径5.6cm。底面は糸きり。91は口径10.5cm、器高3.2cm、底径4.6cm。底面は糸きり。92は口径10.5cm、器高3.4cm、底径6.8cm。今回検出したものの中では最も厚い器壁を有する。内外面の一部に煤が付着している。93は口径9.8cm、器高3cm、底径4.7cm。丁寧なナデにより糸切り痕が不鮮明。94は土師器皿。口径8.8cm、器高1.9cm、底径6.6cm。一部に赤色顔料が確認できる。95～98・100は土師器鍋。主たる調整は、内面がハケ目、外面がナデ・ヨコナデ・指頭圧による。95で残存器高5.5cm。色調は明褐色を基調とする。96は残存器高4.2cm。外面の一部に煤が付着している。97は残存器高3cm。外面の一部に煤が付着している。98は残存器高4.9cm。玉縁が強いヨコナデにより扁平になっている。99は瓦質土器の鍋。残存器高6.4cm。調整は内面横方向の細かいハケ目、外面ナデ・指頭圧によっている。口唇部はわずかに外反傾向にある。100は残存器高6.9cm。調整は内面ハケ目、外面指頭圧を主体とするが、粗いハケ目もわずかに確認できる。101は須恵質土器の播鉢。残存器高7.8cm。口唇部はほぼ直立する。102は瓦質土器の鉢か。残存器高7.8cm。調整は主としてナデによっている。103は瓦質土器の釜。残存器高6.7cm。調整は内面が横方向のハケ目、外面がヨコナデ・ナデによる。104は白磁の皿。口径9.6cm、残存器高1.8cm。色調は乳白色を基調とする。105は白磁皿。口径9.3cm、器高2cm、高台径4cm、色調は乳白色・灰白色を基調としている。106は青磁碗。口径9.3cm、器高3.5cm、高台径3.8cm。高台部は短く、口唇部はわずかに外反する。107も青磁碗。残存器高2cm、高台径6.4cm。比較的厚い釉が施され、色調は暗緑色を基調としている。

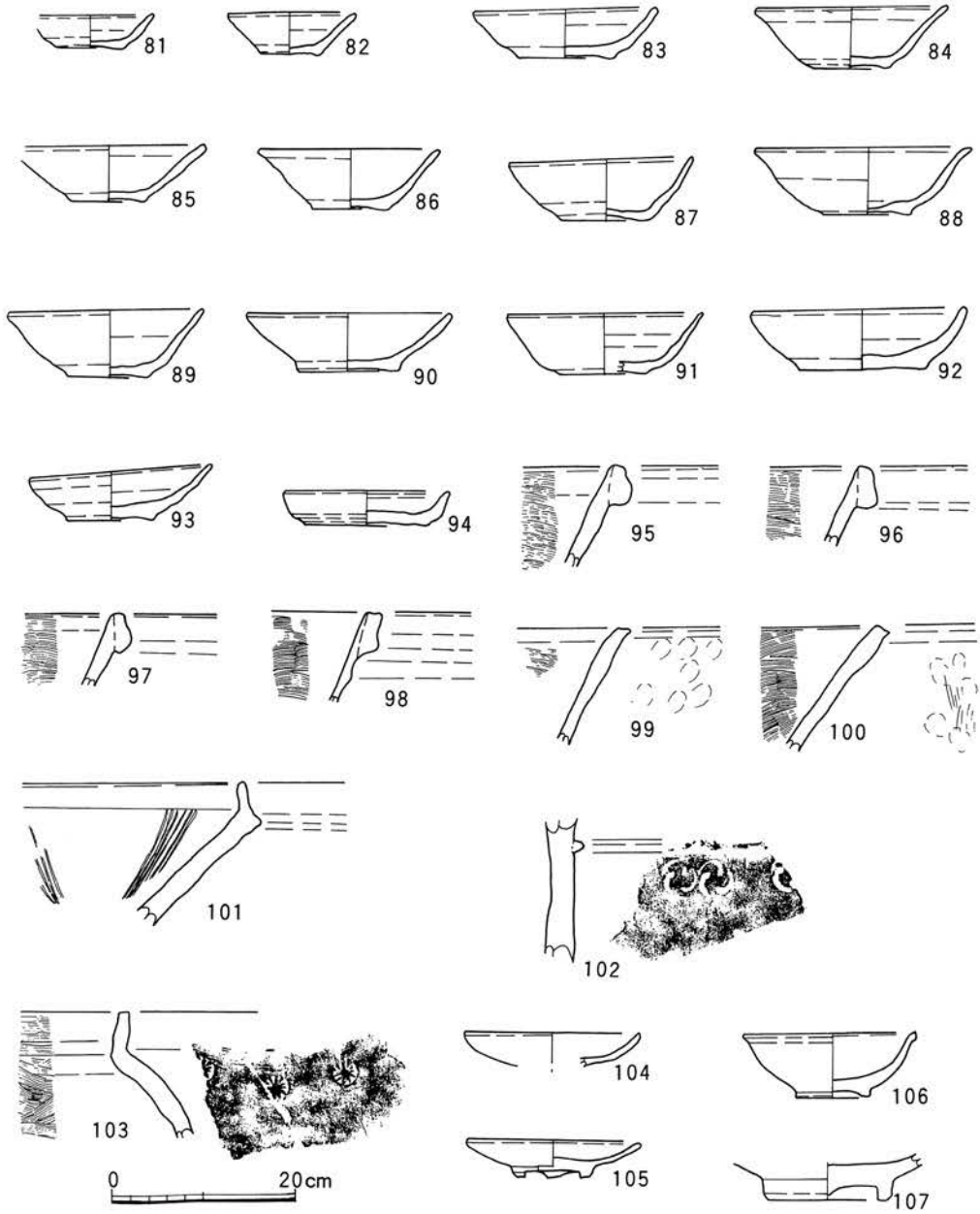


Fig. 50 SK341土壙出土遺物実測図 (S = 1/4)

## 2. 溝と出土遺物

溝は他の溝と複雑な切り合い関係をもっているものも多く、正確な検出数は把握できなかったが、概ね10条は下らないものとする。時期的には中世を中心としたものであった。その中で特徴的なものを抽出し以下に述べる。平面図についてはFig. 56及び57を参照のこと。出土遺物については遺構説明の後に記述する。

### SD340 溝

E・D-3・4グリッドで検出した。SK341に切られており底面の状況土層の堆積状況を観察すると最低3条の溝が切り合っているものと考えられる。この溝本体の上面幅は3.8m、最深部で深さ0.58mを測る。また、土層図から判断した他の溝の規模は、切り合い関係で最も新しいもので(土層図中の5・6・7層部分)、上面幅1.42m、深さ0.32m、次に新しいもので(土層図中の1・2・3・4層部分)、上面幅3.56m、深さ0.58mを測る。このようにセクションから見ると当溝の規模が最も大きく、最も古いものであったことがわかる。切り合い関係が多く底面の状況は明確ではないが、概観すると小さな起伏が多い。壁は比較的なだらかに立ち上がる。

埋土は茶褐色系のものを基調とし、3条の溝の掘込み面では識別がつきにくい状況であった。出土遺物は皿・鉢等の土師器を中心に検出したが、溝毎の厳密な取り上げはできなかった。

### SD330 溝

C・D-4~9グリッドで検出した。検出全長18.5m、平均深度0.35mを測る。断面形は掲載している土層図作成部分では若干崩れているが、概ね逆台形を呈している。他遺構との切り合いについては、当遺構がSK329・SD332を切っている。溝の方向性についてはほぼ南北に直線的にのび、当遺構の西側で検出した掘立柱建物群とその方向性をほぼ同じくする。なんらかの有機的な関係を有するものかもしれないが、それを証明する積極的な資料は得られなかった。

埋土はセクション図では3層から成っているが、概ね2層に別れている。セクション図中2層はともかくとして、1層暗茶褐色土、3層淡黄褐色粘土・明黄褐色粘土となっているように色調の差が明確であった。出土遺物は土師器皿等を少量検出した。

### SD302 溝

B~D-8~15グリッドで検出した。当遺構はC-10・11グリッド付近で攪乱及び他の大溝との切り合い関係をもっているもので、この溝本体の外観は南北方向に走る大溝である。検出全長約37m、平均的な上面幅3.5m程度、平均的な深さ0.5m程度を測る。この溝の他遺構との主な切り合い関係については、SD326溝を切り、SK328に切られている。断面形は浅いU字形を呈する。当溝の性格については断片的な検出状況なので、確定的な事は言及できない

が、溝南端がわずかにではあるが西方にカーブする兆候があったので、西方にその中心がある方形区画溝になる可能性を提示しておきたい。

埋土は淡茶褐色系の砂混じりのものを基調としており、他遺構との切り合いがあるA-Bセクションでは複雑な堆積状況を呈しているが、概観すると3層に大別できるものとする。出土遺物には土師器皿・鉢、磁器碗等がある。

#### SD325・326溝

D・E-9~11グリッドで検出した。SD325が326を切っている。SD325は検出状況では逆L字形を呈する。北端部はまるみを帯びているが、これは他遺構と切り合いをもっているものである。切り合い関係は明確にできなかった。検出全長8m程度、深さ0.54mを測り、底面はほぼ平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。南端壁ぎわでは長さ30cm程度の自然石が3個据え置かれたような状況で検出した。

埋土は4層に分層でき、1層の暗茶褐色土が大半を占める。2層~4層は砂粒を比較的多く含む。出土遺物は埋土全域から検出した。出土遺物は土師器皿・鉢等を中心に検出した。

SD326は検出全長7m程度、深さ0.25mを測る。底面には緩やかな起伏があるが、概ね平坦であり、壁は比較的角をもって立ち上がる。

埋土は3層に分層しているが、基本的には2層に大別でき、黒褐色土系のものを基調としている。出土遺物は埋土全域から土師器細片を少量検出した。

#### SD340溝出土遺物 (Fig. 51)

108~110は土師器皿。底面は糸切り。108は口径7.3cm、器高1.7cm、底径4.6cm。ほぼ完形品。109は口径7cm、器高1.8cm、底径4.6cm。110は口径6cm、器高2cm、底径3.3cm。111・112・113は土師器杯。111は残存器高3.1cm、底径4.6cm。底面はやや上げ底状を呈する。112は残存器高2.3cm、底径4cm。113は口径11.8cm、器高2.7cm、底径5.8cm。口縁部は外反する。114~117は土師器鍋。残存器高はそれぞれ4.8cm、5.5cm、7.3cm、6.5cm。調整は主として内面ハケ目、外面ハケ目の後ナデ。117は口縁内部に稜を有する。118~120は土師器の火鉢か。残存器高はそれぞれ12.4cm、5.5cm、7.4cm。調整は主として、内面横方向のハケ目外面ナデ・ヨコナデによる。口縁部外面の仕様は3者それぞれであり、118で突帯に刺突文、118でスタンプ、120で2条の突帯となっている。121も土師器鍋。残存器高4cm。調整は内面横方向の粗いハケ目、外面はヨコナデ・ナデ・指頭圧によっている。121は土師器鍋の把手。残存器高5.6cm。123は瓦質土器の釜。口径15.8cm、残存器高7.6cm。口縁部は短くほぼ直立し、口唇部内面がわずかに窪む。調整は主として横方向のハケ目・ナデによる。124は瓦質土器の播鉢。残存器高6.3。口唇部はわずかに内傾する。125は須恵質土器の播鉢。色調は灰黒色を基調とする。126は陶器。残存器高1.6cm、高台径2.8cm。釉は内面と外面下部まで施され、高台部付近は露胎。色調は乳白色を基調とする。127は青磁碗。

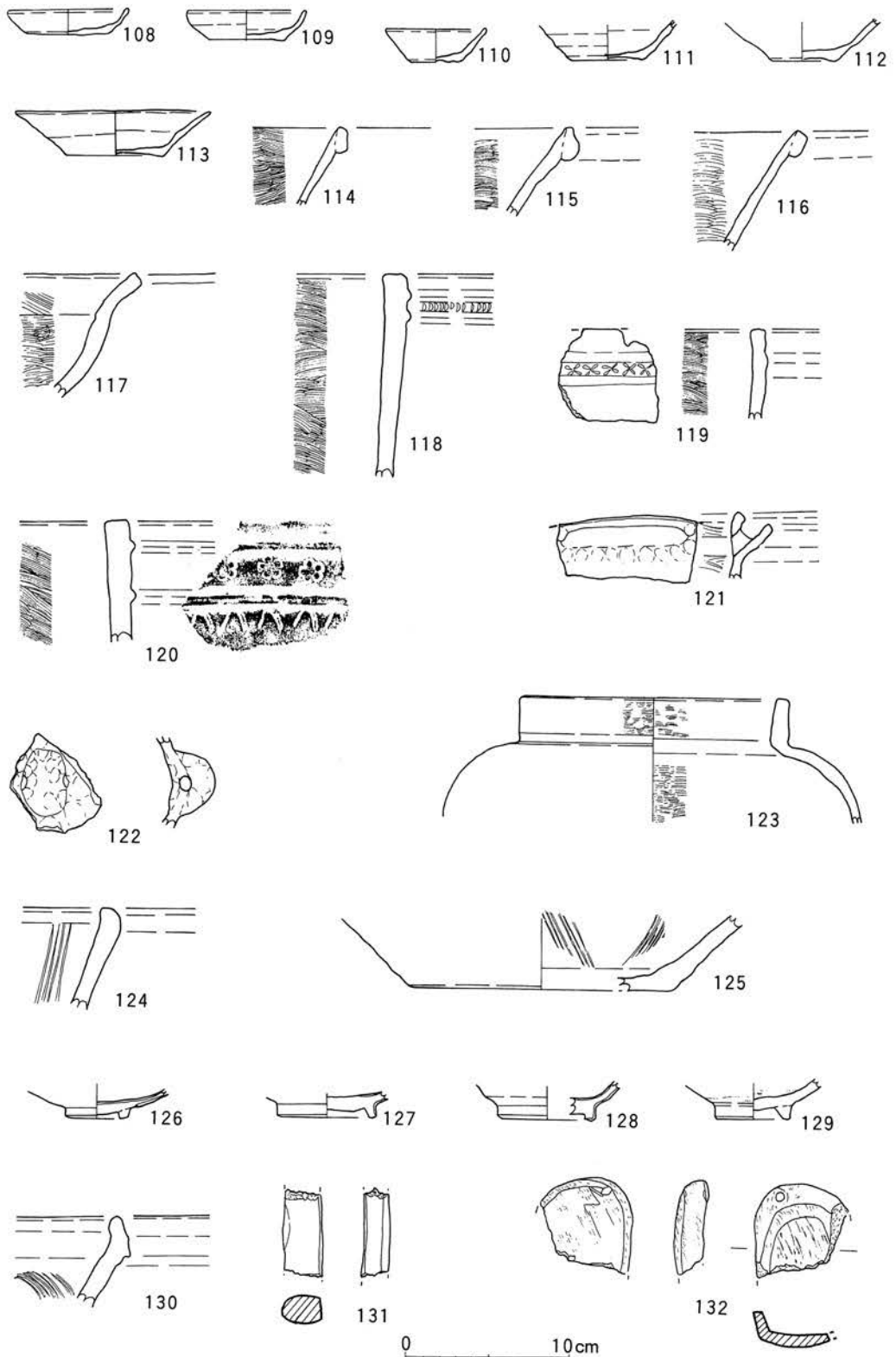


Fig. 51 SD340 溝出土遺物実測図 (S = 1/4)

残存器高1.2cm、高台径5.6cm。釉は内面見込みにはかかっていない。畳付き部と高台内部は露胎。色調は暗緑色を基調としている。128も青磁碗。残存器高2.1cm、高台径5.4cm。高台内面以外、全面施釉。色調は暗緑色。129は染め付けの磁器碗。残存器高2.1cm、高台径5.4cm。染め付けは高台部付近内外面に施されている。130は陶器の播鉢。残存器高5.5cm。色調は青褐色を基調とする。搬入品か。131は石製品の砥石か。残存長5.1cm、幅2.4cm、厚さ1.7cm。132は滑石製品の硯か。残存長6.7cm、残存幅5.4cm、断面計測部で厚さ0.8cm。

#### SD302 溝出土遺物 (Fig. 52)

今回掲載したものの中には、138～142に見るように他時期の遺物もある。遺構の切り合いがあったものか流れ込みによるものである。133～136は土師器皿。底面はすべて糸切り。133で残存器高2cm、底径3.8cm。134で残存器高1.6cm、底径4cm。135で残存器高2.2cm、底径4.4cm。136で口径10.5cm、器高2.2cm、底径4cm。体部は薄く直線的に延びる。137は土師器杯。残存器高4.3cm、底径3.8cm。底面は糸切りと考えるが、ナデ調整のため明確でない。138～140は土師器碗。138で残存器高2.2cm、高台径6.1cm。139は残存器高2.7cm、高台径8.4cm。140は残存器高2.6cm。141は瓦器杯。口径12.6cm、器高2cm、底径9cm。調整は主としてヨコナデ、色調は黒灰色を基調としている。142は黒色土器の碗。口径14.6cm、器高6.2cm、高台径8cm。色調は内面黒色、外面淡褐色・黒灰色を基調としている。143・144は土師器の播鉢か。残存器高はそれぞれ、5.9・7.2cm。145～155は瓦質土器の鍋。調整は外面縦方向のハケ目、内面横方向のハケ目、口唇部ヨコナデを基調としている。器形は口縁部がわずかに外反するものとそうでないものに分けられる。口径が計測不明な145～153の残存器高は5.1～16.1cmを測る。154で口径29.4cm、残存器高8.8cm。ヨコナデ・ハケ目調整の他に、外面の一部に指頭圧が観察できる。155は口径25cm、残存器高10.9。これも胴部外面の一部に指頭圧痕がわずかに観察できる。156・157は瓦質土器の鍋。主たる調整はハケ目とナデによる。色調は暗緑色。158は青磁碗。158で残存器高1.9cm、高台径7.6cm。高台内面は露胎。159は残存器高1.7cm、高台径7.4cm。釉は畳付き部、高台内部には及んでいない。

#### SD325 溝出土遺物 (Fig. 53)

160～162は土師器杯。底面は糸切り、調整は主としてナデ・ヨコナデによる。160で残存器高2cm、底径3.8cm。161は残存器高1.9cm、底径4.8cm。162は口径10.6cm、器高3cm、底径4.2。163は土師器鍋。残存器高4cm調整は内面ハケ目、外面ヨコナデ・ナデを基調とする。164～166は瓦質土器の鍋。調整は主としてハケ目、ナデによる。166で口縁部がわずかに内傾する。残存器高は7～7.4cm。外面の一部に煤が付着している。168は瓦質土器の鉢。残存器高4.2cm。外面に3条の沈線をめぐらし、その上下にスタンプを配する。169は瓦質土器の播鉢か。残存器高3.8cm。口唇部はわずかに内傾する。色調は灰褐色。170は土師器

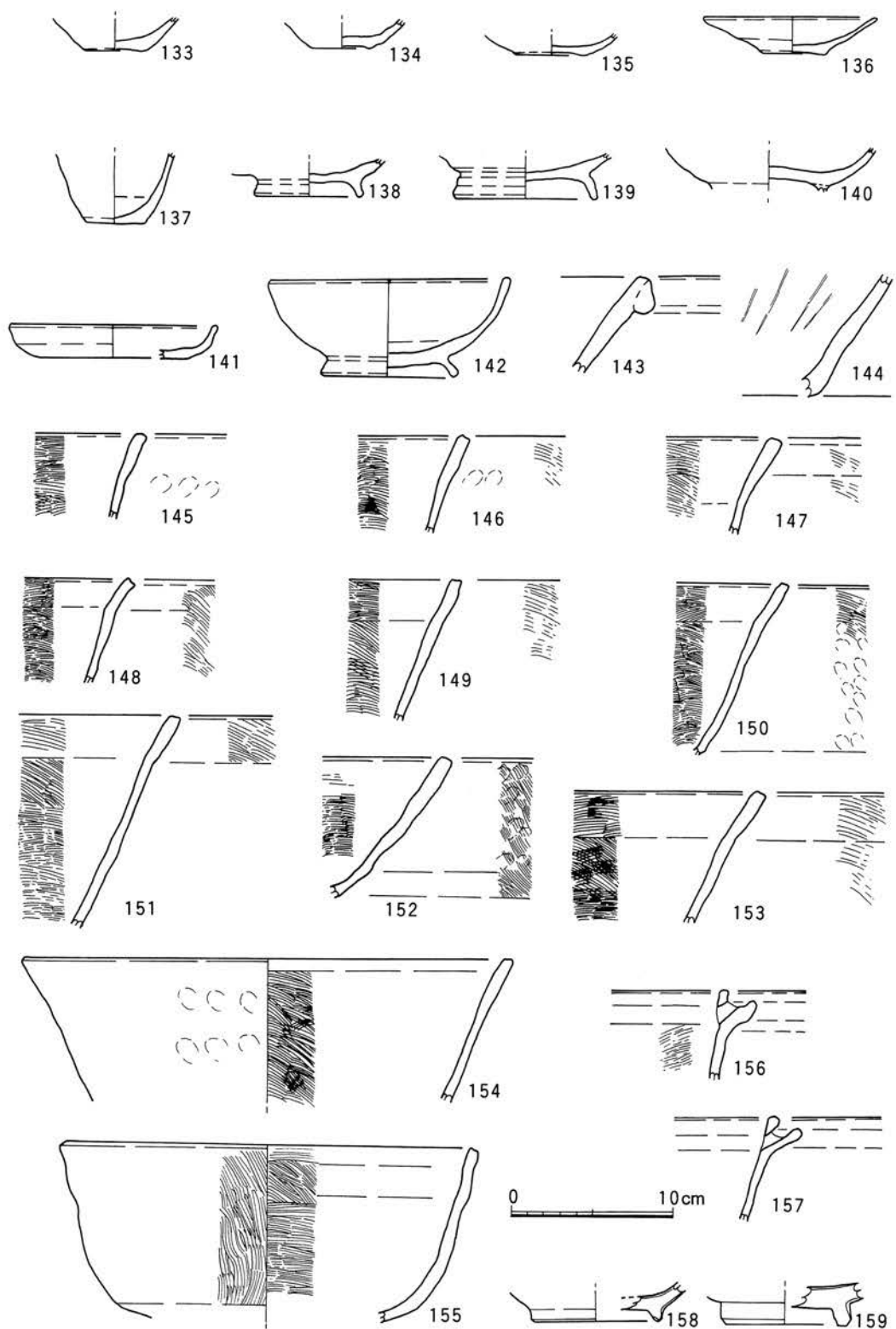


Fig. 52 SD302 溝出土遺物実測図 (S = 1/4)

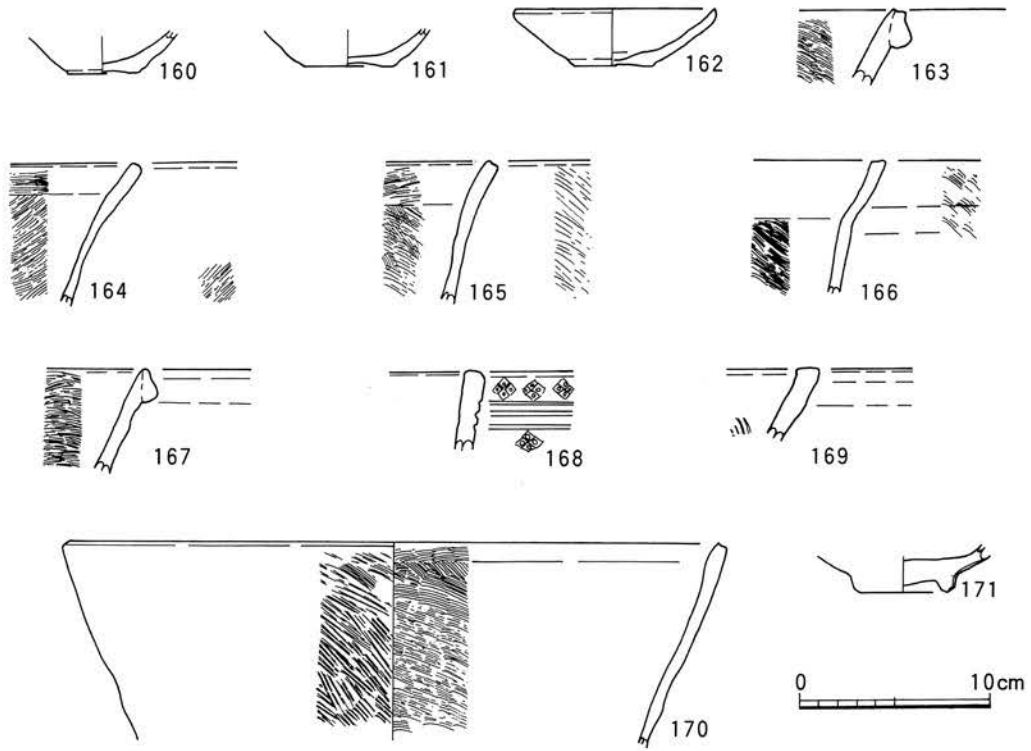
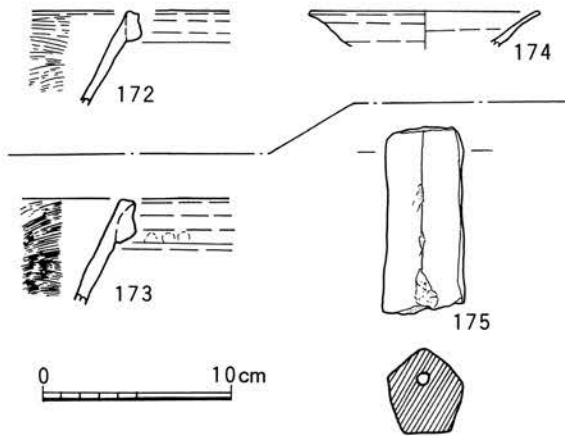


Fig. 53 SD325 溝出土遺物実測図 (S = 1/4)



鍋。口径33.9cm、残存器高10.7cm。調整は内面ハケ目、外面粗いハケ目、口唇部はヨコナデ。内外面の一部に煤が付着している。色調は暗褐色を基調としている。

171は青磁碗。残存器高1.9cm、高台径2.3cm。畳付き部から内側は露胎。色調は灰緑色を基調とする。

Fig. 54 SD326・332 溝出土遺物実測図 (S = 1/4)

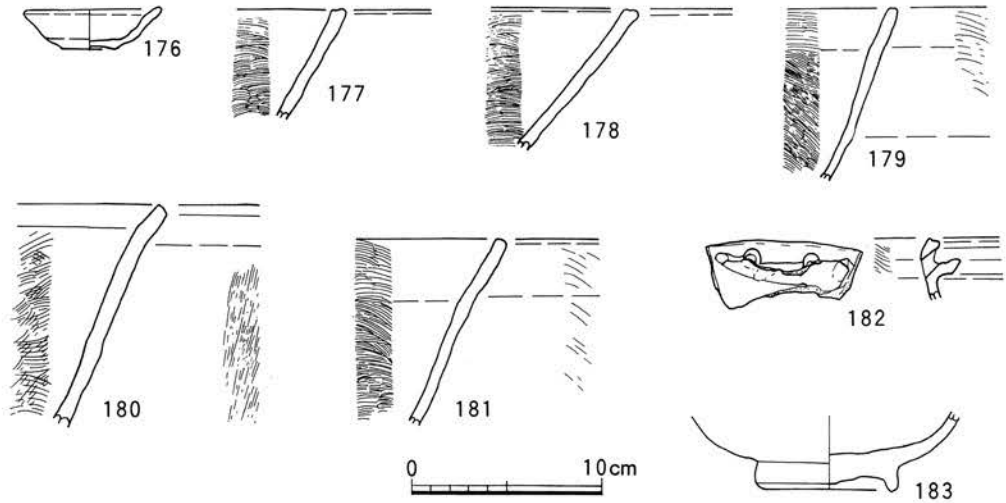


Fig. 55 SD339 溝出土遺物実測図 (S = 1/4)

SD326・332 溝出土遺物 (Fig. 54)

172・172は土師器鍋。残存器高はそれぞれ、5cm・5.6cm。調整は主として内面横方向のハケ目、外面ナデ・ヨコナデ・指頭圧による。174は土師器杯。口径12cm、残存器高1.9cm。175は土師器の支脚か。残存長9.6cm。中心部には径0.5cmの空洞部がある。色調は淡褐色を基調とする。

SD329 溝出土遺物 (Fig. 55)

176は土師器皿。口径6.9cm、器高2.2cm、底径2.9cm。口縁部はわずかに外反する。底面には糸切り痕が観察できる。177・178は土師器鍋。調整は主として内面がハケ目、外面がハケのあとナデ・指頭圧によっている。残存器高はそれぞれ5.9cm、7.6cm。178～181は瓦質土器の鍋。口縁下部に稜がみとめられ、口縁部は内湾気味に立ち上がる。調整は主として内面ハケ目、外面ハケ目の後ナデによっている。182は土師器鍋。吊り手部分のみで、残存器高3.1cm。調整は内面ハケ目、外面ナデを主体としている。183は青磁碗。残存器高3.9cm、高台径6.6cm。畳付き部より内側は露胎。色調は暗緑色を基調としている。

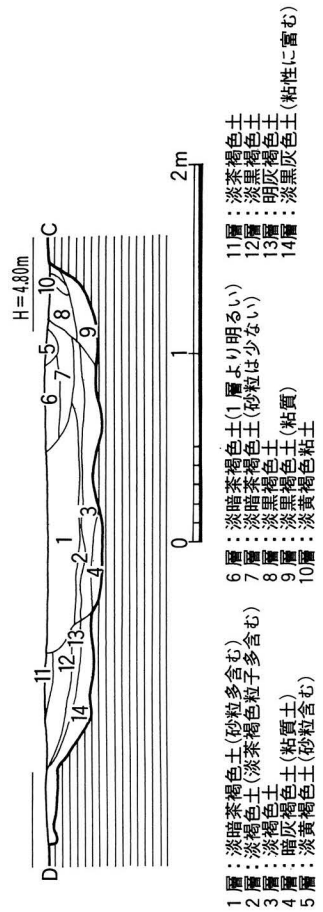
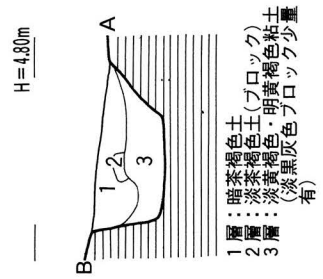
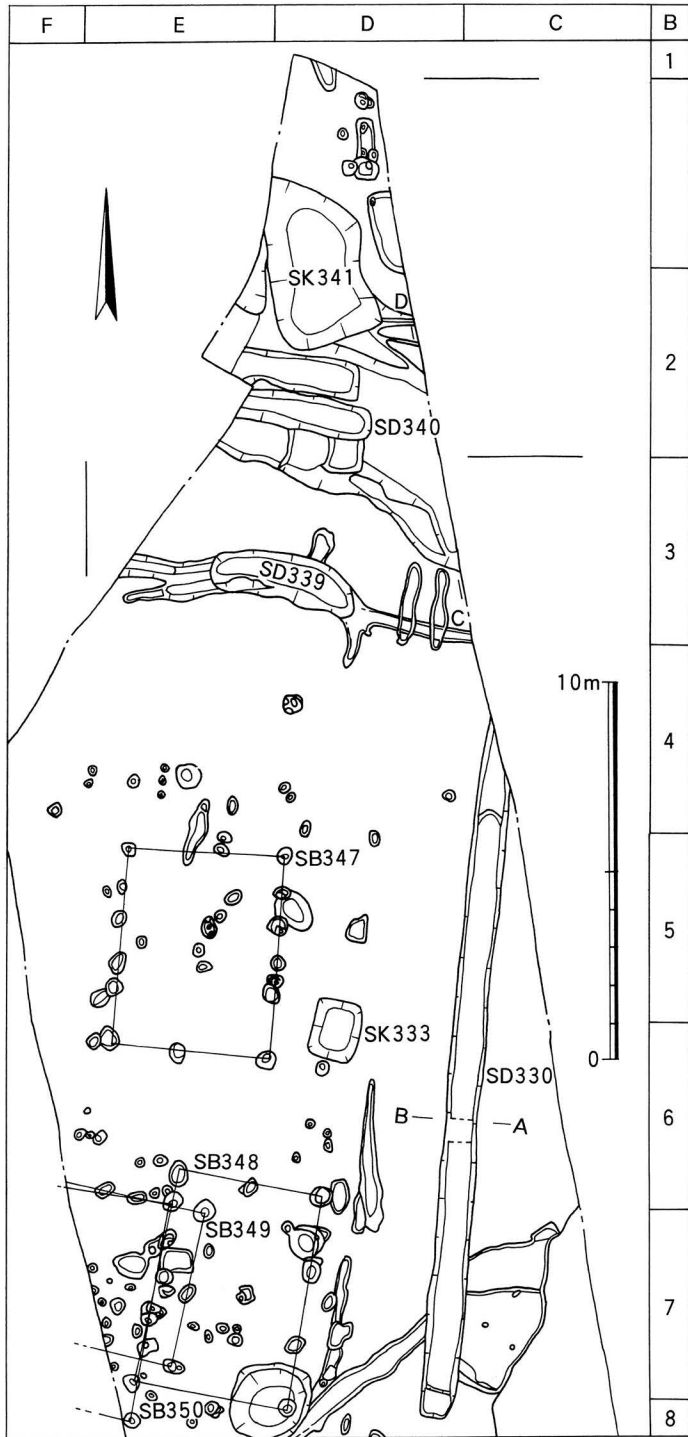


Fig. 56 友貞遺跡3区北半遺構配置図 (S=1/200)

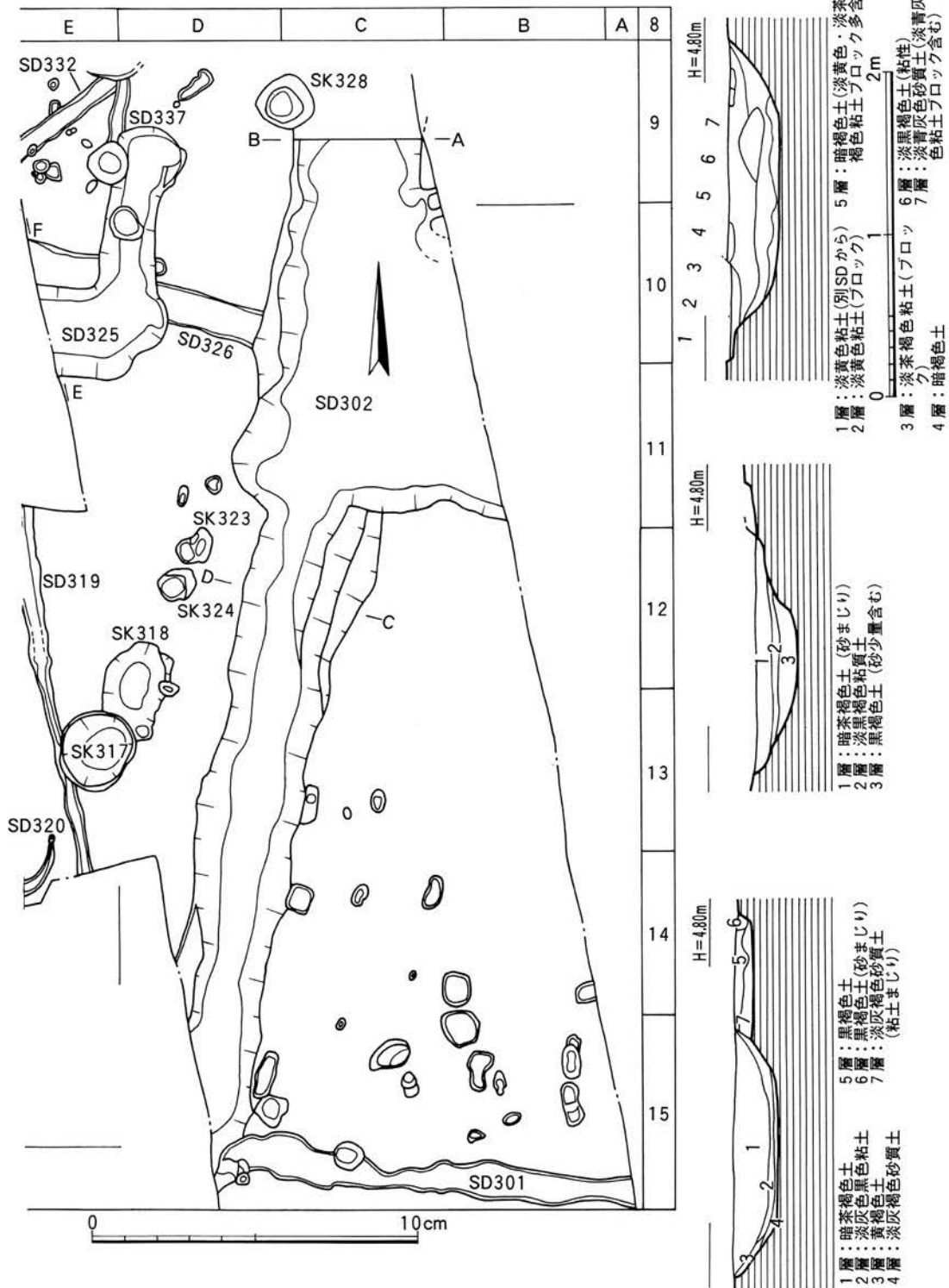


Fig. 57 友貞遺跡3区南半遺構配置図 (S = 1/200)

### 3. 掘立柱建物と出土遺物

同地区で掘立柱建物は中央西寄りに集中している。この建物群の主軸と平行関係にある溝はいくつかあるが、その中のどれが有機的関係にあるか証明できる積極的な資料は得られていない。ただし、掘立柱建物の検出位置から考えると集落又は居館の中心はこの調査区の西方になるものとする。建物の柱間の距離は図中に表記している。

#### SB347 掘立柱建物 (Fig. 58)

D・E-6・7グリッドで検出した。長軸を南北方向にもつ2間×3間の建物である。梁行4.19～4.23m、桁行5.13～5.33mを測る。柱穴の径は40cm程度のものが主流を占める。柱痕跡を検出できたものはないが、柱径はその掘り方から見ると8～10cm程度であることが推定で

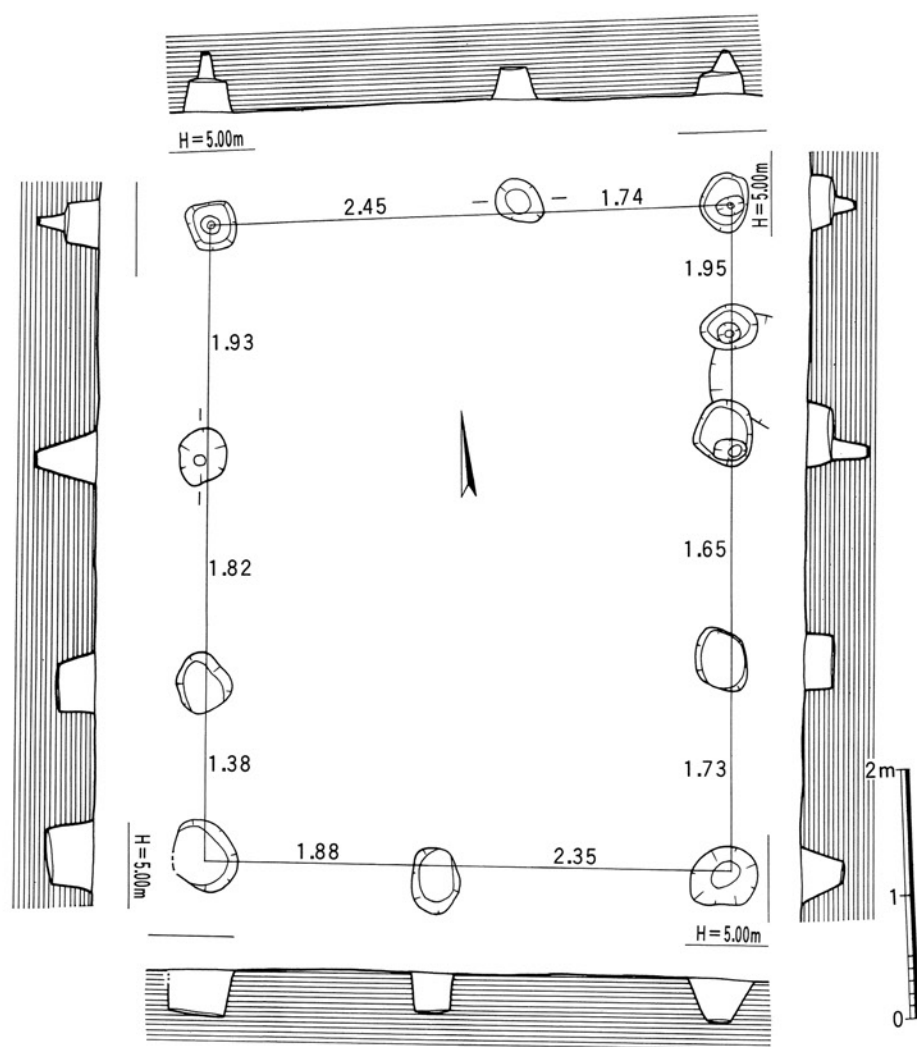


Fig. 58 SB347 掘立柱建物実測図 (S = 1/80)

きる。この建物と切り合い関係をもつ他の建物はないが、北東部でSE334井戸を切っている。

埋土は上層黒褐色土、下層淡黄褐色粘質土を基調としている。出土遺物は土師器極細片。

### SB348 掘立柱建物 (Fig. 59)

D・E-7・8グリッドで検出した。長軸を南北方向にもつ2間×3間の建物である。梁行3.68～4.09m、桁行5.39～5.8mを測る。SB349と350の東側桁と当遺構の西側桁が重複関係にあるが、柱穴どうしの切り合い関係はなく、進級関係は不明。柱穴は径0.45～0.6m、深さ0.2～0.5mを測る。他遺構との切り合い関係は、当遺構がSK335を切っている。

埋土は黒褐色土を基調とするもので、出土遺物は土師器極細片を微量検出した。

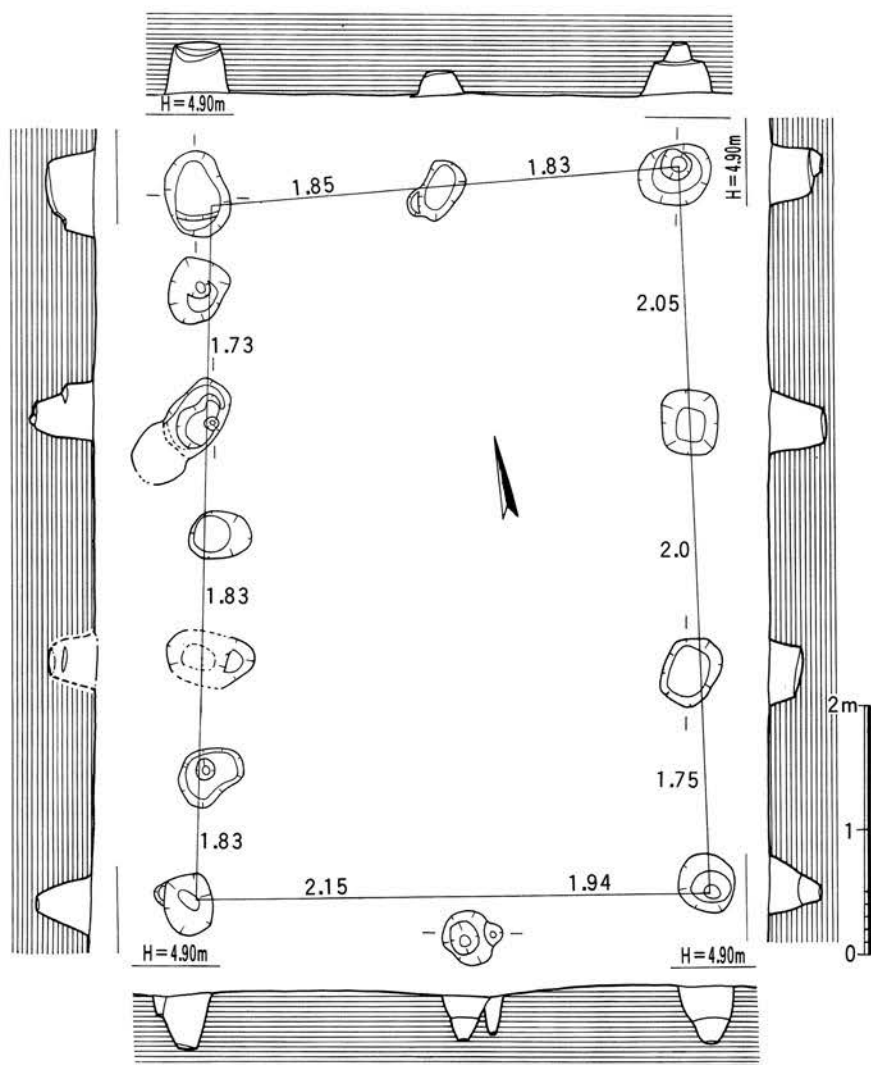


Fig. 59 SB348 掘立柱建物実測図 (S = 1/60)

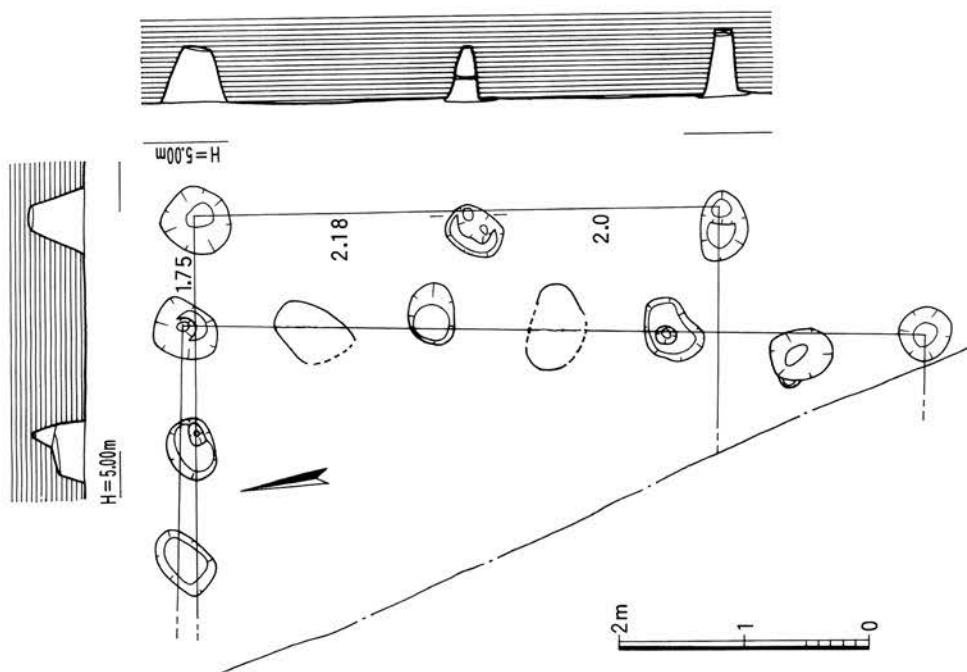


Fig. 60 SB349 掘立柱建物実測図 (S = 1/60)

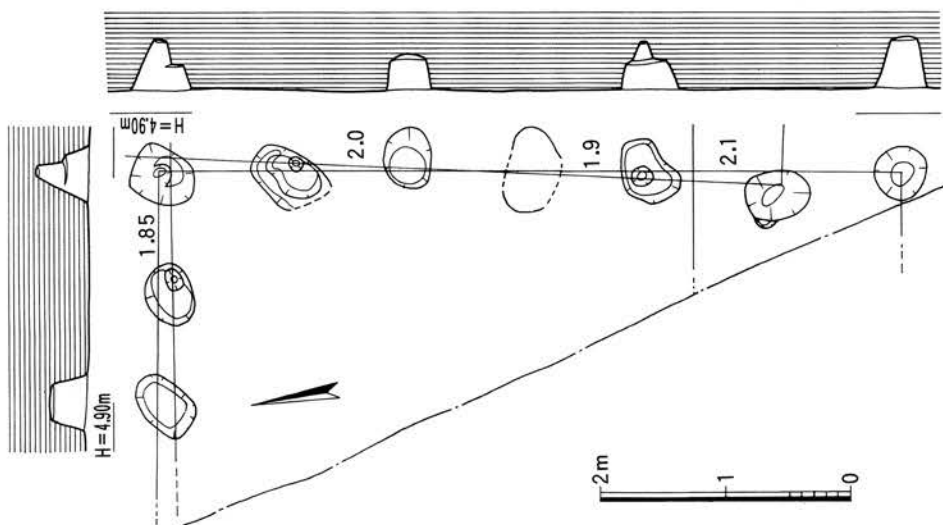


Fig. 61 SB350 掘立柱建物実測図 (S = 1/60)

SB349 掘立柱建物 (Fig. 60)

E-7~9 グリッドで検出した。長軸を東西方向にもつと考えられる建物であるが、西半部分が調査区外に及んでいるためその全体規模は不明。梁行で4.18mを測る。柱穴の規模は0.4~0.55m、深さ0.4~0.6m程度を測る。SB350と長軸の方向は直交関係にある。これも他の建物の柱穴との切り合い関係はない。

埋土は黒褐色土を基調としたもので、出土遺物は土師器極細片を微量検出した。

SB350 掘立柱建物 (Fig. 61)

E-7~9 グリッドで検出した。長軸方向を南北にとり、2間×3間に規模をもつ建物と推定する。梁行は不明。桁行6mを測る。柱穴は径0.4~0.5m、深さ0.3~0.4m程度を測る。

埋土は黒褐色系のものを基調とし、下層になるに従い黄褐色なり粘性を増す。出土遺物はほとんど得られなかった。

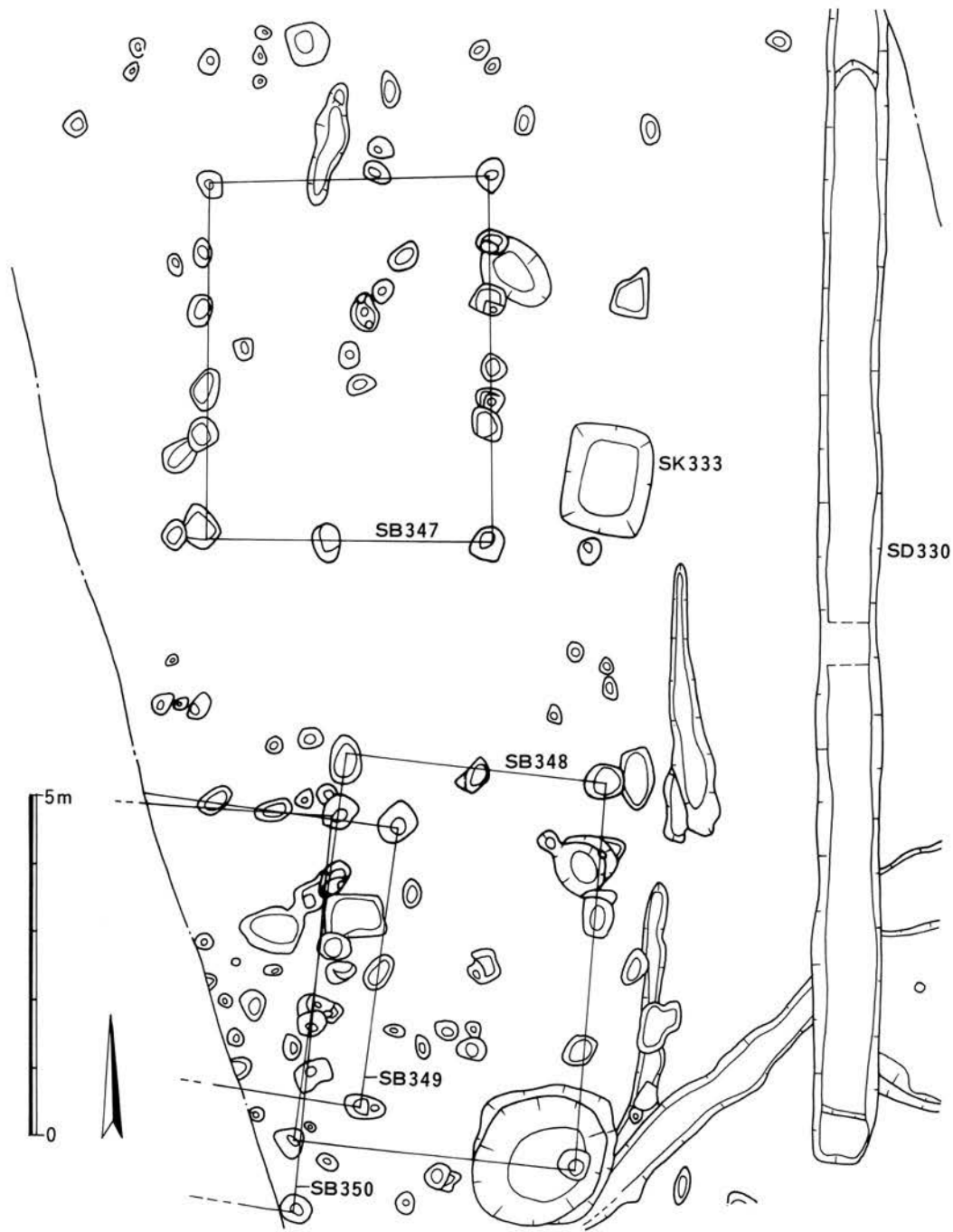


Fig. 62 友貞遺跡3区掘立柱建物配置図 (S = 1/100)



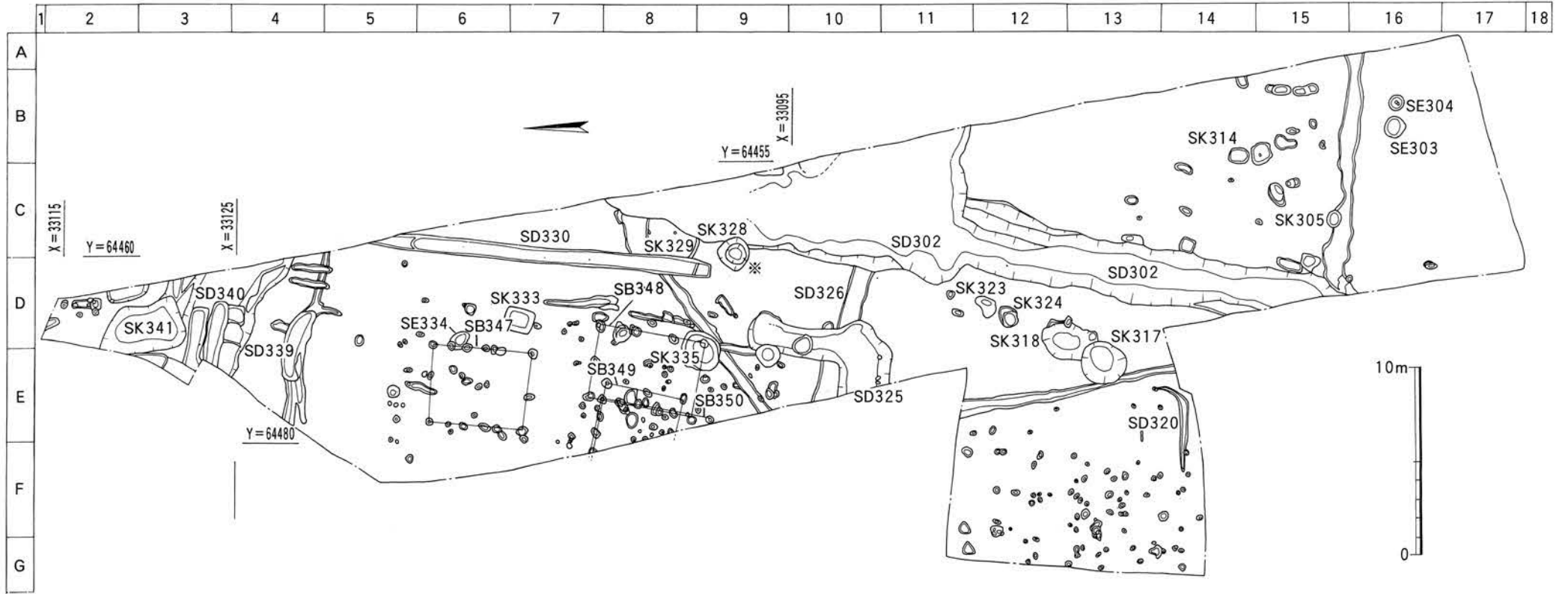


Fig. 63 友貞遺跡3区遺構配置図 (S = 1/300)

## Ⅶ. 調査の記録 — 4 区 —

### 1. 土壇と出土遺物

この地区も全体的にみて、遺構密度が低い地区である。土壇は同地区で5基検出したが、その性格が想定できるものはなかった。また、出土遺物も少なく、土器片のみが出土した。そのため記述の方法としては、一括して掲載し、その概要を記す。

#### SK405 土壇 (Fig. 64)

F-3グリッドで検出した。上面の平面形は、南北に長い隅丸長方形を基調としたものと考え、北端部が崩落によって突出している。他遺構との切り合い関係は、北西部で小穴と有し、当遺構が切られている。中心部で0.93m、東西0.51m、深さ0.2mを測る。底面には大きな起伏があり、その高高低低7cm程度を測る。壁は北側がなだらかな立ち上がりを見せ、他の3壁は比較的角をもつて立ち上がる。

埋土は淡黒褐色土(砂混じり)1層からなり、遺物は全く得られなかった。

#### SK414 土壇 (Fig. 65)

K-16グリッドで検出した。上面の平面形は、東西にやや長い楕円形を呈する。中心部で東西0.95m、南北0.9m、深さ0.3mを測る。底面は概観すると舟底上を呈し、壁は4方とも比較的角をもつて立ち上がる。

埋土は2層に分層でき、暗褐色土系のものを基調とする。出土遺物は1層から検出したが、いずれも細片であった。

#### SK415 土壇 (Fig. 66)

M-5グリッドで検出した。上面の平面形は、元々隅丸長方形を基調としたものと考え、東壁部分の崩落により、検出時には不定型を呈した。中心部で東西0.68m、南北0.9m、深さ0.66mを測る。底面は概ね平坦であり、壁は4方とも直角に近い角度で立ち上がる。

埋土は3層に分層でき、暗黒褐色土系のものを基調としている。出土遺物は全く得られなかった。底面は砂層であるため、湧水が認められた。

#### SK416 土壇 (Fig. 67)

M-4グリッドで検出した。上面の平面形は、南北に長い楕円形を呈する。中心部で南北0.94

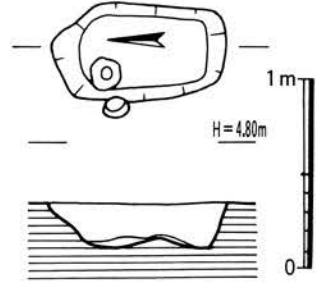


Fig. 64 SK405 土壇実測図  
(S = 1/40)

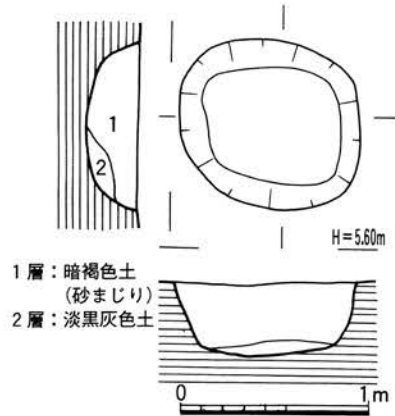


Fig. 65 SK414 土壇実測図  
(S = 1/4)

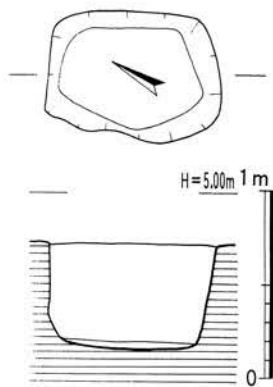


Fig. 66 SK415 土壙  
実測図  
(S = 1/40)

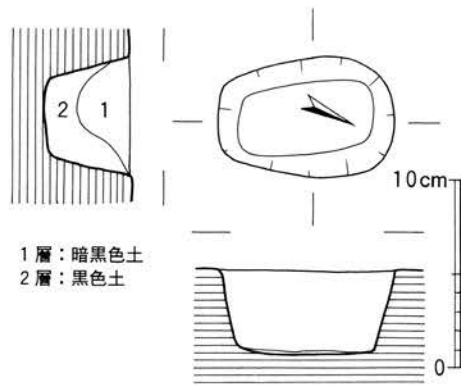


Fig. 67 SK416 土壙 実測図  
(S = 1/40)

m、東西0.64m、深さ0.45mを測る。底面は概ね平坦であり、壁は四方とも角度をもって立ち上がる。壁の状況から判断すると上面の平面形は元来隅丸長方形を呈していたものと推定する。

埋土は2層からなり、暗黒褐色土系のものを基調としている。出土遺物は土器微細片

を微量検出した。

## 2. 溝と出土遺物

調査区全体で確定的なものだけでも14条検出した。調査区が狭隘なためその性格は確定できないが、溝の規模から考えると隣接調査区で検出したものと連続する可能性を有するものもある。出土遺物は埋土中から若干の土師器細片を検出した。これらの溝の中で特徴的なものを抽出し、以下に述べる。

### SD401 溝・402 溝 (Fig. 68)

A・B~2・3グリッドで検出した。南北方向に走るが、主軸は30°程度西に振れている。上面幅は検出北端部で、2.5m、南端部で1.9m、深さ0.45mを測る。底面には起伏があり壁はなだらかな立ち上がりを見せる。

埋土は淡茶褐色土系のものを主体としている。図中のセクションを検討すると、1・3層はその堆積状況からみて、他

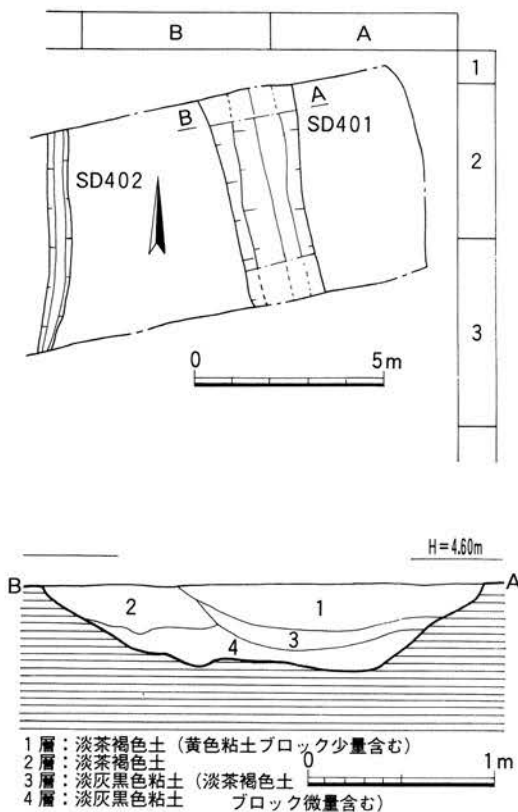


Fig. 68 SD401・402 溝 実測図 (S = 1/40)

溝と切り合っている状況を示しているものと判断する。その判断に立つと、上面幅1.6m、深さ0.35m程度の溝になるものと考え。出土遺物は埋土中全域から土師器片を少量検出した。

402溝は401溝の西方約4mにあり、その方向をほぼ座標北にとる。双方とも直進すれば交差する関係にあり、同時期存在は考えがたい。検出長5.8m、幅0.5m、深さ0.45m程度を測る。埋土はSD401溝よりも黒色が強い。

#### SD404溝 (Fig. 69)

E-2・3グリッドで検出した。検出全長4.5m程度、平均上面幅1m程度、深さ0.5m

を測る。東側上面と北端部で他遺構と切り合っており、当遺構が古。溝底面は平坦な部分が多く、壁は湾曲しながら立ち上がる。

埋土は上層から淡黒褐色、淡褐色、淡黄褐色を基調としている。出土遺物には土師器皿・鍋、瓦器鍋、青磁碗等がある。

#### SD406・417・418溝 (Fig. 70)

SD406はI・J-3・4グリッドで検出した。検出長4.8m、土層図作成部分での幅5m程度、深さ1.04mを測る。他遺構との切り合いは東側掘込み部分で土壇状のものと有しているが、その正確な形状、新旧関係は不明。底面は概観すると舟底状を呈し、壁は比較的緩やかに立ち上がる。

埋土は淡黒褐色土系のものを基調としているが、セクションから判断すると。1層及び6層は他の溝との切り合いを示しているものと判断する。出土遺物は磁器片・土師器片を少量検出した。

SD417・418はM・N-3~5グリッドで検出した。平面図ではL字状の溝のように見えるが、セクションを観察すればSD418がSD417を切っている様子がわかる。

SD418は検出全長3.5m程度、セクション図作成部分で幅1.25m、深さ0.4mを測る。底面には起伏があり、壁は比較的的角度をもって立ち上がる。埋土は3層からなり、暗褐色系のも

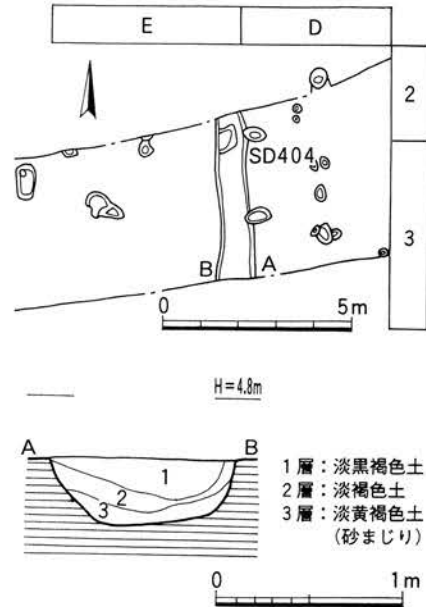


Fig. 69 SD404溝実測図  
(S = 1/200・1/400)

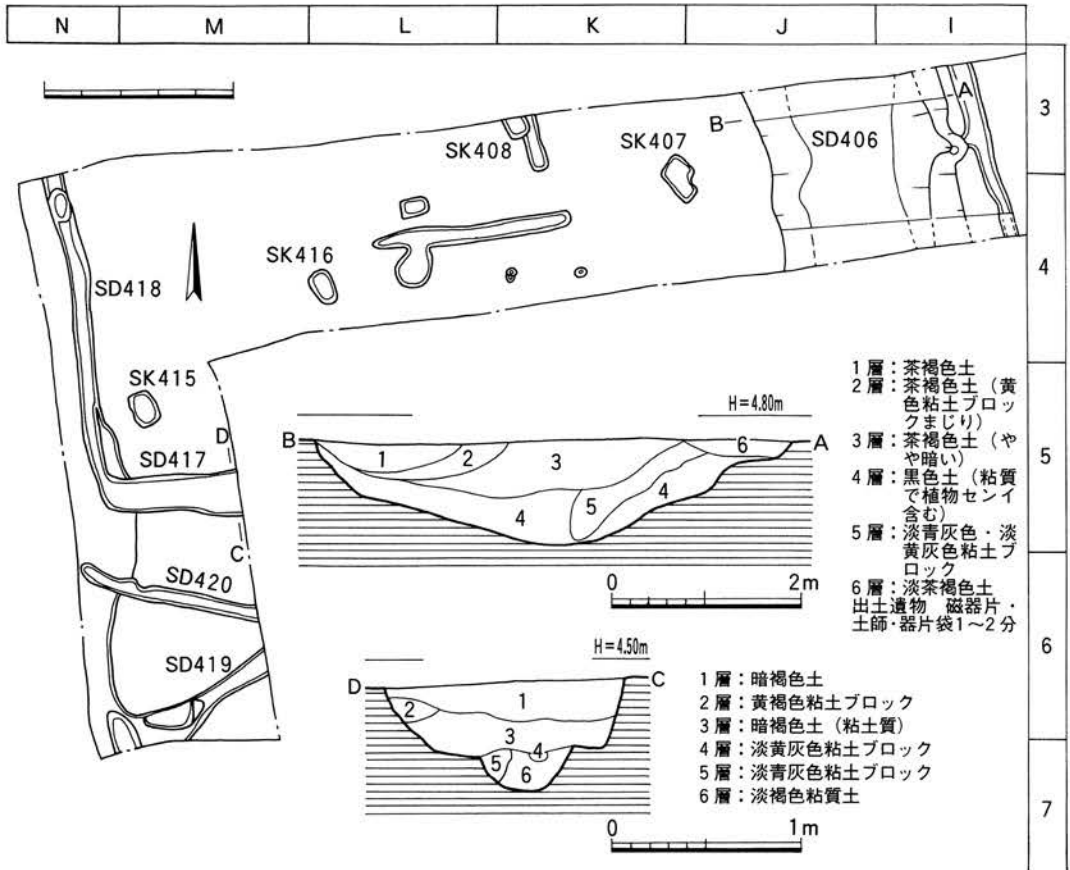


Fig. 70 4-1区畦遺構配置図及びSD406・417・418溝実測図 (S=1/40)

のを基調としている。出土遺物は土師器片を少量検出した。

SD417は検出全長12m程度で、平均的な上面幅0.5m、深さ0.2mを測り、L字じょうを呈する。底面は舟底状を呈し、壁は比較的角度をもって立ち上がる。埋土は3層に分層でき、全体的に粘質に富む。出土遺物は土師器細片を微量検出した。

#### SD409・410・412溝 (Fig. 71)

SD409は直線的にのびる溝で、北西から南西方向にのびる。検出全長8.5m程度、平均幅0.65m、深さ0.4mを測る。遺構の切り合い関係はSD413を切り、SD410に切られている。溝断面は逆台形状を呈し、底面にはわずかな起伏がある。壁は比較的角度をもって立ち上がる。埋土は黒色土 (粘質土) 1層からなっている。出土遺物は全く検出しなかった。

SD410は直線的に南北に延びる溝で、その方向はわずかに北西に振れている。検出全長は明確な部分で17m程度、平均幅0.9m、深さ0.35mを測る。この溝はさらに北方に延びるが、現況河川の護岸下部に潜りこんでおり、明確にできなかった。遺構の切り合い関係はSD422を

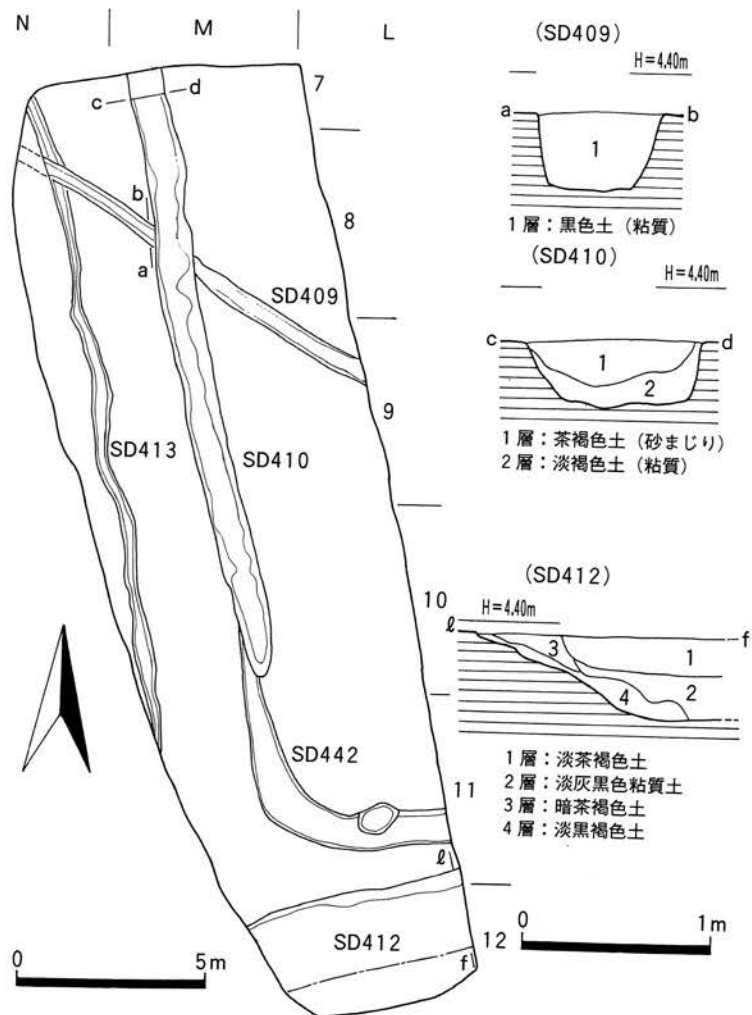


Fig. 71 4-2区遺構配置図及びSD409・410・412溝土壙図 (S = 1/200・1/40)

切っている。埋土は2層からなっており、茶褐色系のものを基調としている。出土遺物は土師器片を少量検出した。

SD412はこの調査区南端に東西方向に走る現況水路と平行し、その半分が水路に切られている。検出長6m程度、幅は推定5m程度、深さ0.9mを測る。断面形は底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は4層からなり、茶褐色土系のものを基調としている。下部になるに従い砂を多く含む。出土遺物は土師器片を少量検出した。

## 溝出土遺物

### SD401 溝出土遺物 (Fig. 72)

184 は土師器皿。残存器高 1.3cm、底径 4cm。調整は主としてヨコナデ。底面には糸切り痕が観察できる。185 は土師器杯か。残存器高 1.3cm、底径 5.4cm。底面は糸きり。186・187・188 は瓦質土器。186 は火鉢か調整は主としてハケ目の後ナデ。残存器高 3.3cm。色調は暗褐色。187 は鍋。残存器高 10cm。調整は内面横方向の細かいハケ目、外面ハケ目の後ナデ。口縁部は短く、内湾気味に立ち上がる。188 は cm 火鉢。残存器高 6.2cm。口縁部外面には花文のスタンプが配されている。調整は内面が細かいハケ目、外面がヨコナデによっている。色調は灰白色、淡灰黒色を基調としている。189 は陶器皿。口径 12.3cm、器高 4.3cm、高台径 4.4cm。釉は内面全面と口唇部に及んでいる。色調は赤褐色・暗褐色を基調としている。

### SD406 溝出土遺物 (1) (Fig. 73)

190～195 は土師器杯。底面はすべて糸きり。190 は口径 6.7cm、器高 3.5cm、底径 3.2cm。191 は口径 7.1cm、器高 2.1cm、底径 4cm。ほぼ完存する。192 は器高 3.1cm。口径底径共に計測不能。193 は口径 9.1cm、器高 3.4cm、底径 4.5cm。内面の一部が黒色、外面の一部に煤が付着している。ほぼ完存する。194 は口径 10.1cm、器高 2.8cm、底径 5cm。195 は口径 10cm、器高 2.7cm、底径 4.4cm。。196・197 は瓦質土器の鍋。196 で残存器高 12.1cm。調整は内面ハケ目、外面がハケ目の後ナデ。摩耗が進んでいる。内面に黒斑、外面に煤が付着している。197 は残存器高 16.9cm。内面に黒斑、外面に煤が付着している。口縁部はわずかに内湾気味。調整は 196 同様。198・199・200・201 は土師器鍋。残存器高 5.4cm。口唇部がわずかに窪んでいる。199 は残存器高 8.5cm。調整は内面粗いハケ目、外面は摩耗

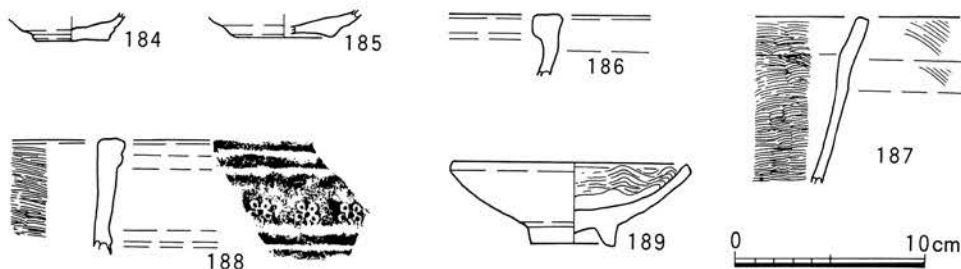


Fig. 72 SD401 溝出土遺物実測図 (S = 1/4)

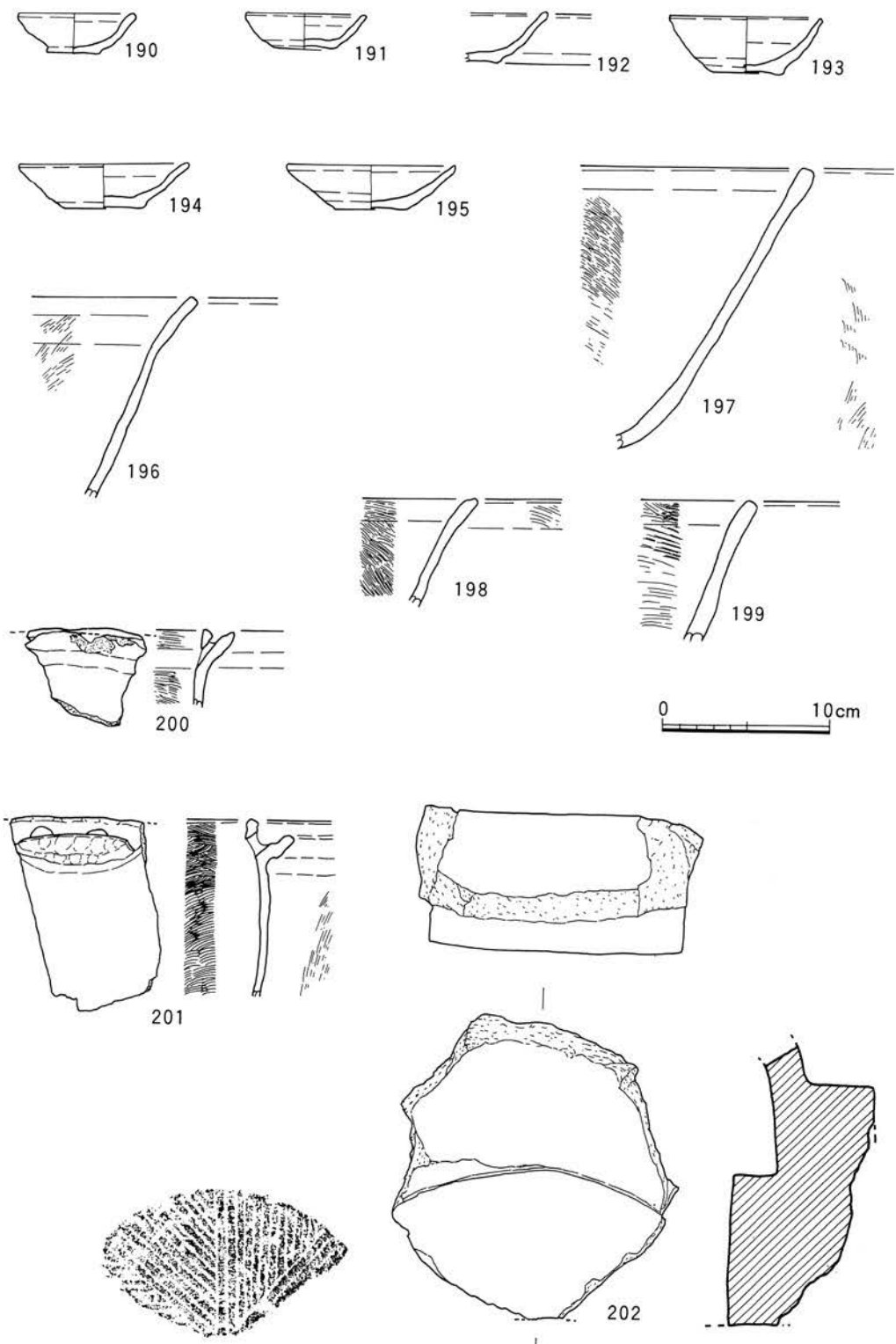


Fig. 73 SD406 溝出土遺物実測図 (1) (S = 1/4)

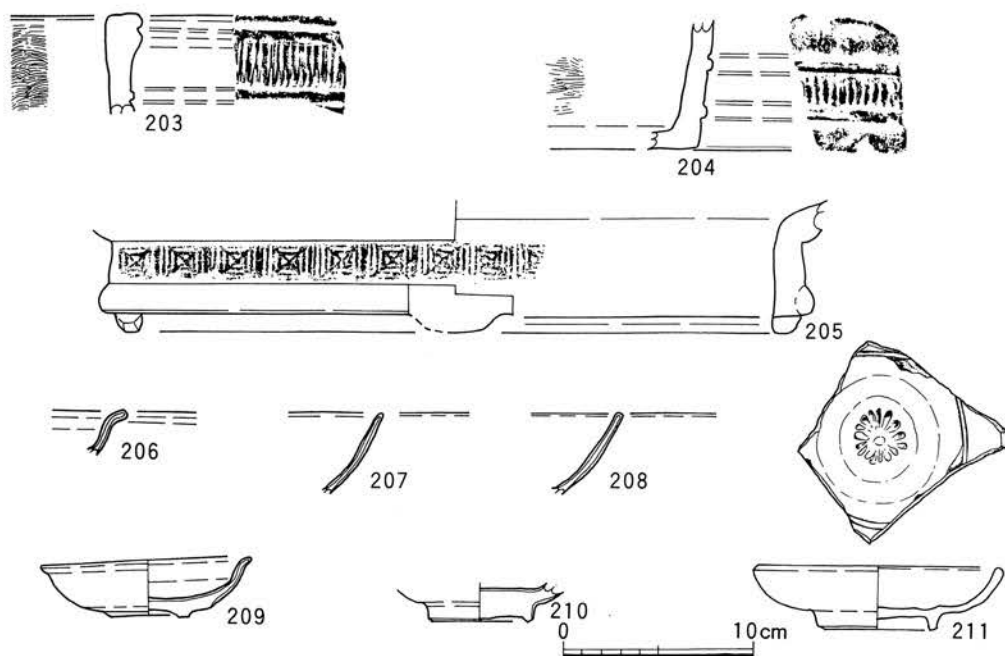


Fig. 74 SD406 溝出土遺物実測図 (2) (S = 1/4)

が著しく明確でない。外面の一部に煤が付着している。200は残存器高5.9cm。調整はハケ目・ナデを基調としている。色調は黒灰色。201は残存器高10.7cm。調整は内面細かいハケ目、外面ハケ目の後ナデ。外面の摩耗が進んでいる。色調は黒灰色。202は石製品の白か。長さ15.6cm、幅16.5cm、厚さ7.1cm。色調は灰褐色を基調としている。

SD406 溝出土遺物 (2) (Fig. 74)

203~205は瓦質土器の火鉢か。203は残存器高5.1cm。調整は内面ハケ目、外面ヨコナデによる。204は底部付近。残存器高6.8cm。調整は内面がハケ目の後ナデ及び指頭圧、外面ナデによる。205は底部。底径35cm、残存器高7cm。調整は摩耗が進んでおり明確でない。色調は褐色を基調としている。206は青磁皿。残存器高2.3cm。色調は灰緑色を基調としている。207は白磁の碗。残存器高4.3cm。色調は乳白色。208は陶器碗。残存器高4.2cm。色調は灰褐色を基調としている。209は青磁皿。口径10.9cm、器高3.2cm、高台径4.1cm。釉は内面と外面下半部まで施されている。口唇部は短く外反する。色調は暗緑色を基調としている。210は青磁碗。残存器高1.7cm、高台径5cm。畳付き部、高台内面は露胎。色調は暗緑色。211は染め付けの皿。口径12.6cm、器高3.4cm。高台径5.6cm。畳付き部、高台内面

は露胎。内面見込みに露胎の部分が一周する。内面見込みに菊花紋を配する。

SD404・412・419・411 溝出土遺物 (Fig. 75)

212～215はSD404出土遺物。212は土師器皿。残存器高1.2cm、底径4.4cm。底面は糸切り、色調は淡褐色。やや上げ底気味。213は青磁碗。残存器高1.3cm、高台径4.7cm。畳付き部、高台内面は露胎。214は瓦質土器の鍋。残存器高5.2cm。調整は内面ハケ目、外面は煤が付着しているので観察不能。215は土師器鍋。残存器高10.4cm。調整は主としてハケ目とナデ、ヨコナデによる。216はSD412出土遺物の皿。口径6.8cm、器高2.1cm、底径3.6cm。底面は糸切り。217はSD419出土遺物の皿。口径9.7cm、器高2.8cm、底径4.6cm。底面は上げ底気味で糸切り。体部は内湾しながら立ち上がる。218はSD411出土遺物の土師器鍋。口径24cm、残存器高11.1。主たる調整はハケ目・ナデによっている。色調は淡褐色・暗褐色を基調とする。

SD410 溝出土遺物 (Fig. 76)

219～222は土師器皿。219で口径6.9cm、器高2.2cm、底径4cm。ロクロナデが明確に観察できる。底面は糸切り。220は残存器高1.2cm、底径5cm。底面は糸切り。主たる調整はヨコナデ。221は口径8.8cm、器高2.1cm、底径4.8cm。底面は糸切り。底部の器壁が比

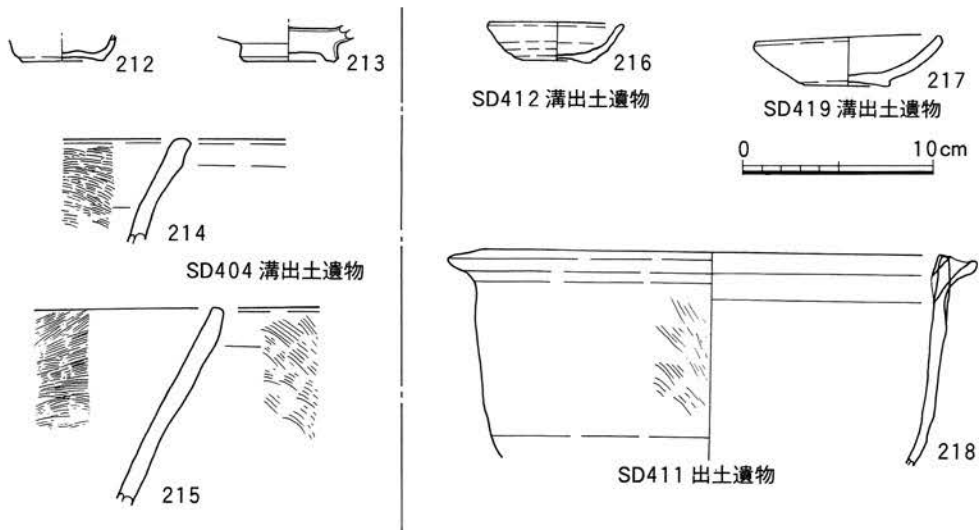


Fig. 75 SD404・412・419・411 溝出土遺物実測図 (S = 1/4)

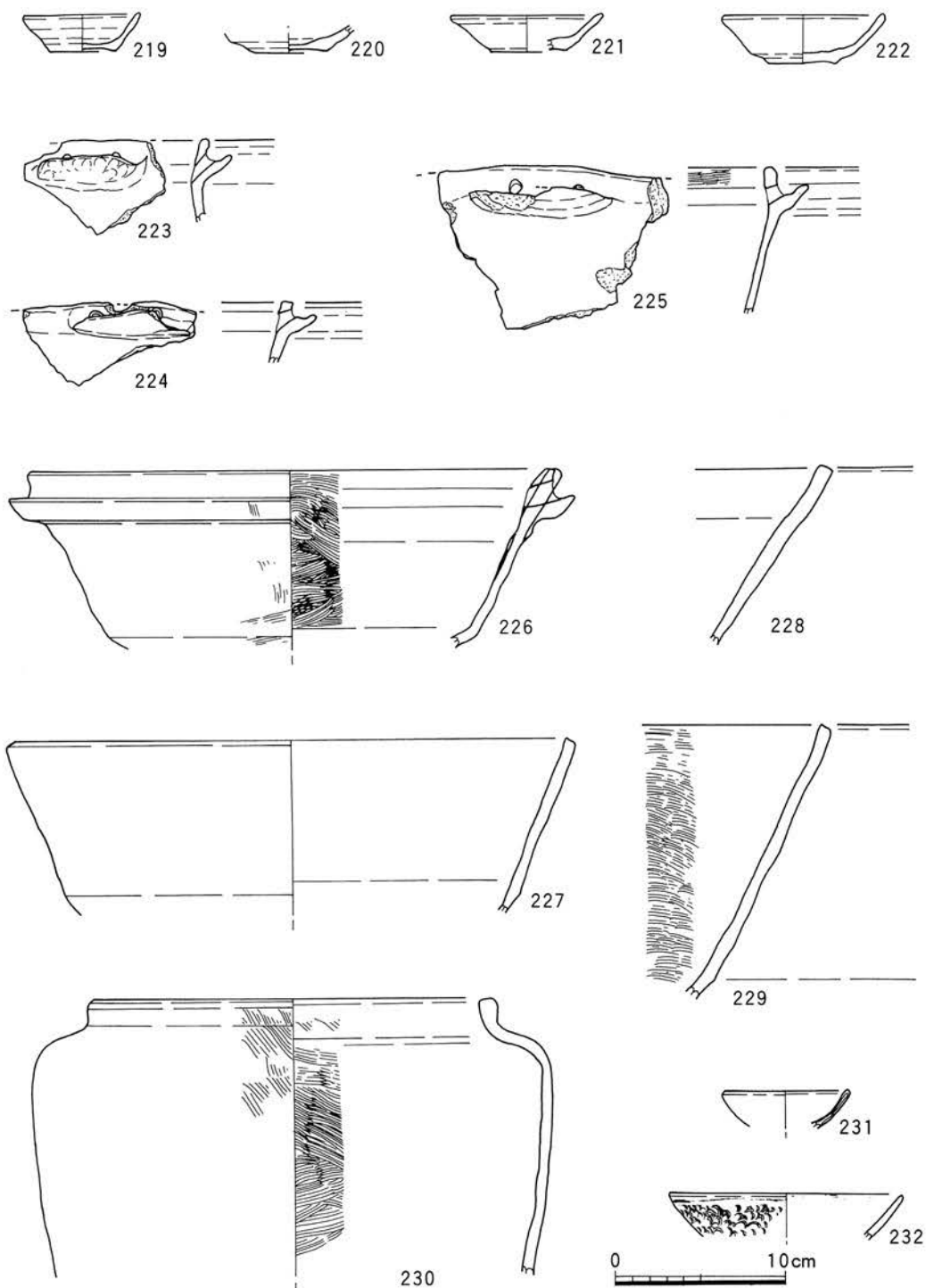


Fig. 76 SD410溝出土遺物実測図 (S = 1/4)

較的厚い。222は口径9.4cm、器高3cm、底径4cm。底面は糸きり。223～229は土師器鍋。223～225の残存器高はそれぞれ4.6cm・3.7cm・9.5cm。主たる調整はハケ目とナデによる。226は口径30cm、残存器高10.4cm。調整は内面ハケ目、外面ハケ目・ナデによる。外面の一部に煤が付着している。228・229の残存器高はそれぞれ10.5cm・16.4cm。調整は228が主としてナデ、229が内面ハケ目、外面ハケ目の後ナデとなっている。口縁部がわずかに内湾傾向にある。230は土師器甕。口径22.2cm。残存器高16.4cm。肩部が発達し、短頸壺の名称がふさわしいものか。調整は口縁部がヨコナデ、他はハケ目の後ナデを基調としている。231は白磁の皿。口径7.2cm、残存器高2.2cm。全面に釉がかかる。色調は乳白色を基調としている。232は染め付けの皿。口径13.6cm、残存器高2.6cm。

SD417 溝出土遺物 (Fig. 77)

233～235は土師器。杯底面はすべて糸きり。233は口径10.5cm、器高3.3cm、底径4.2cm。234は口径10.8cm、器高3.7cm、底径4.2cm。比較的厚い器壁をもつ。235は口径10.3cm、器高3.5cm、底径4.2cm。236は土師器鍋。残存器高5.7cm。調整は内面櫛状工具によるナデ、外面指頭によるナデを基調としている。237・238は瓦質土器の鍋。残存器高は双方とも9.5cmを測る。調整は内面ハケ目、外面ハケ目の後ナデ。口縁部がわずかに外傾傾向にある。

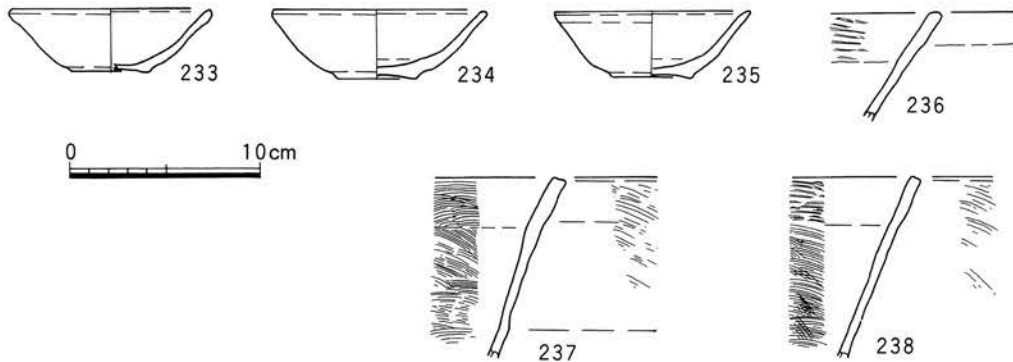


Fig. 77 SD417 溝出土遺物実測図 (S = 1/4)

### 3. 掘立柱建物と出土遺物

当調査区では1棟を検出したのみである。その所属する時期は柱穴からほとんど遺物が得られなかったので不明。

#### SB403 掘立柱建物 (Fig. 78)

C・D-2・3に所在する。2間×2間の規模を有する。桁・梁の識別はできない。柱間の各々の距離は図中に記載している。柱穴の規模は径0.25~0.5m、深さ0.3~0.4mを測る。SD402と404溝の間にこの建物が位置しているが、有機的な関係があるものか。

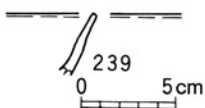


Fig. 79 SB403  
出土遺物実測図  
(S=1/4)

#### SB403 掘立柱建物出土遺物 (Fig. 79)

柱穴埋土から土師器細片を微量検出したが、図化できたのは239の土師器杯1点のみ。残存器高3.3cm。口径は計測不能。調整は主としてロクロナデによる。色調は淡褐色を基調としている。

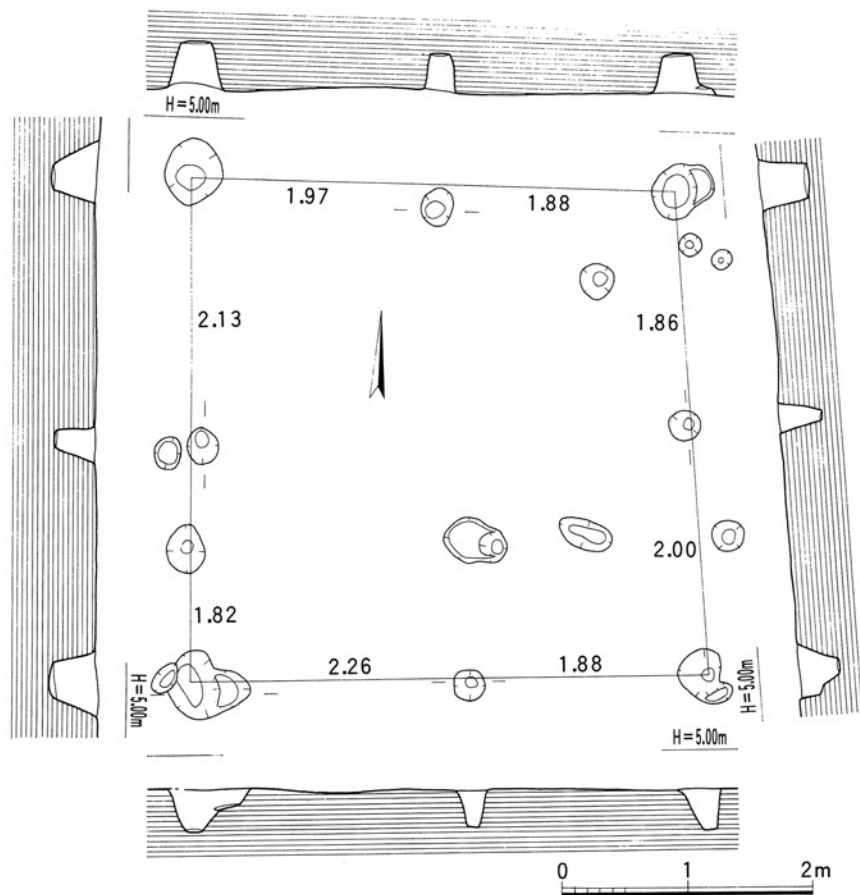
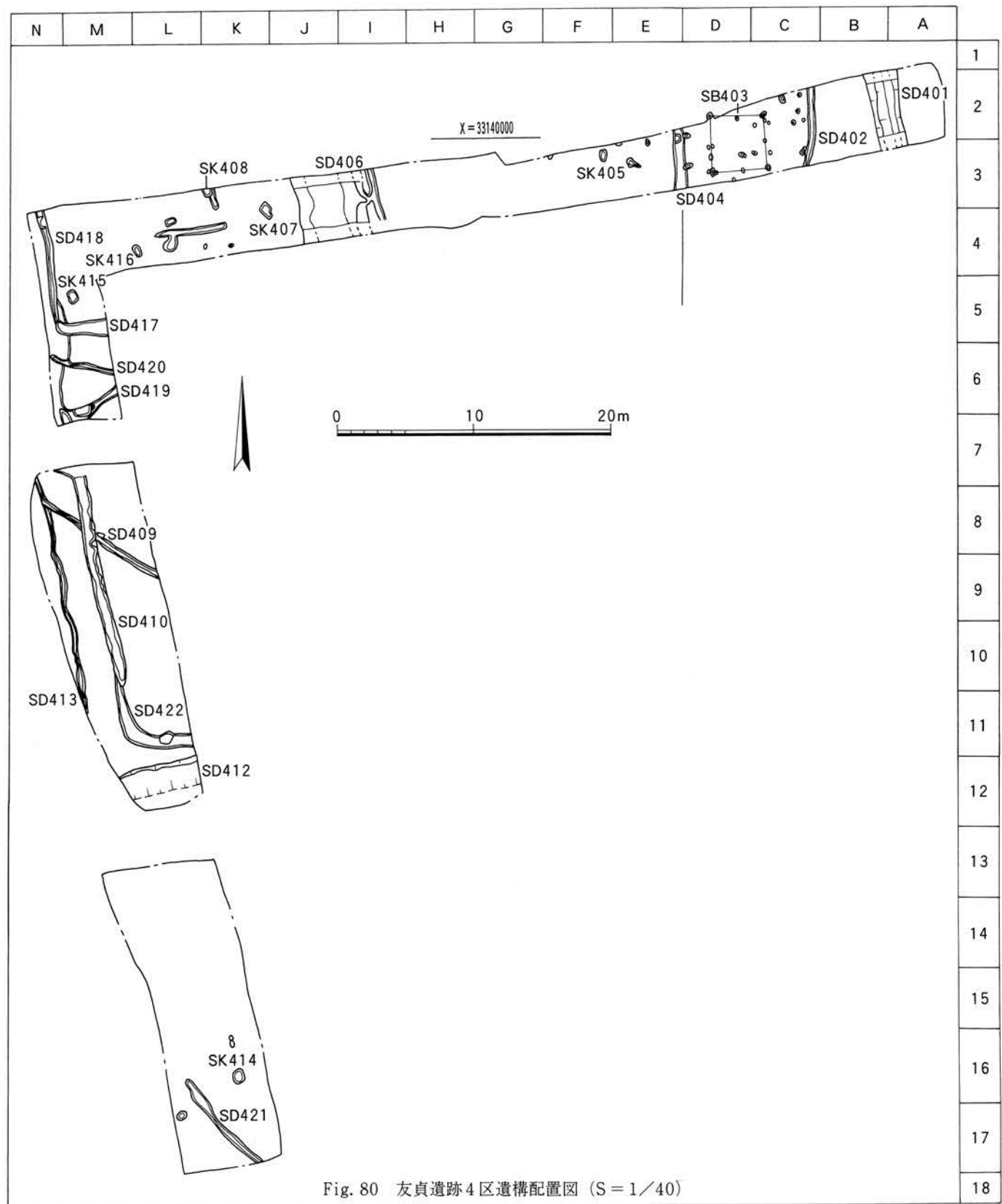


Fig. 78 SB403 掘立柱建物実測図 (S=1/40)



## Ⅷ. 調査の記録 — 5区 —

この調査区では弥生時代から近世に至までの遺物・遺構を検出した。古い順に遺構・遺物を取り上げ、特徴的なものの中からその詳細を以下に記載する。

### 1. 土壌と出土遺物

弥生時代・古墳時代・近世の所産と考えられるものを検出した。以下に記載するもので、SK538・540・541・550・549・551・528・533・536は弥生時代、SK505・517・525・526・537・542・548・557は古墳時代、SK541・546は近世の所産である。

#### SK538土壌 (Fig. 81)

C-2グリッドで検出した。上面の平面形は東西に細長い楕円形を基調としたものと考えられるが、他遺構との切り合い・壁の崩落によって検出時には不定型であった。中心部で東西1.87m、南北1.07m、深さ0.22mを測る。遺構は砂混じりの淡黒褐色土に掘り込まれ、底面には緩やかな起伏がある。壁は比較的角度をもって立ち上がる。

埋土は2層からなり、上層は黒褐色、下層淡褐色砂質土である。出土遺物は上層から弥生土器細片を微量検出した。

#### SK538土壌出土遺物 (Fig. 82)

240~242は弥生土器。240は壺の頸部付近か。残存器高6.9cm。外面に2cmの間隔をおいて2条の沈線が走る。調整は主としてナデ、色調は褐色を基調とする。241は甕。残存器高4cm。外面口縁部下部にはハケ目調整。色調は淡褐色。242は甕。残存器高5.9cm、底径8.2cm。調整は外面ハケ目、内面ナデによる。242は土製品の紡錘車。径5.3cm、厚さ1.2cm。中央の穿孔は

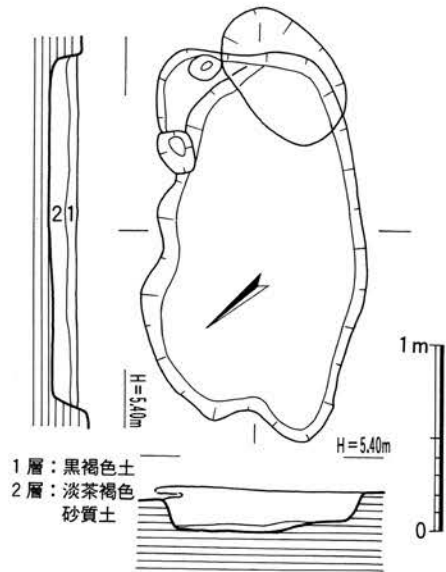


Fig. 81 SK538土壌実測図 (S = 1/40)

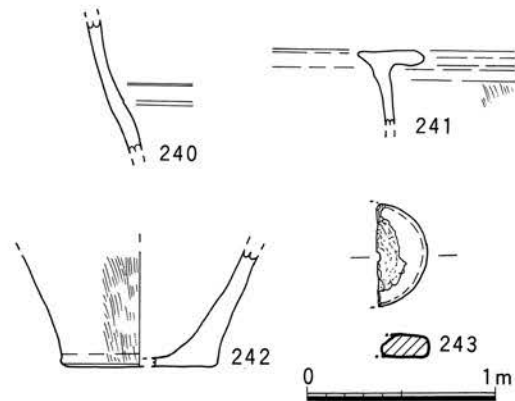


Fig. 82 SK538土壌出土遺物実測図 (S = 1/4)

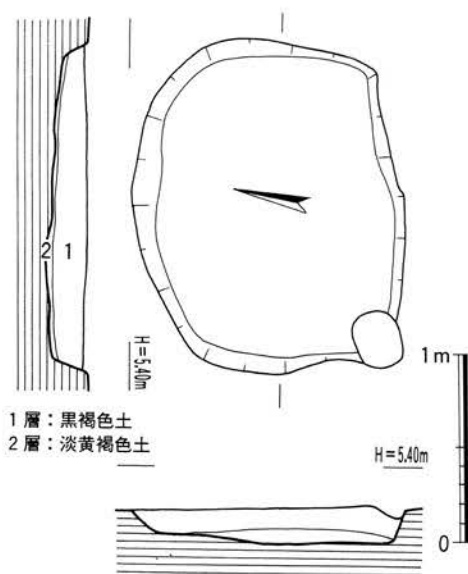


Fig. 83 SK540 土壙実測図 (S = 1/40)

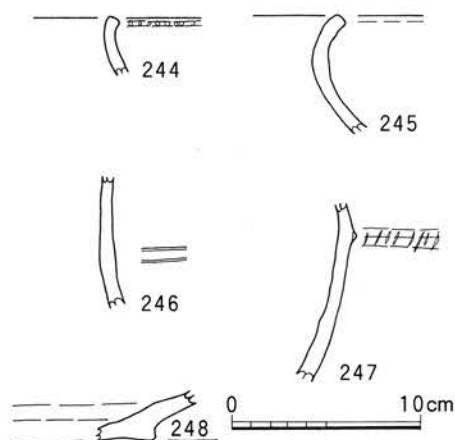


Fig. 84 SK540 土壙出土遺物実測図 (S = 1/4)

る刺突文がある。248は壺の底部か。残存器高1.9cm。調整は主としてナデによっている。

#### SK541・550 土壙 (Fig. 85)

双方ともB-2グリッドで検出した。SK541は上面の平面形が東西に長い楕円形を呈するものである。中心部で東西1.59m、南北0.87m、深さ0.2mを測る。底面は全体的に小さな起伏があり、南壁寄りが多少深くなっている。底面には小穴が2基存在する。上面からの切り込みは確認できなかったので当遺構に付随するものか。埋土は黒褐色土系のものを主体とし、全体的に砂が混在している。出土遺物は弥生土器細片を少量検出した。

径0.5cm程度。調整は主としてナデ、色調は明褐色。

#### SK540 土壙 (Fig. 83)

C・B-2グリッドで検出した。上面の平面形は東西にやや長い楕円形を基調とするが、南部掘込み部付近が他遺構との切り合いによって多少変形している。中心部で東西1.75m、南北1.45m、深さ0.19mを測る。底面には全体的に緩やかな起伏があり、壁は北側を除き比較的角度をもって立ち上がる。

埋土は黒褐色土(砂混じり)、淡黄褐色砂質土の2層からなり、1層が埋土の大半を占める。出土遺物は弥生土器片を微量検出した。

#### SK540 土壙出土遺物 (Fig. 84)

244~246・248は弥生土器の壺か。244は口縁部付近。残存器高3cm。口唇部は丸味を帯び外面端部には工具による刺突文を有する。245は残存器高6cm。口縁部は大きく外反する。調整は主としてナデであるが、口唇部外面には指頭圧痕が観察できる。246は頸部付近か。残存器高7.7cm。2条の沈線を配する。調整は主としてナデ。色調は明褐色。247は甕か。残存器高9.5cm。断面三角形の突帯を有し、突帯には工具による

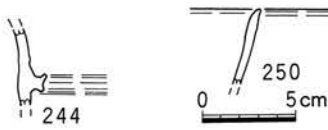


Fig. 86 SK540 土壙出土遺物  
実測図 (S = 1/4)

SK550はSK541に切られている  
ので上面の平面形は確定できない  
が、概ね楕円形を基調とするものと  
考える。中心部で東西1.85m、深  
さ0.1mを測る。埋土はSK541の  
ものと基本的には同質のものであ  
る。出土遺物は埋土中から土器細  
片を少量検出した。

SK541 土壙出土遺物 (Fig. 86)

249は壺の胴部付近か。残存器高  
4cm。突帯を有し、強いヨコ  
ナデにより突帯部分は窪んで  
いる。調整は主としてヨコナ  
デ・ナデによる。色調は淡褐  
色を基調とする。250は鉢も  
しくは壺の口縁部か。残存器  
高4cm。一部に赤色顔料が  
観察できる。

SK549 土壙 (Fig. 87)

B-1区で検出した。当遺  
構はこの調査区が所在する高  
畑の北西端に位置し、北部は  
地下げによって削平されてい  
る。遺構の切り合いは東側掘  
込みをP-5に、西側の掘込  
みをSK548に切られている。  
検出時の上面の平面形は不定

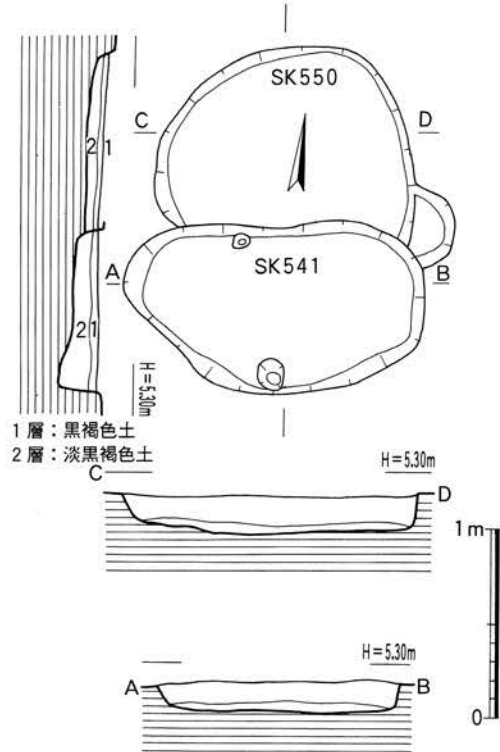


Fig. 85 SK541・550 土壙実測図 (S = 1/40)

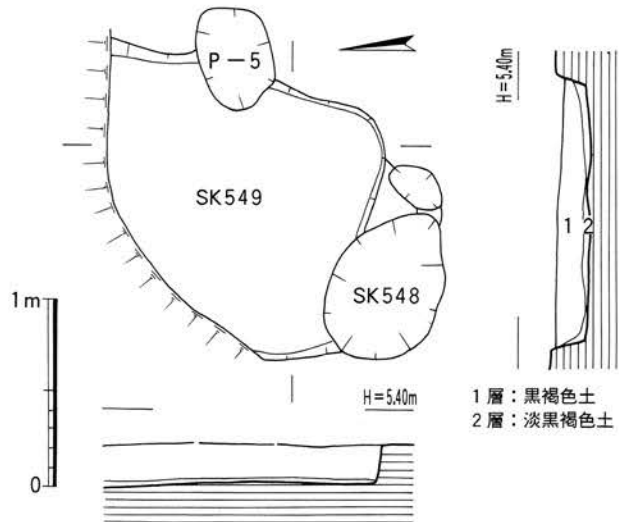


Fig. 87 SK549 土壙実測図 (S = 1/40)

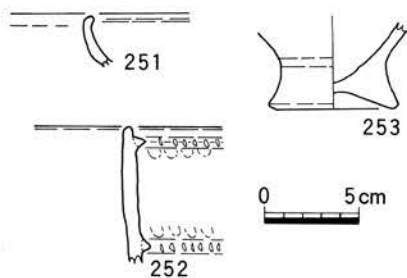


Fig. 88 SK549 土壙出土遺物実測図 (S = 1/4)

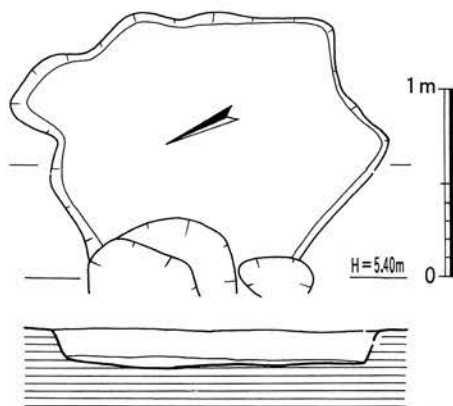


Fig. 89 SK551 土壙実測図 (S = 1/40)

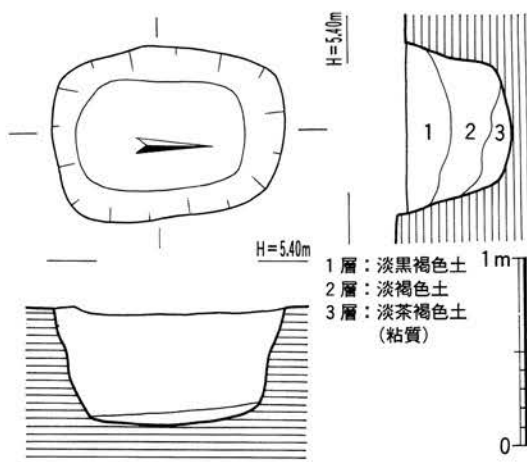


Fig. 90 SK528 土壙実測図 (S = 1/40)

型であるが、元来隅丸長方形を基調としたものか。断面及び土層図作成部分で幅1.47m、1.43m、中心部で深さ0.2mを測る。底面は小さな起伏があり、壁は比較的角度をもって立ち上がる。

埋土は黒褐色土系のものを基調とし、下部になるに従い砂粒を多く含む。出土遺物は主として1層から弥生土器片（甕）を少量検出した。

#### SK549 土壙出土遺物 (Fig. 88)

251～253は弥生土器。251は壺の口縁部付近か。残存器高3.6cm。赤褐色を呈し主たる調整はナデ。252は甕。残存器高8.2cm。2条の突帯を有し、そこに刺突文を配する。調整は指頭又は工具によるナデを主体としている。色調は赤褐色を呈する。253は甕。残存器高4.2cm、底径6cm。調整は外面がハケ目の後ナデ、内面がナデを主体としている。

#### SK551 土壙 (Fig. 89)

D・E-4グリッドで検出した。上面の平面形は不定型を呈する。遺構の切り合いは掘込み西部をP-7に切られている。中心部で南北1.75m、東西1.5m程度、深さ0.2mを測る。底面にはわずかな起伏があり、北寄りがわずかに深くなっている。

埋土は黒褐色土系のものを基調とし、全体的に砂粒を多く含有している。出土遺物は埋土上層から弥生土器片を微量検出した。

#### SK528 土壙 (Fig. 90)

当遺構と次に記載するSK533はSK551以前に記述した一連の土壙群と違う形態を示している。そのため

遺構番号は昇べき順にはなっていない。

この土坑はC-3グリッドで検出した。上面の平面形は南北に長い隅丸長方形を基調としている。中心部で南北1.23m、東西0.89m、深さ0.6mを測る。底面は舟底状を呈し、壁は湾曲しながら角度をもって立ち上がる。

埋土は3層に分層できる。この遺構の形態から、土坑墓の可能性があったのでセクションの精査を行ったが、土坑墓であるための積極的な資料は得られなかった。出土遺物には弥生土器片がある。

#### SK533 土坑 (Fig. 91)

E-2グリッドで検出した。上面の平面形は円形を基調とするが、東西方向がやや長い。北西端で小穴を切っている。中心部で東西1.02m、南北0.96m、深さ0.76mを測る。底面は舟底状を呈し、壁は急角度で立ち上がる。南西部の掘込み下0.1m付近には狭隘な弧状を呈する平坦部がある。

埋土は黒色土系のものを基調とし、出土遺物には少量の弥生土器片がある。

#### SK536 土坑 (Fig. 92)

E-4グリッドで検出した。上面の平面形は不定型を呈するが、元来隅丸長方形を呈していたものとする。他遺構との切り合い関係はP-7・SK551を切っている。底面は舟底状を呈し壁は直角に近い角度で立ち上がる。中心部で東西0.6m程度南北0.86m、深さ0.45mを測る。

埋土は3層に分層できる。出土遺物は図中の弥生土器（高杯）のほか弥生土器片が微量。

#### SK536 土坑出土遺物 (Fig. 93)

254は弥生土器の高杯。鋤状口縁を呈し、口径18cm、残存器高21.1cm。調整は口縁部ヨ

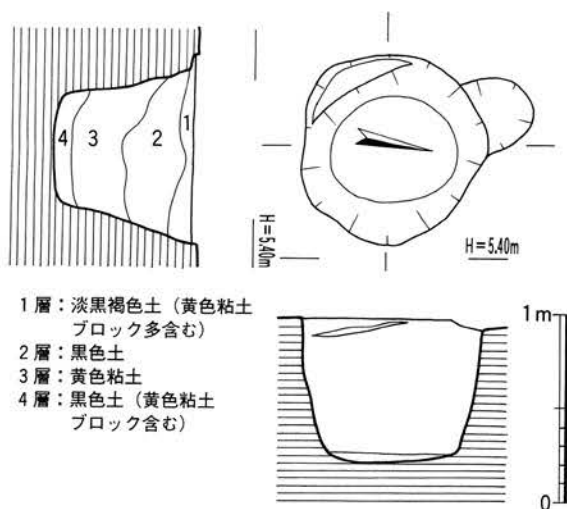


Fig. 91 SK533 土坑実測図 (S = 1/40)

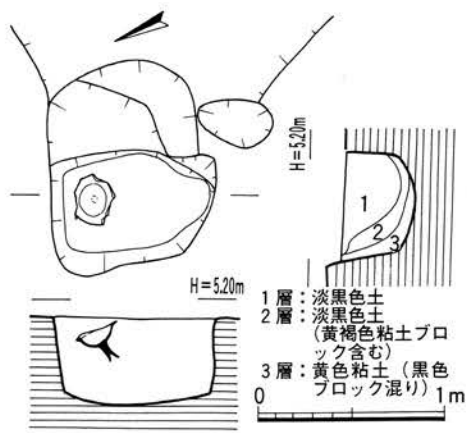


Fig. 92 SK530 土坑実測図 (S = 1/40)

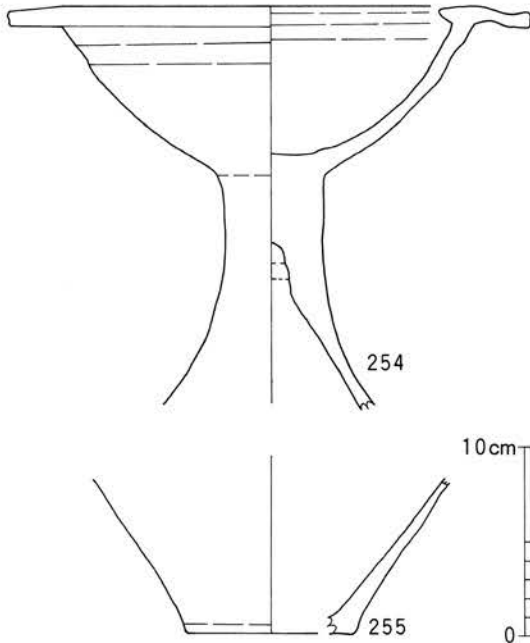


Fig. 93 SK536 土壙出土遺物実測図 (S = 1/4)

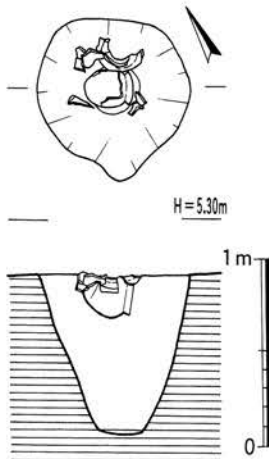


Fig. 94 SK505  
土壙実測図  
(S = 1/4)

コナデ、その他は主としてナデによる。色調は淡褐色を基調とする。255は甕。残存器高8.2cm、底径9cm。調整は内面ナデ、外面は摩耗が進んでおり明確でない。

#### SK505 土壙 (Fig. 94)

G-5グリッドで検出した。上面の平面形は円形を基調とするが、南部掘込み付近で小穴と切り合っている。中心部で径0.8m程度、深さ0.85mを測る。底面は掘込み面の径に比して狭く径0.25m程度である。壁はゆるいカーブを描きながら比較的角をもつて立ち上がる。

埋土は上層の黒色土、下層の淡黒褐色土に大別できる。出土遺物は上層の掘込み下0.2mの範囲に集中し、

またその位置も中央部に偏っていた。これらの遺物はこの遺構がほとんど埋まりかけていた時期に投棄または埋置されたものとする。出土遺物には土師器(甕・高杯)等がある。一括遺物と考える。

#### SK505 土壙出土遺物 (Fig. 95)

256~260は土師器。256・257は土師器甕。256で残存器高9.8cm。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリ、ハケ目による。257は口径17cm、器高24.6cm。ほぼ完形品。口縁部は内湾し、口唇部は摘みあげによって先鋭化している。外面肩部に櫛状工具により波状紋を施している。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。258は2重口縁の壺。口径20.5cm、器高33cm。口縁部は大きく外反する。頸部はほぼ直立し下半部に断面台形の

突帯を状有する。調整は口縁部・頸部内外面ヨコナデ、外面胴部上半部ナデ、下半分ハケ目、底部付近ハケ目の後ナデ、内面胴部ヘラケズリによる。259は壺。残存器高8.7cm。調整はヨコナデ・ナデ・指頭圧による。260は台付き杯。口径8.8cm、器高7.7cm、脚径10.1cm。

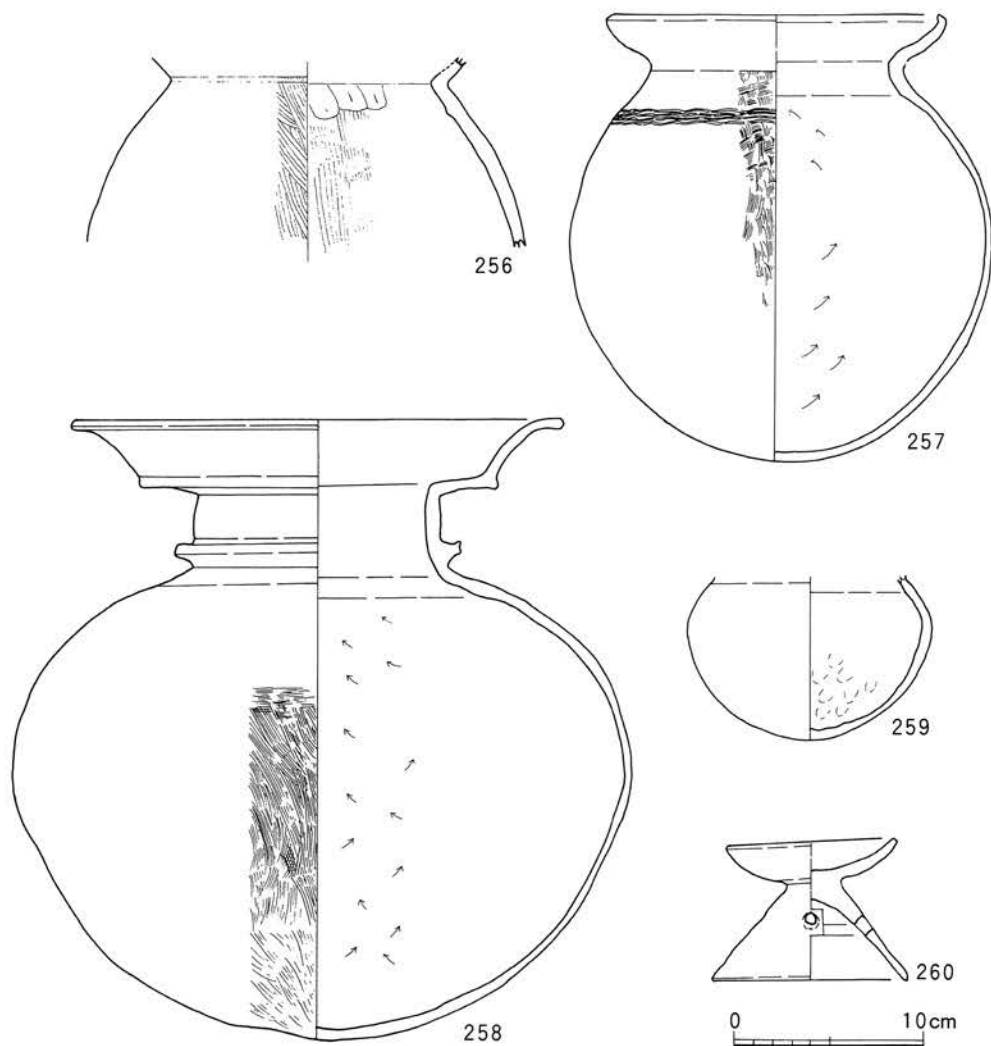


Fig. 95 SK505土壙出土遺物実測図 (S = 1/4)

脚部に一ヶ所焼成前の穿孔を有する。調整はヨコナデ・ナデによる。

SK517土壙 (Fig. 96)

E-4グリッドで検出した。上面の平面形は元来東西にやや長い楕円形を基調としていたものと考え、他遺構と切り合っているため検出時には不定型を呈していた。他遺構との新旧関係は当遺構が新。中心部で東西0.9m程度、南北0.73m、深さ0.46mを測る。底面にはわずかな起伏があり、壁は小さくカーブを描きながら比較的角度をもって立ち上がる。また、掘込み南面を除き壁寄りに深さ0.1m付近に平坦部がある。

埋土は2層に分層でき黒褐色土系ものを基調としている。出土遺物には土師器（壺・小型丸底甕等）がある。図化しているものは底部直上で検出したもののみである。

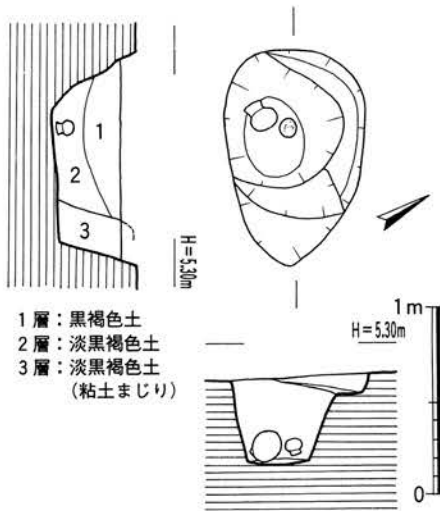


Fig. 95 SK517 土壌実測図 (S = 1/40)

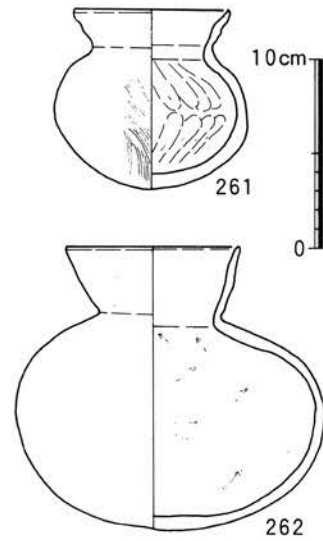


Fig. 97 SK517 土壌出土遺物実測図 (S = 1/4)

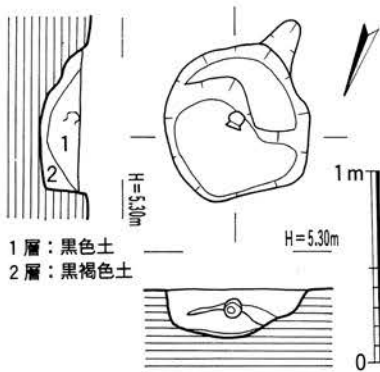


Fig. 98 SK525 土壌実測図 (S = 1/4)

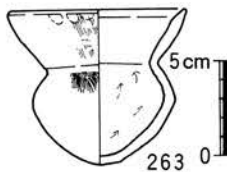


Fig. 99 SK525 土壌出土遺物実測図 (S = 1/4)

#### SK517 土壌出土遺物 (Fig. 97)

261・262は土師器壺。2個体共ほぼ完形品。261で口径8cm、器高8.5cm。調整は口縁部ヨコナデ、外面体部ハケ目、内面ヘラケズリを主体としている。262は口径9cm、器高14cm。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヘラケズリによる。

#### SK525 土壌 (Fig. 98)

D~C-3グリッドで検出した。上面の平面形は不定形を呈するが、元来楕円形を基調としていたものと考ええる。中心部で南北0.8m、東西0.75m、深さ0.25

mを測る。底面の状況は遺構南半と北半では、レベル差があり最大0.15mを測る。中心部断面では舟底状を呈する。

埋土は2層に分層でき、黒褐色土系のものを基調としている。出土遺物は土師器が少量出土した。図中にあるものは小型丸底甕。完形品である。

#### SK525 土壌出土遺物 (Fig. 99)

263は土師器小型丸底甕。口径9.2cm、器高8.2cm。口縁部外面ハケ目・ヨコナデ、内面ヨコナデ、胴部外面ハケ目・ナデ、内面へ

ラケズリを主体とする。

SK526 土壙 (Fig. 100)

C-4・5グリッドで検出した。上面の平面形は南北にやや長い楕円形を基調としている。中心部で東西0.63m、南北0.74m、深さ0.59mを測る。底面は舟底状を呈し壁は多少カーブを描きながら垂直に近い角度で立ち上がる。

埋土は3層に分層でき、黒褐色土・褐色土系のものを基調としている。出土遺物には土師器(甕)があり、その大半が底

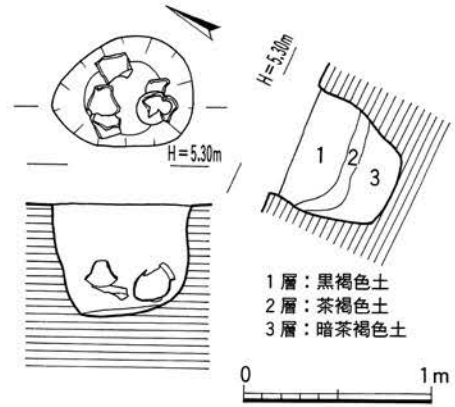


Fig. 100 SK526土壙実測図 (S=1/40)

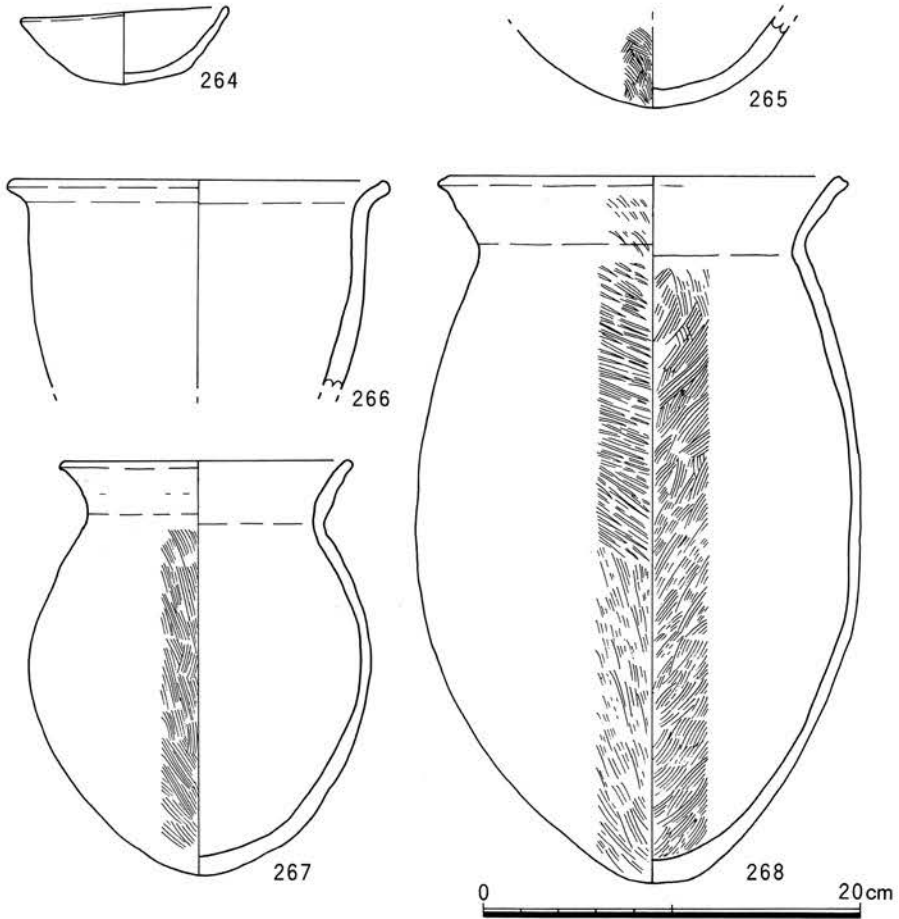


Fig. 101 SK526土壙出土遺物実測図 (S=1/4)

面付近で検出した。一括遺物と考える。

#### SK526 土壙出土遺物 (Fig. 101)

264は土師器杯。口径10.8cm、器高4.2cm。調整は指頭によるナデ・工具によるナデを主体としている。ほぼ完形であり、赤色顔料が残る。外面の一部に黒斑有り。色調は淡褐色。265は甕の底部か。残存器高4.3cm。調整は外面ハケ目、内面ナデによる。内外面の一部に煤が付着している。266は土師器甕。口径11.4cm、残存器高11.1cm。調整は主としてナデ。267は土師器甕。口径14.9cm、器高22cm。口縁部器壁は比較的厚く外反する。胴部は概観して砲弾型を呈する。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ナデによる。268は土師器甕口径21.6cm、器高37.3cm。底部はわずかに平底状の様相を呈する。口縁部は外反傾向にある。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面上半タタキ、下半ハケ目、内面ハケ目を主体としている。

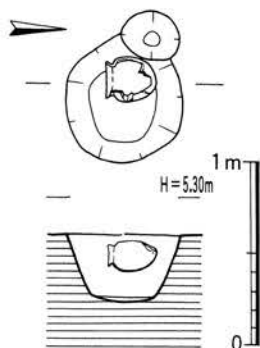


Fig. 102 SK537 土壙実測図 (S = 1/40)

る。

#### SK537 土壙 (Fig. 102)

D-5グリッドで検出した。上面の平面形は東西にやや長い楕円形を呈する。西部掘込み付近を小穴に切られている。中心部で東西0.67m、南北0.62m、深さ0.36mを測る。断面形は逆台形状を基調とするが、底面はわずかに舟底状を呈する。

埋土は2層に大別でき、上層黒色土、下層淡黒褐色土からなっている。図中の検出遺物は土師器の甕。上層の黒褐色土中からの検出である。その他、埋土全域から土師器を検出したが、

いずれも細片であり、図化できなかつた。

#### SK537 土壙出土遺物 (Fig. 103)

269は土師器甕。口径18cm、器高25.1cm。口縁部は内湾傾向にある。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目・ナデ、内面ヘラケズリによる。9割方残存する。外面の一部に煤が付着している。

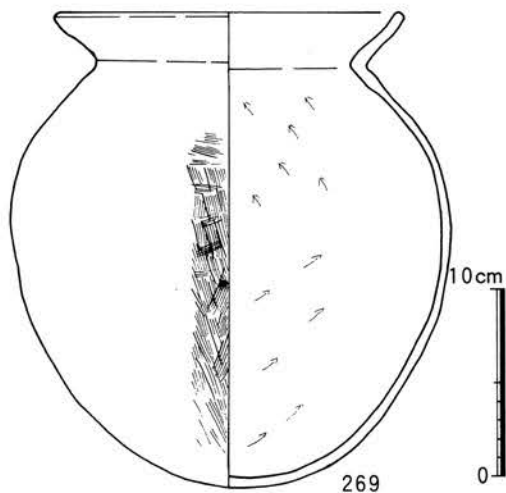


Fig. 103 SK537 土壙出土遺物実測図 (S = 1/4)

SK542 土壙 (Fig. 104)

B-3グリッドで検出した。上面の平面形は南北に長い楕円形を基調としている。中心部で南北0.91m、東西0.73m、深さ0.7mを測る。底面には小さな起伏があるが、概ね平坦であり、壁は小さくカーブしながら角度をもって立ち上がる。

埋土は上層黒色土、下層淡黒褐色土から成っている。検出遺物には図中にある土師器壺と壁ざわで検出した自然石、土師器細片である。

SK542 土壙出土遺物 (Fig. 105)

270は土師器壺。口径8.6cm、器高10.6cm。口縁部は大きく外反し口唇部は摘み上げの様相を呈する。調整は主としてヨコナデ・ナデ・ヘラケズリによる。完形品である。271は土師器甕。口径16.3cm、残存器高5.2cm。調整は主としてヨコナデ。内面の一部に黒斑部分有り。

SK548 土壙 (Fig. 106)

B-1グリッドで検出した。上面の平面形は南北に長い楕円形を基調としている。他遺構との切り合い関係は当遺構がSK549を切っている。中心部で南北0.85m、東西0.61m、深さ0.42mを測る。底面は舟底状を呈し、壁は四方ともカーブを描きながら比較的角度をもって立ち上がる。

埋土は上層黒色土、下層淡茶褐色土（砂混じり）に大別できる。検出遺物には土師器（壺・杯）がある。図中にあるように一括して下層からの検出である。これらの遺物はほぼ完形であった。

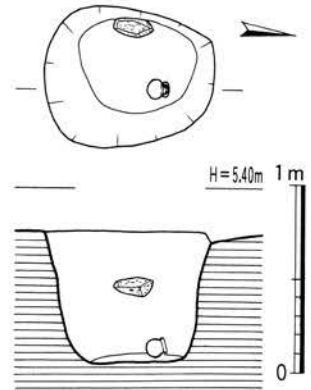


Fig. 104 SK542土壙実測図 (S = 1/40)

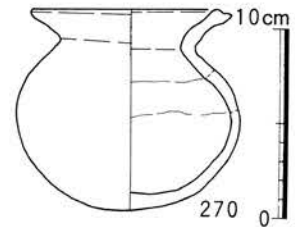


Fig. 105 SK542土壙出土遺物実測図 (S = 1/4)

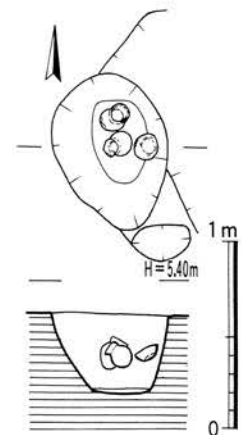


Fig. 106 SK548土壙実測図 (S=1/4)

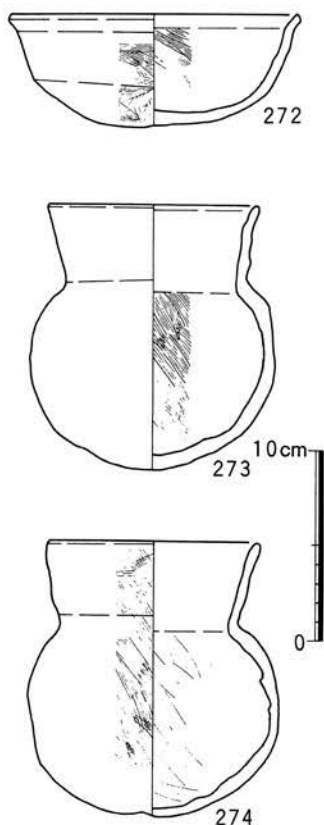


Fig. 107 SK540 土壌出土遺物  
実測図 (S = 1/4)

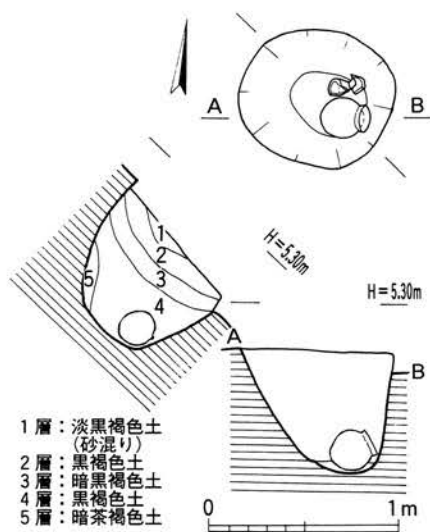


Fig. 108 SK557 土壌実測図 (S = 1/40)

#### SK548 土壌出土遺物 (Fig. 107)

272は土師器杯。口径15cm、器高6cm。調整は口唇部はわずかに外反する。調整は口縁部内外面ヨコナデ、他はハケ目・ナデを主体としている。273は土師器壺。口径10.9cm、器高14cm。口縁部は直立傾向にあるが、口唇部に至りやや外反傾向を見せる。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面ハケ目を主体としている。274は土師器壺。口径11cm、器高14.5cm。口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がる。調整は口縁部外面ヨコナデ・ハケ目、内面ヨコナデ、胴部外面ハケ目・ナデ、内面ヘラケズリによる。

#### SK557 土壌 (Fig. 108)

A-5グリッドで検出した。上面の平面形は東西にやや長い楕円形を基調としている。遺構掘込み付近の東側、南側を水田耕作のための地下げによって一部削平されている。中心部で東西0.79m、南北0.74m、深さ0.63mを測る。底面は掘込み面に比して狭く幅0.3~0.4m程度で、断面舟底状を呈する。壁は東寄り垂直に近い角度で立ち上がるのに対し、その他はなだらかなカーブを描きながら立ち上がる。

埋土は5層に分層でき黒褐色土系のものを基調としている。出土遺物は土師器甕がある。図化しているものは2個体のみであるが、土器片の状況から考えて少なくとも3個体以上のものが一括して埋置されていたものと考えられる。

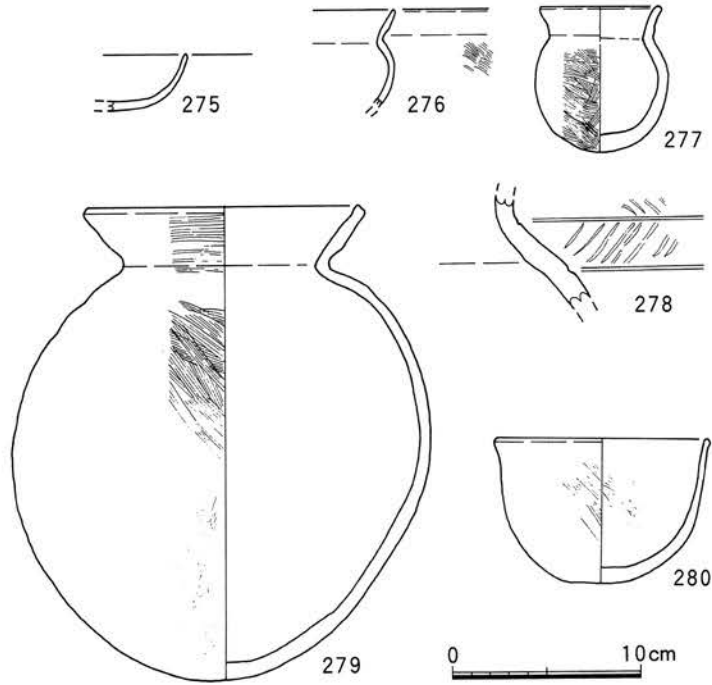


Fig. 109 SK557 土壙出土遺物実測図 (S = 1/4)

SK557 土壙出土遺物 (Fig. 109)

275 は杯。器高 3cm。調整はヨコナデを主体としている。276 は小型丸底埴、残存器高 5.1cm。調整は口縁部ヨコナデ、胴部内面ヘラケズリ。277 は小型丸底埴。口径 6.1cm、器高 5.7cm。ほぼ完形品。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ナデを主体としている。278 は壺の頸部付近か。残存器高 15.2cm。調整は内面口縁部付近ナデ、胴部付近ヘラケズリ、外面ナデによる。頸部外面には 2 条の沈線がある。279 は甕。口径 14.2cm、器高 24.9cm。完形品である。口縁部は直線的にのびる。口唇部にはわずかに摘み上げの痕跡が確認できる。調整は口縁部外面ヨコナデの後ハケ目、内面ヨコナデ、胴部ハケ目・ナデ内面ヘラケズリによる。280 は椀。口径 11cm、器高 7.6cm。口唇部はわずかに外反傾向にある。調整は口唇部ヨコナデ、他はナデ・ハケ目を主体としている。外面の一部に黒斑部分がある。

## 2. 井戸と出土遺物

今回の調査で3基検出した。531・532では埋土下層から甕を一括して検出し、井戸の廃棄の際の祭祀を考える上で良好な資料を得ることができた。以下その詳細を記す。

### SE513井戸 (Fig. 110)

E-4グリッドで検出した。遺構掘込みの東半分は他遺構と複雑に切り合っている。その切り合いは当遺構が全て切られている。上面の平面形は隅丸方形を基調としている。中心部で一辺0.95m程度、深さ1.11mを測る。底面は舟底状を呈し、壁は小さくカーブしながら垂直に近い角度で立ち上がる。

埋土は3層に分層でき、黒褐色土系のものを基調としている。出土遺物には弥生土器片がある。その大半は2層からで比較的まとまった量を検出した。

### SE513井戸出土遺物 (Fig. 111)

281は杯。口径9.6cm、器高3.1cm。淡褐色を呈し、主たる調整はナデ。282は杯。口径11.2cm、器高3.7cm。主たる調整はナデ。色調は褐色を基調とし、外面の一部に黒斑部分有り。283は鉢。口径15cm、器高8.7cm。口縁部はわずかに内傾する傾向にあるが概ね直線的に立ち上がる。284は甕。残存器高3.6cm主たる調整はナデ。285・286は壺。同一個体可能性が高いが接点がない。285で残存器高9.4cm。外面頸部～肩部にかけて櫛状工具による施紋がある。調整はナデを主体としている。色調は茶褐色を基調としている。286は残存器高

3.5cm、底径6.4cm。調整は内外面共にハケ目・ナデによる。287は高杯の脚部。残存器高7.3cm。脚部と裾部の境に沈線を有する。

### SE531井戸 (Fig. 112)

E-2・3グリッドで検出した。上面の平面形は掘込み面の崩落のため不定型を呈するが、元来円形を基調としていたものとする。他遺構との切り合い関係は、当遺構がSB556を切っている。素掘りで2段掘りの井戸である。中心部で東西1.83m、南北1.73m、深さ1.47mを測る。1段目の深さは0.1～

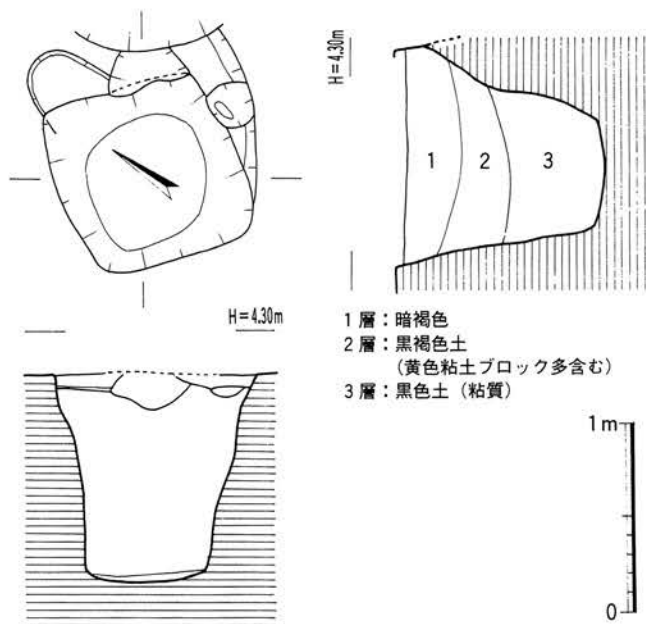


Fig. 110 SE513井戸実測図 (S=1/40)

0.15m程度で、そこから垂直に掘り込まれている。ただし、壁面下半部は崩落のため大きく外側に突出している。底面は幅0.6~0.7m程度である。

埋土は4層に分層でき、黒色土系のものを基調としているが4層には淡青灰色土を検出した。出土遺物の大半は土師器の甕。遺物は1~3層

で検出したが、3層からはほぼ完存する甕を7個体分検出した。井戸が廃棄されてからある程度の時間がたってからこれらの土器が埋置（埋納）された状況を示している。

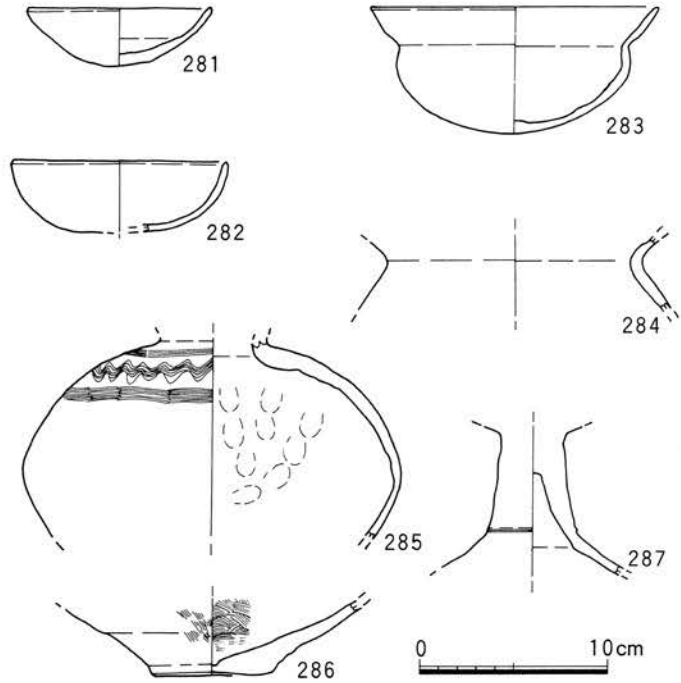
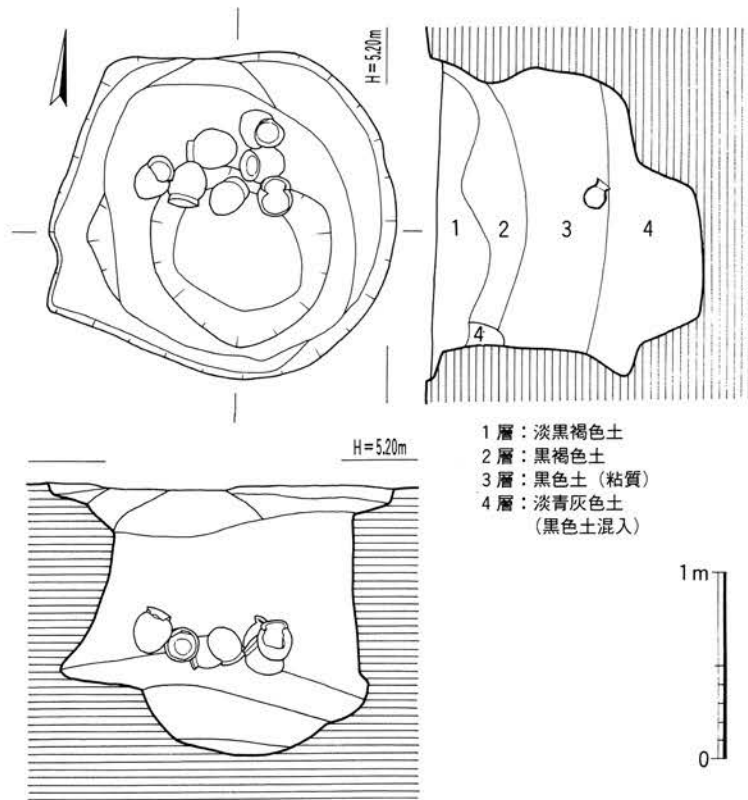


Fig. 111 SE513 井戸出土遺物実測図 (S = 1/4)



- 1層：淡黒褐色土
- 2層：黒褐色土
- 3層：黒色土（粘質）
- 4層：淡青灰色土  
（黒色土混入）

Fig. 112 SE531 井戸実測図 (S = 1/40)

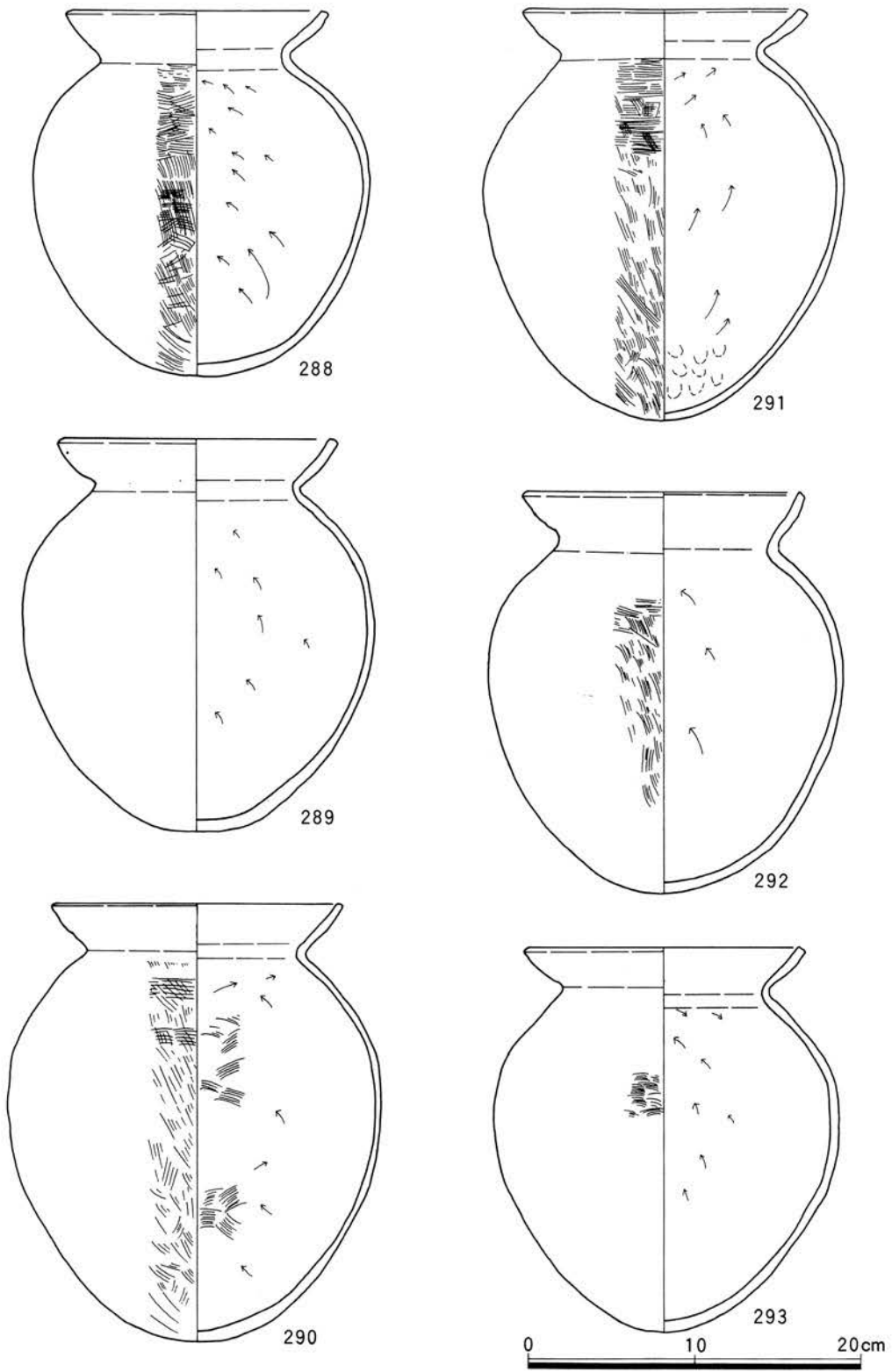


Fig. 113 SE531 井戸出土遺物実測図 (1) (S = 1/4)

SE531 井戸出土遺物 (1) (Fig. 113)

288~293は土師器甕。293はほぼ完形、他は全て完形品である。288で口径15.1cm、器高21.9cm。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。色調は暗褐色を基調とし、外面の一部に煤・炭化物が付着している。289は口径16.2cm、器高23.5cm。口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がる。調整は口縁部内外面がヨコナデ。胴部外面は摩耗が進んでいるが、わずかにハケ目が観察できる。内面はヘラケズリ。色調は褐色を基調とする。外面の一部に煤、内面に炭化物が付着している。290は口径17cm、器高26.3cm。

調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリ、一部にハケ目が観察できる。外面に鉄鏝状物質・煤が多量に付着している。291は口径16.3cm、器高24.7cm。この中では口縁部が大きく開いている。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリ・指頭圧による。この個体も外面に鉄鏝状物質・煤が多量に付着している。292は口径16.4cm、器高24.2cm。口縁部は比較的角度をもって立ち上がる。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデ・ハケ目、内面ヘラケズリによる。この個体も外面に鉄鏝状物質・煤が多量に付着している。

293は口径16.3cm、器高23.1cm。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。内面に鉄鏝状物質が多量に付着している。

SE531 井戸出土遺物 (2) (Fig. 114)

294~296は胴部外面に櫛状工具による施紋を配されている一群。294で口径16.3cm、残存器高12.2cm。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目・ナデ、内面ヘラケズリによる。295は口径14.4cm、残存器高17.1cm。調

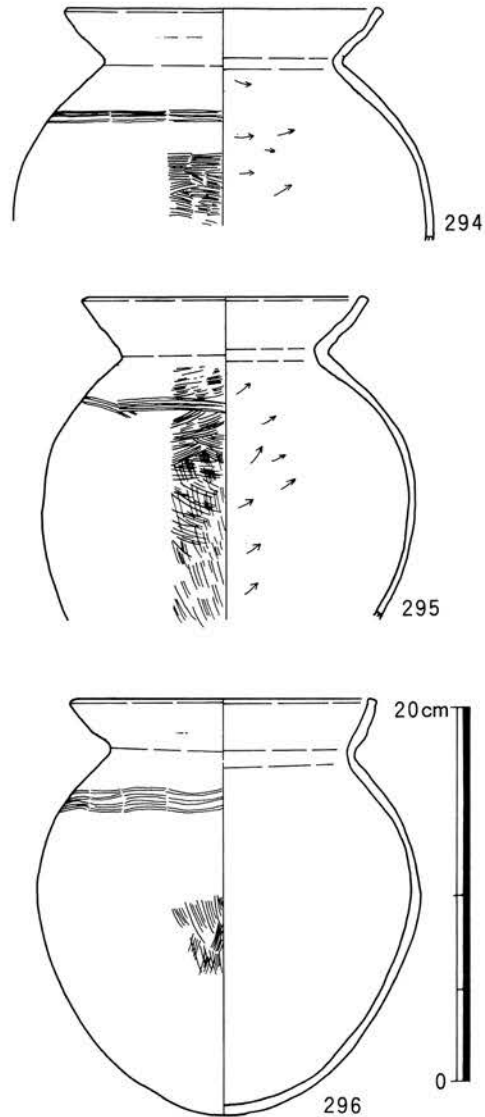


Fig. 114 SE531 井戸出土遺物実測図 (2)  
(S = 1/4)

整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。外面の一部に煤が付着している。296は完形品。口径15.6cm、器高22.1cm。口縁部は比較的角度をもって立ち上がる。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目・ナデ、内面ヘラケズリによる。

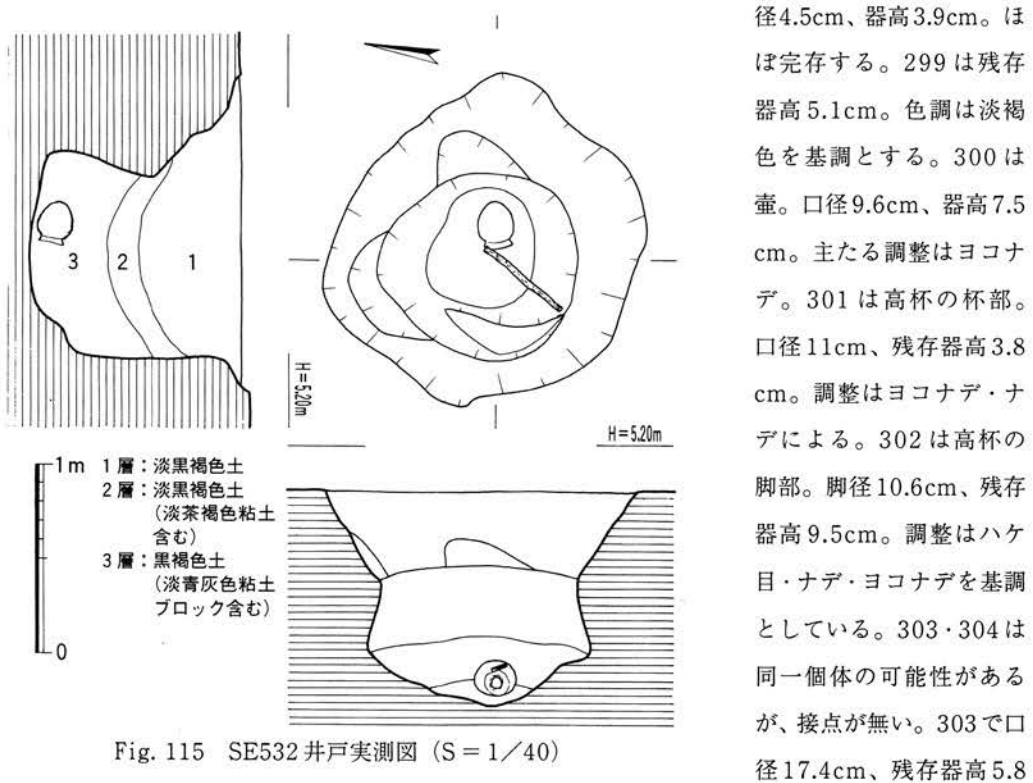
SE532 井戸 (Fig. 115)

E-2グリッドで検出した。上面の平面形は元来円形を基調としていたものと考え、壁面の崩落、他遺構との切り合いによって不定型となっている。当遺構もSB556を切っている。中心部で東西1.7m、南北1.64m、深さ1.13mを測る。当遺構も壁面の崩落により断面も元来の姿を止めていないが、SB531井戸同様、素掘りの2段掘りのものであったものと考え。底面は幅0.55~0.65m程度を測り、小さな起伏がある。

埋土は3層に分層でき、淡黒褐色土系のものを基調としている。出土遺物には土師器・木片がある。土師器の大半は1層上半から検出したがいずれも細片であった。3層からは図中にある、土師器甕を検出した。完形であり、底面直上の検出である。

SE532 井戸出土遺物 (1) (Fig. 116)

この挿図に掲載しているものは全て1層検出のもの。これらはこの井戸がほとんど埋まりかけた状況のときまとめて投棄された様相で検出したものである。297~299は手捏。297で口径4.2cm、器高1.8cm。ほぼ完存し、色調は淡褐色。外面の一部に黒斑部分あり。298は口径4.5cm、器高3.9cm。ほぼ完存する。299は残存器高5.1cm。色調は淡褐色を基調とする。300は壺。口径9.6cm、器高7.5cm。主たる調整はヨコナデ。301は高杯の杯部。口径11cm、残存器高3.8cm。調整はヨコナデ・ナデによる。302は高杯の脚部。脚径10.6cm、残存器高9.5cm。調整はハケ目・ナデ・ヨコナデを基調としている。303・304は同一個体の可能性があるが、接点がない。303で口径17.4cm、残存器高5.8



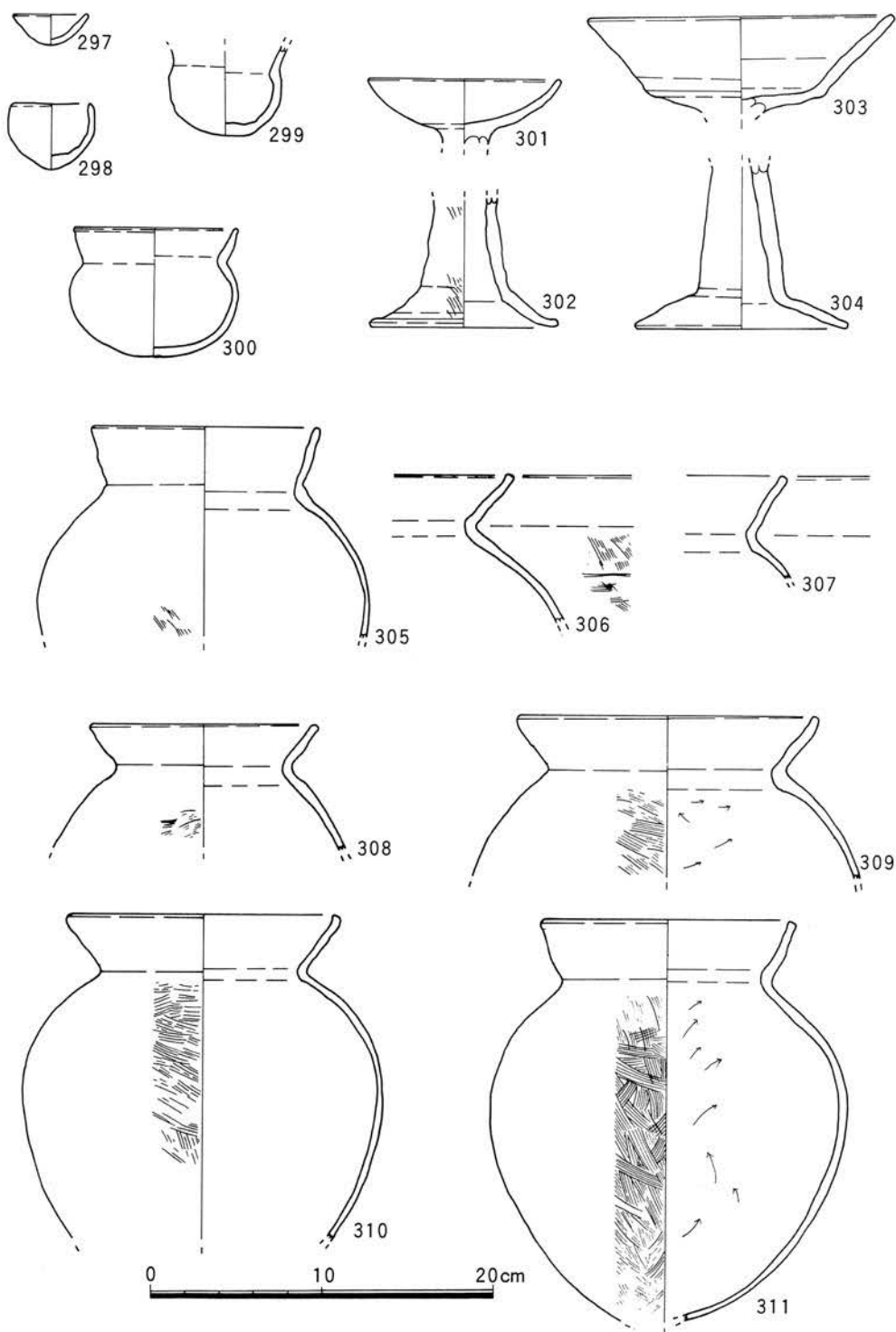


Fig. 116 SE532 井戸出土遺物実測図 (1) (S = 1/4)

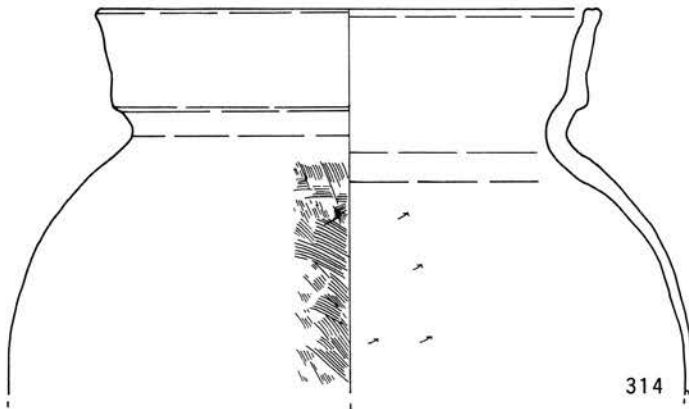
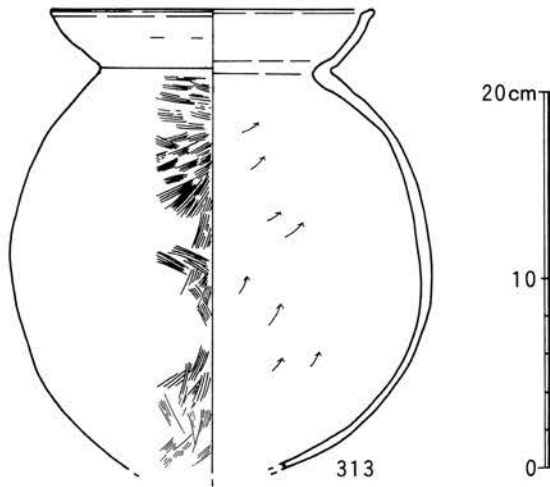
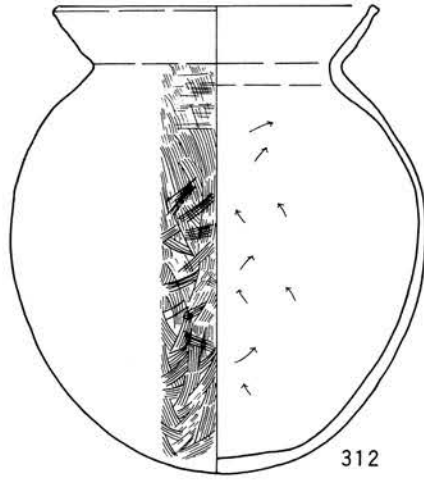


Fig. 117 SE532 井戸出土遺物実測図 (2) (S = 1/4)

cm。主たる調整はヨコナデ。304は脚径12.2cm、残存器高9.6cm。調整はヨコナデ・ナデを基調とする。305～311は甕。305は口径12.8cm、残存器高12.4cm。口縁部は比較的角度をもって直線的に立ち上がる。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。306・307の残存器高はそれぞれ8.5cm・6cm。308は口径13cm、残存器高7.3cm。309は口径17.1cm、残存器高9.5cm。口縁部はわずかに内湾傾向にある。310は口径15.2cm、残存器高19cm。口唇部はわずかに摘み上げの状況が観察できる。311は口径14.4cm。残存器高23.4cm。口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がる。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。

#### SE532 井戸出土遺物 (2) (Fig. 117)

312はFig. 114で図化している個体。口唇部が外側に突出しているタイプ。口径16.4cm、器高24.6cm。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。色調は灰褐色・淡褐色を基調としている。内外面に煤が付着している。313口径16.9cm、残存器高24.3cm。口縁部は内湾しながら立ち上がる。口唇部は外側に摘み上げられた状況がある。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。色調は茶褐色を基調とする。314は壺。二重口縁状を呈する。口径25.2cm、残存器高20.5cm。口唇部上面はヘラ状工具によるヨコナデが施されている。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ヘラケズリによっている。色調は明褐色を基調としている。

### 3. 掘立柱建物と出土遺物

今回の調査で検出した掘立柱建物は、確実なもので10棟を数える。同地区の小穴（柱穴）の所在状況から判断すると、最大12～3棟は所在したものではなかろうか。今回確認した建物の内訳は、1間×1間のものが9棟（内1棟は棟持柱様の小穴を持つ）、3間×4間のものが1棟となっている。その年代は、弥生時代の所産と考えるが、3間×4間のそれも同時代だとする積極的な資料は得ていない。規模・形態から判断すると、むしろ中世の所産である可能性が高い。ただし、それにしては柱穴間の距離が不揃いである。それらの詳細を以下に記す。

#### SB502 掘立柱建物 (Fig. 118)

G・H-3・4cmグリッドに所在する。1間×1間の建物である。桁行2.66～2.74m、梁行2.52～2.6mの規模を有する。長軸をN-3°-Eにとる。柱穴掘り方は円形・楕円形を基調とし、径0.6～0.8m、深さ0.6m程度である。梁間に径0.3～0.4m、深さ0.2～0.25mの小柱穴を配している。棟持ち柱の機能があるものか。柱痕跡はP-1・3で検出し、径0.2m程度を測る。

埋土は3層に分層でき、黒色土系のものを基調としている。下層になるに従い砂粒を多く含む。埋土中から弥生土器細片を微量検出した。

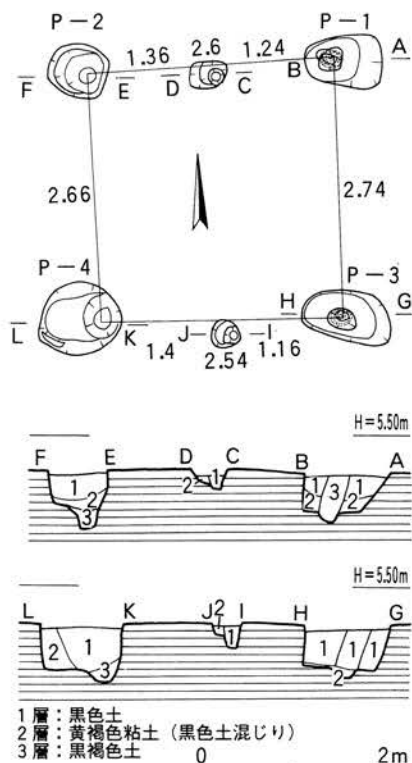


Fig. 118 SB502 堀立柱建物実測図 (S = 1/80)

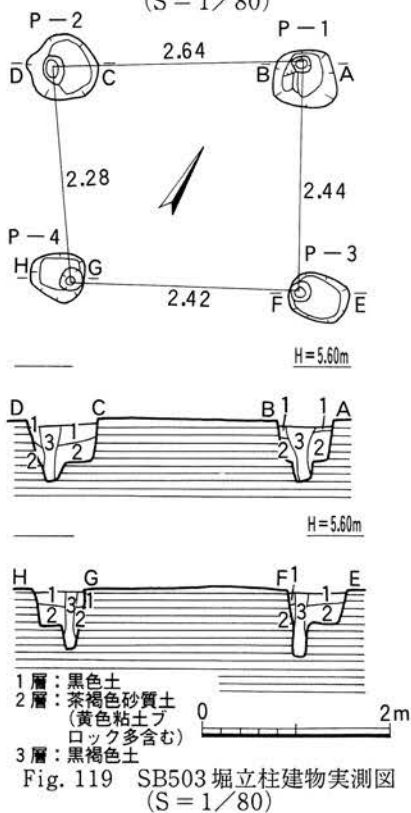


Fig. 119 SB503 堀立柱建物実測図 (S = 1/80)

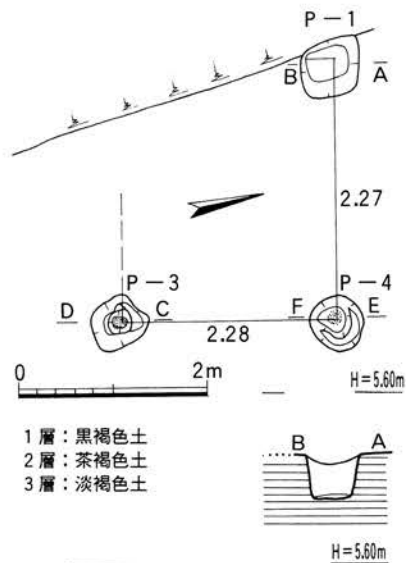


Fig. 120 SB552 堀立柱建物実測図 (S = 1/80)

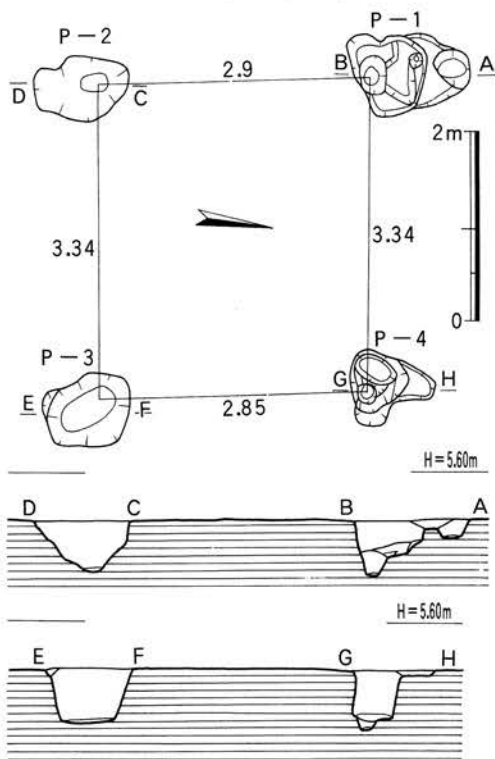


Fig. 121 SB553 堀立柱建物実測図 (S = 1/80)

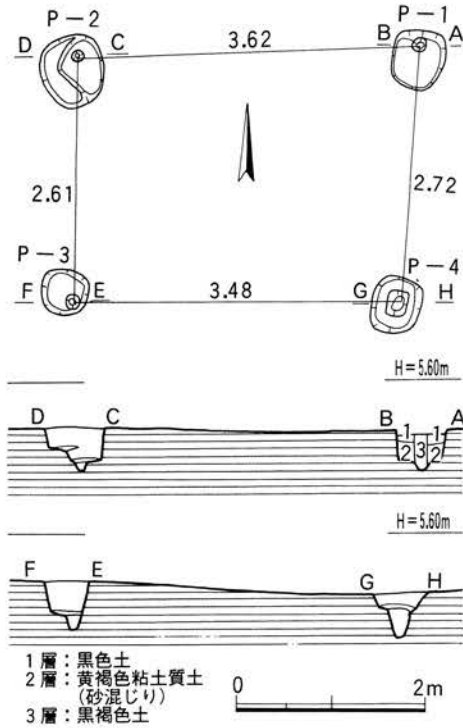


Fig. 123 SB555 掘立柱建物実測図  
(S = 1/80)

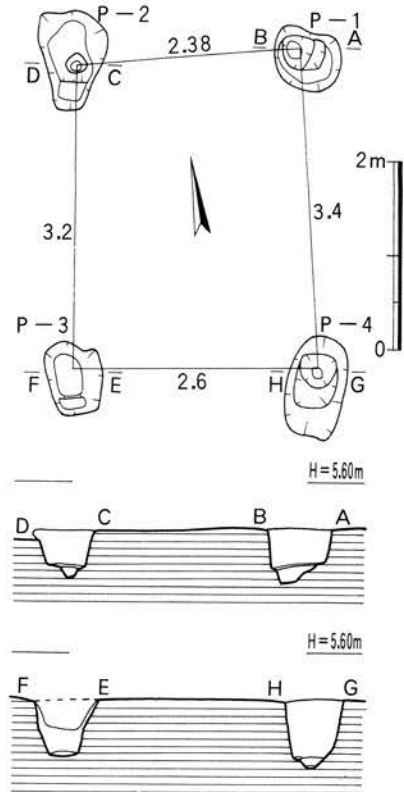


Fig. 122 SB554 掘立柱建物実測図  
(S = 1/80)

#### SB503 掘立柱建物 (Fig. 119)

F・G-3・4グリッドに所在する。1間×1間の建物である。桁行2.42~2.64m、梁行2.28~2.44mの規模を有する。長軸をN-57°-Eにとる。柱穴掘り方は楕円形を基調としたものか。径0.5~0.7m、深さ0.6~0.7m程度を測る。柱痕跡は全ての柱穴で確認し、径0.15~0.2m程度を測る。

埋土は3層に分層でき、黒色土、茶褐色土系のものを基調としている。2層には黄色粘土ブロックを多く検出した。P-2の3層下部では木片が確認できた。遺物は埋土中から弥生土器片を微量検出したが、いずれも細片であった。

#### SB552 掘立柱建物 (Fig. 120)

G・H-5グリッドに所在する。1間×1間の建物である。P-4は調査区外に及んでおり、水田耕作の際の地下げにより既に削平されている。桁行2.77m、梁行2.28mを測る。長軸をN-83°-Wにとる。柱穴の掘り方は円形・楕円形を基調としている。径0.5~0.6m、深さ0.5m程度を測る。柱痕跡はP-3・4で検出し、0.15~0.18mを測る。

埋土は3層に分層でき、黒色土・茶褐色土系のものを基調とする。埋土中からは弥生土器を

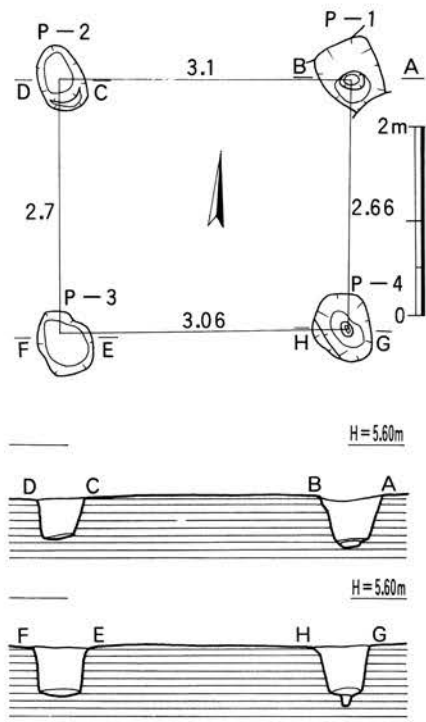


Fig. 124 SB556 掘立柱建物実測図 (S = 1/80)

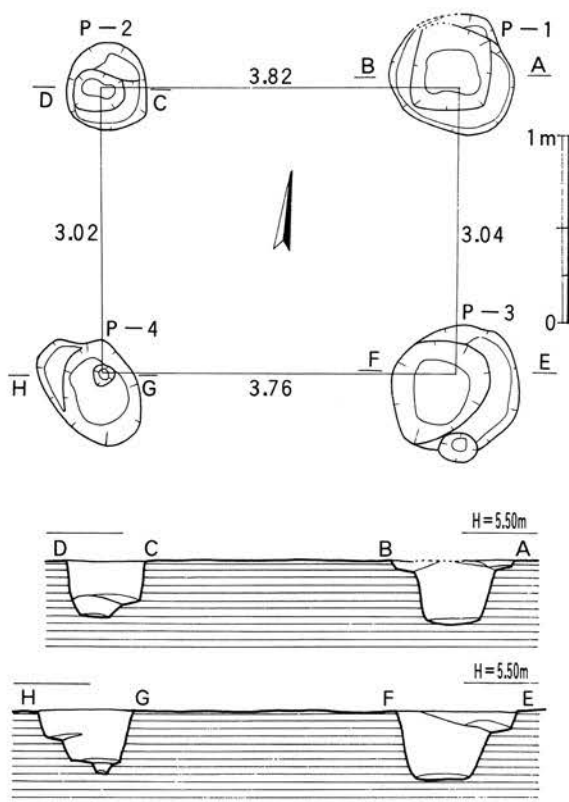


Fig. 125 SB559 掘立柱建物実測図 (S = 1/80)

微量検出したが、いずれも細片であり図化できない。

#### SB553 掘立柱建物 (Fig. 121)

D・C-4・5グリッドに所在する。1間×1間の建物である。桁行3.34m、梁行2.85~2.9mの規模を有する。長軸をN-80°-Wにとる。柱穴の掘り方は、他小穴と切り合いが激しく元来の姿は明確ではないが、楕円形を基調としていたものとする。径0.6~0.85m、深さ0.55~0.6m程度を測る。柱痕跡はいずれの柱穴でも確認できなかった。

埋土は黒褐色土を基調としている。出土遺物は埋土中から弥生土器を微量検出したが、細片のため図化できない。

#### SB554 掘立柱建物 (Fig. 122)

D-3・4グリッドに所在する。1間×1間の建物である。桁行3.2~3.4m、梁行2.38~2.6mの規模を有する。長軸をN-10°-Eにとる。柱穴の掘り方は不定型を呈するものもあるが、元来楕円形を基調としていたものとする。柱穴規模は径0.6~1.0m、深さ0.5~0.7mである。SB562と切り合い関係にあるが、柱穴どうしの切り合いはなく、SB562が中世の所

産であるという積極的な資料が得られないので新旧関係は不明。柱痕跡はいずれの柱穴でも確認できなかった。

埋土は上層黒色土、下層淡黒褐色土に大別でき、下層になるに従い砂粒が増す。埋土中から弥生土器細片を微量検出した。

#### SB555 掘立柱建物 (Fig. 123)

D・Eグリッドに所在する。1間×1間の建物である。桁行3.48～3.62m、梁行2.61～2.72mの規模を有する。長軸の方向はほぼ東西にとる。柱穴の掘り方は円形・楕円形を基調としている。径0.5～0.75m、深さ0.45～0.5mを測る。SK591と切り合いをもち、当遺構が旧。柱痕跡はP-1のみで検出し、径0.15m程度を測る。cm埋土は3層に分層でき、黒色土・黄褐色土を基調としている。埋土中から弥生土器を検出したがいずれも細片であった。

#### SB556 掘立柱建物 (Fig. 124)

E・F-2・3グリッドに所在する。1間×1間の建物である。桁行3.06～3.1m、梁行2.66～2.7mの規模を有する。長軸をN-83°-Eにとる。柱穴の掘り方は楕円形を基調とするもので、径0.5～0.8m、深さ0.45～0.65mを測る。他遺構との切り合いはSE531・532と有し、当遺構が古。柱痕跡は4柱穴とも確認できなかった。

埋土は上層黒色土、下層淡黒褐色土からなり、出土遺物は土器細片のみ。

#### SB559 掘立柱建物 (Fig. 125)

E・F-4・5グリッドに所在する。1間×1間の建物である。桁行3.76～3.82m、梁行3.02～3.04mの規模を有する。長軸をN-81°-Eにとる。柱穴の掘り方はP-1・4とP-2・3でその規模に差異があり、前者の規模が大。径0.8～1.85m、深さ0.6～0.7mを測る。他遺構との切り合いはないが、SB563と重複関係にある。新旧関係は不明。

埋土は黒褐色土、茶褐色土を基調としている。埋土中から弥生土器片を少量検出した。

#### SB562 掘立柱建物 (Fig. 126)

E・F-4・5グリッドに所在する。1間×1間の建物である。桁行3.15～3.23m、梁行2.45～2.58mの規模を有する。長軸をN-72°-Eにとる。柱穴の掘り方は円形・楕円形を基調

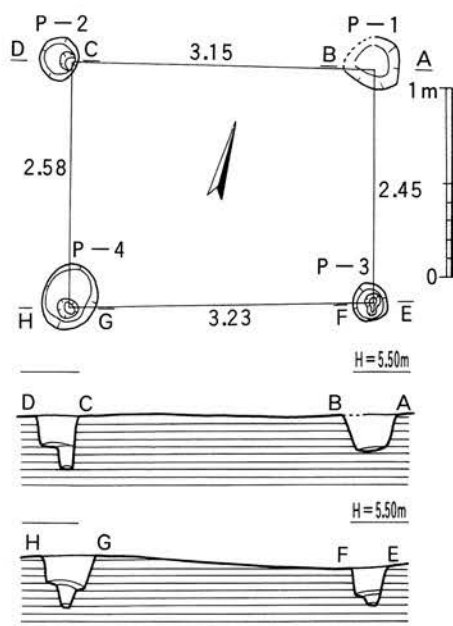


Fig. 126 SB562 掘立柱建物実測図  
(S = 1/80)

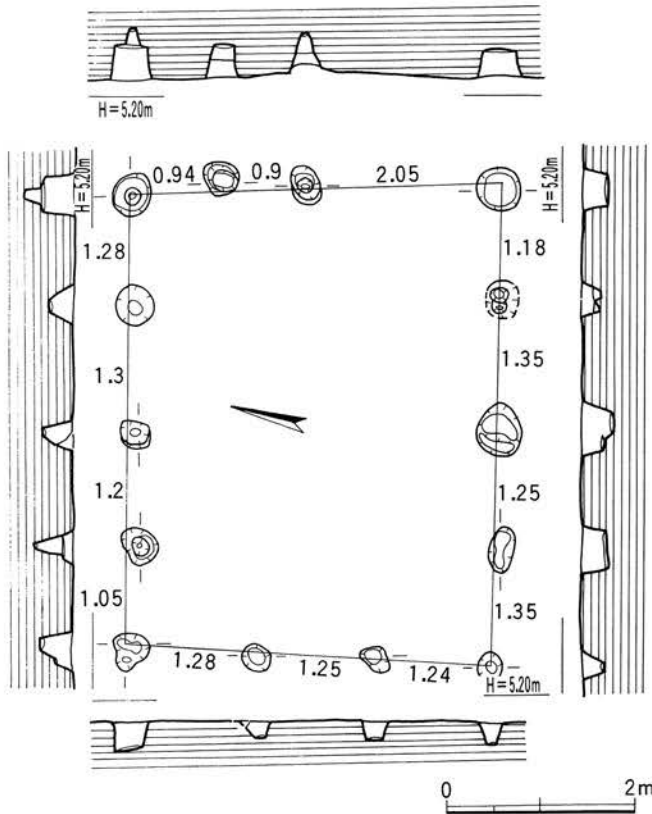


Fig. 127 SB563 掘立柱建物実測図 (S = 1/80)

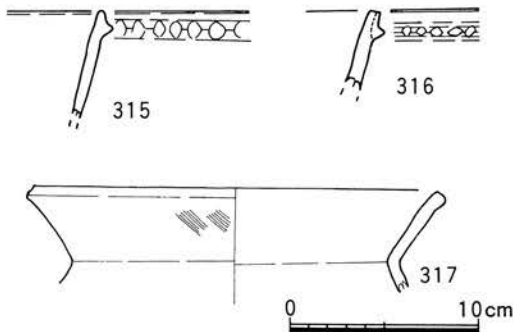


Fig. 128 掘立柱建物・柱穴出土遺物実測図 (S = 1/4)

褐色土を基調としている。埋土中から弥生土器片を少量検出した。

掘立柱建物柱穴検出遺物 (Fig. 128)

315・316は弥生土器の甕か。残存器高はそれぞれ5.6cm・4.2cmを測る。双方とも口縁部

とするもので、径0.35～0.7m、深さ0.35～0.55mを測る。他遺構との切り合い関係はP-1がSK517に切られている。

埋土は黒褐色土、茶褐色土を基調としている。埋土中から弥生土器片を少量検出した。

SB563 掘立柱建物 (Fig. 127)

D・E-4グリッドに所在する。3間×4間の建物である。桁行4.83～5.13、梁行3.77～3.89mの規模を有する。長軸をN-78°-Eにとる。柱穴は1間×1間のものより小振りで、柱間も不均等である。柱穴の掘り方は円形・楕円形を基調としたもので、径0.25～0.6m、深さ0.18～0.5mを測る。他遺構との切り合いはSB554と有しているが、新旧関係は明確にできなかった。

埋土は黒褐色土、茶

外面に突帯を有し、そこに刺突文が配されている。調整は主としてナデによっている。317は弥生土器の甕。口径22cm、残存器高4.6cm。調整は口縁部外面ヨコナデ・ハケ目、内面ヨコナデによっている。

#### 4. 周溝状遺構と出土遺物

佐賀市域では平成元年度に久保泉町で検出したのが最初で、それ以降比較的まとまった数を現在までに検出している。しかし、この金立町での検出は今回が初めてである。

##### SR504 周溝状遺構 (Fig. 129)

A~C-4・5グリッドで検出した。上面の平面形は瓢形を呈するが、高畑であるこの調査区の東端に位置するため東周溝の一部を水田耕作のための地下げにより削平されている。溝の幅は0.3~1.05m、深さ0.15m程度を測る。周溝内側の方は西側で最大径南北3m程度、東側で最大径4.55m程度を測る。他遺構との切り合いは小穴とあるのみ。埋土は2層に分層でき、1層黒褐色土、2層茶褐色土からなっている。出土遺物は埋土中から弥生土器細片を少量検出した。

##### SR504 周溝状遺構出土遺物 (Fig. 130)

318・319は弥生土器の甕。残存器高はそれぞれ3.7cm・4.3cmを測る。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ目・ナデを基調としている。

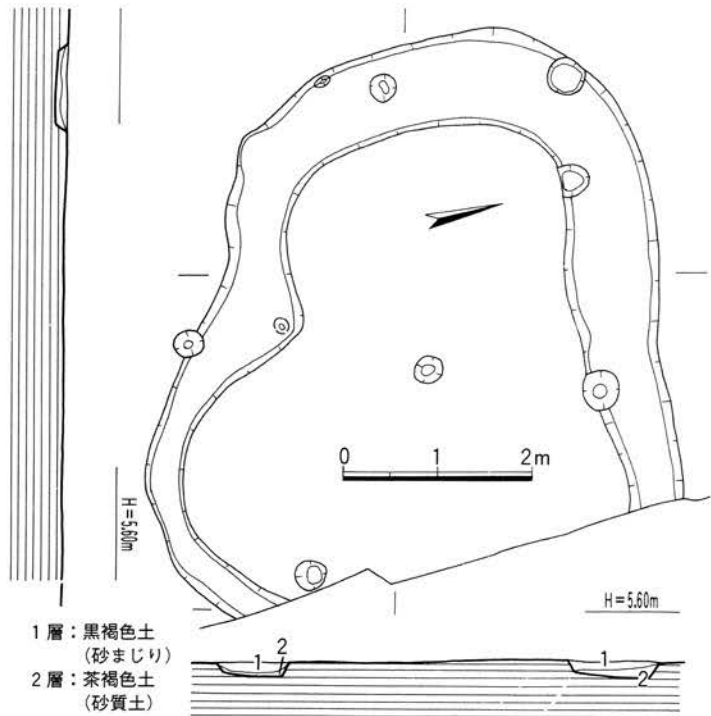


Fig. 129 周溝状遺構実測図 (S = 1/80)



Fig. 130 周溝状遺構出土遺物実測図 (S = 1/4)

## 5. 溝と出土遺物

この調査区で1条検出した。時期的には出土遺物から見て中世の所産と考える。

### SD501 溝 (Fig. 131)

D~H-1~3グリッドで検出した。当調査区は高畑であるが、ここの北辺に平行して東西方向に走る。当遺構はH-3グリッド付近から延びているが、西端を近現代の井戸により破壊されている。検出全長18m程度、幅1.2~2.1m、深さ0.4~0.6mを測る。ほぼ直線的に延びる。この高畑を囲むように検出東部で南折する可能性もあるが、そのコーナーと考えられる部分が調査区外にあり、確認できなかった。溝断面形は浅いU字形を呈する。

埋土は2層に分層でき、上層暗褐色土、下層暗灰褐色土からなっている。出土遺物は埋土中から土師器片を少量検出した。

### SD501 溝出土遺物 (Fig. 132)

320は土師器皿。口径9.2cm、器高2.2cm、底径5.6cm。底面は糸きり。321は瓦質土器の鉢か。残存器高3.3cm。調整はナデ・ヨコナデを主体としている。322は須恵器質土器の鉢か。残存器高4.4cm。調整はヨコナデ・ナデを基調としている。色調は灰黒色を呈する。

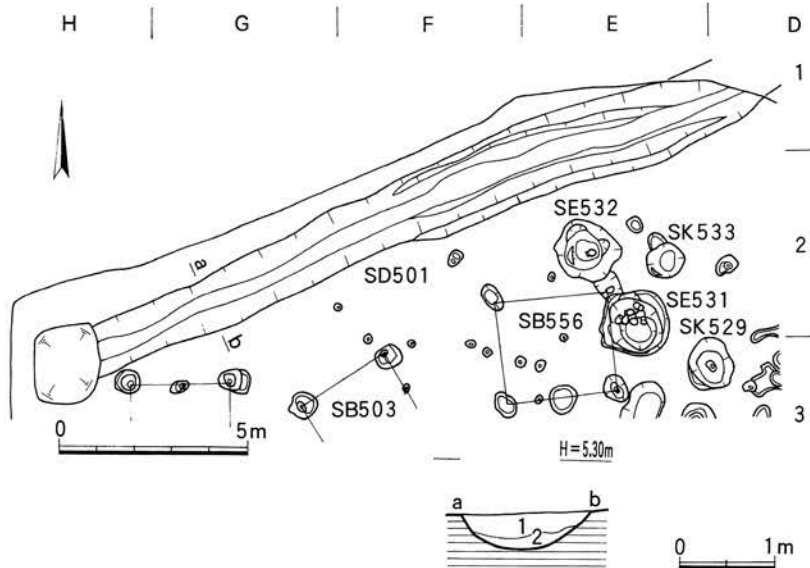


Fig. 131 SD501 溝実測図 (S = 1/200 · 1/40)

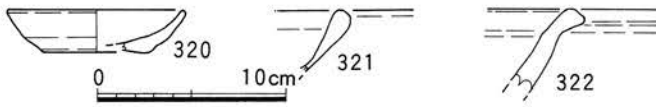


Fig. 132 SD501溝出土遺物実測図 (S = 1/4)

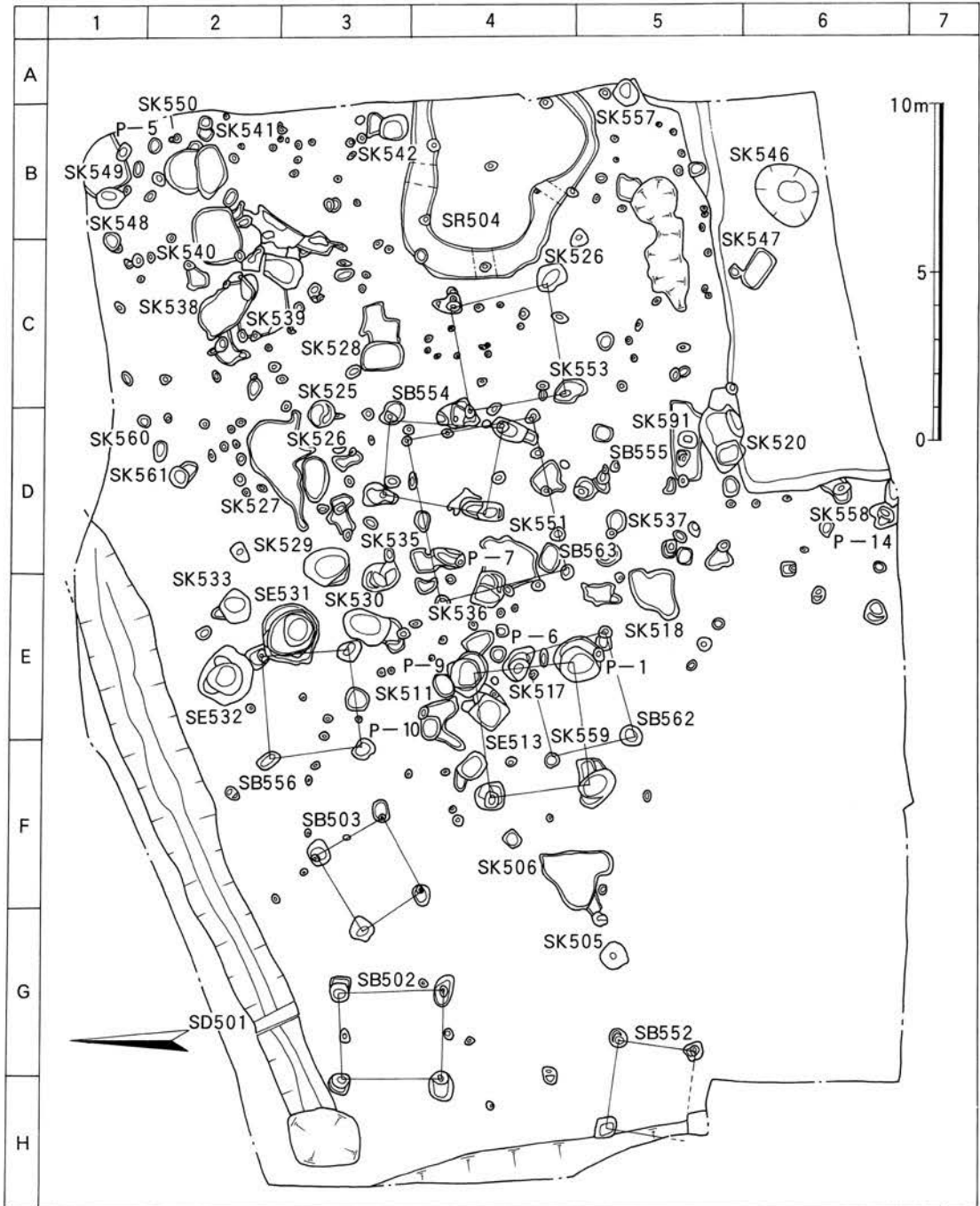


Fig. 133 友貞遺跡5区遺構配置図 (S = 1/200)

## IX.調査の記録 ー 6 区 ー

### 1. 土壙と出土遺物

調査区の西半部で検出した。出土遺物が少なく、遺構の所属する時期は明確ではないが周辺の遺構の状況や埋土の色調から判断すると中世～近世に入る時期と考える。

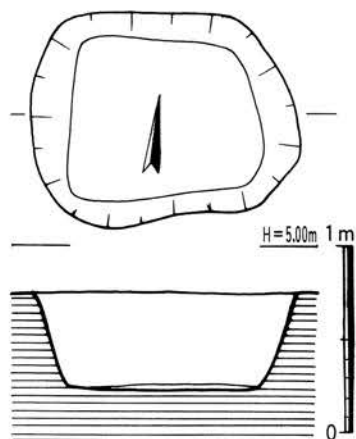


Fig. 134 SK604 土壙実測図  
(S = 1/40)

#### SK604 土壙 (Fig. 134)

L-3グリッドで検出した。上面の平面形は東西にやや長い隅丸長方形を基調とする。中心部で東西1.41m、南北0.107m、深さ0.52mを測る。底面はほとんど平坦。壁は比較的角度をもって立ち上がる。

埋土は2層に大別でき、上層茶褐色土、下層淡褐色土からなっている。出土遺物は土器微細片を検出したが、図化できるものはなかった。

### 2. 井戸と出土遺物

調査区西半部で1基検出したのみである。この井戸の所属する時期は、出土遺物から判断して近世の所産と考える。

#### SK603 井戸 (Fig. 135)

J-3・4グリッドで検出した。上面の平面形は円形を基調とするが、北端部で他遺構と切り合いをもち、不定型となっている。切り合い関係は明確にできなかった。中心部で東西0.91m、南北0.87m、深さ1.16mを測る。底面は概ね平坦。断面形は掘込み下0.5m付近で壁の崩落のため大きく外側に湾曲している。そのためその下部では稜線を形成している。

埋土は3層に大別でき、上層から淡黒褐色土、淡褐色土、灰褐色土(粘質)となっている。出土遺物は埋土中から土師器片を少量検出した。

#### SK603 井戸出土遺物 (Fig. 136)

323は瓦質土器の播鉢か。残存器高9.5cm。主たる調整はハケ目。外面に煤が付着している。324は土師器皿。口径9cm、器高2cm、底径6.4cm。調整は口縁部内外面ロクロナデ、内面ナデ、底部外面は糸切り。

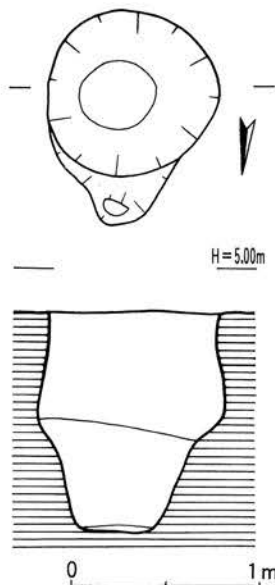


Fig. 135 SE603 井戸実測図  
(S = 1/40)

### 3. 溝と出土遺物

当調査区で中央付近に2条検出した。狭隘な調査区に直交しているためその全容がつかめず性格は不詳。しかしSD006についてはその規模から考えて集落をめぐる溝である可能性がある。

#### SD601 溝 (Fig. 137)

G・F-2・3グリッドに所在する。検出全長8m程度、幅6.6m、深さ0.65mを測る。底面は緩やかな起伏があるものの概ね平坦、壁は緩やかに立ち上がる。

埋土は4層に識別できる。堆積の状況から判断すると2~3条の規模の小さい溝が切りあっているものと考えられる。埋土は褐色土系の砂質土を基調としている。出土遺物は埋土中から土師器片を少量検出した。

#### SD601 溝出土遺物 (Fig. 138)

3点共流れ込みによるものと考えられる。この溝の所属する時期は中世末~近世と考えるが、図化できる遺物は検出しなかった。325は弥生土器の壺。口径16cm、残存器高5.7cm。口縁部は大きく外反し、主たる調整はヨコナデ。326も壺。残存器高5.2cm。口縁部外面に指頭圧痕が観察できる。327は甕か。残存器高4cm。口唇部外面には刺突文が配されている。色調は淡褐色を基調としている。

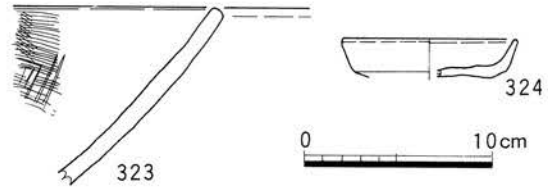


Fig. 136 SE603 井戸出土遺物実測図 (S = 1/4)

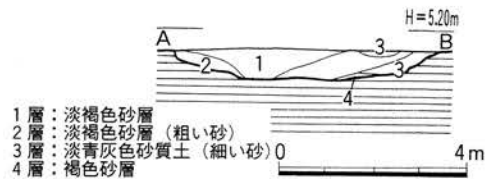
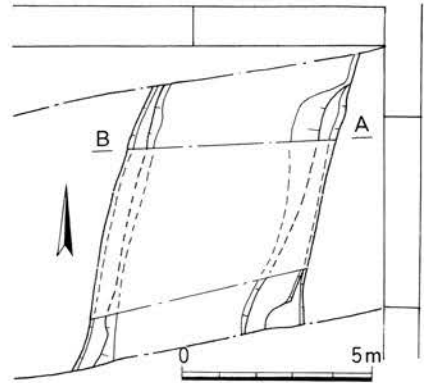


Fig. 137 SD601 溝実測図  
(S = 1/200 · 1/60)

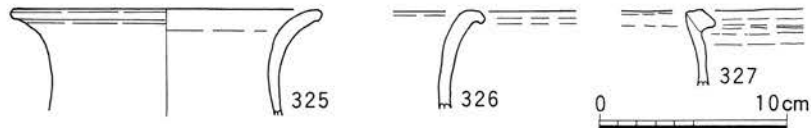


Fig. 138 SD601 溝出土遺物実測図 (S = 1/4)

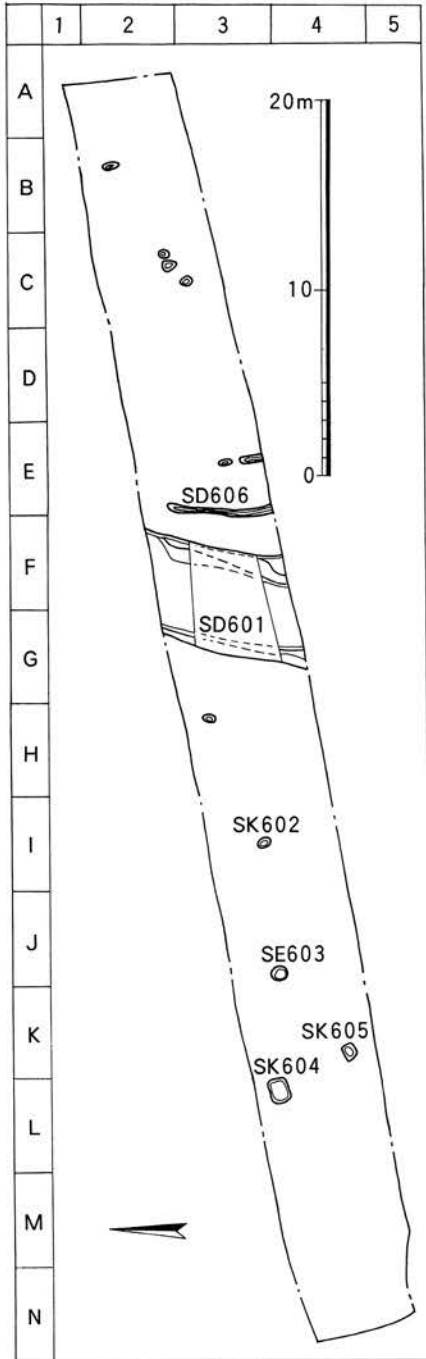


Fig. 139 友貞遺跡6区遺構  
実測図  
(S = 1/400)

## X. 小 結

友貞遺跡の埋蔵文化財発掘調査は、昭和40年代に応急的・部分的なものが行なわれたにすぎず（佐賀市史 第1巻）、本格的な調査は今回が初めてのものであった。この調査の結果、弥生時代・古墳時代・中世の遺物・遺構を検出した。これらの成果の中から特徴的なものを抽出し以下に記す。

### 1. 遺跡の占地状況

Fig. 140は既存水路、土地利用状況、検出主要水路（溝）を表したものである。これを参考に各時代の遺跡占地状況を見てみたい。

#### 弥生時代・古墳時代

挿図中央上半にある5区にのみ検出した。この部分は南接する友貞集落に繋がる水田からの比高約1mの低丘陵にあたる。この部分と北方約100mにある友貞集落の中心部との間は、水田となっているが、元来低丘陵が延びていたものを地下げし現況水田となったものと推定できる。その証左としては、この部分は谷地形ではなく挿図上端の6区でしっかりとした基盤層や遺構を検出している。

弥生時代の所産としては、掘立柱建物を10棟検出した。これらの建物はすべて同時期に存在したものではなく、若干の重複関係を有し5区北半部に集中する。これらの遺構の他には土壌を数基検出したのみで、竪穴住居は検出していない。他地区の調査例では掘立柱建物に近接して竪穴住居が営まれているので、同地区の弥生期の集落の中心部は南接する集落内に存在しているものと考えられる。

古墳時代の検出遺構は井戸・土壌のみであり、これも弥生

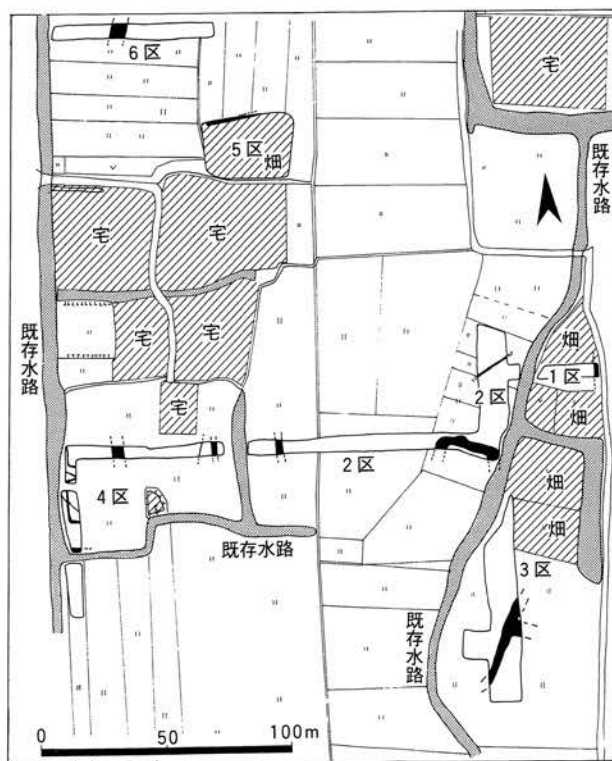


Fig. 140 調査地区配置図並びに周辺見取図 (S=1/300)

時代同様集落の中心は調査区南部の集落内と思われる。

#### 鎌倉時代・室町時代

挿図にある主要溝は同時代のものである。現況水路と検出溝の相関関係を検討するためにこの挿図を作成してみた。しかしながら、水路計画予定地が発掘調査区の大半であり狭隘な調査区となったため全体的な概要は把握できなかった。ただ、溝の検出位置・方向性を考えると、1・2・3区と4・5区の間に空間部分が認められる。時期差は大差ないものであるが、方形区画溝のグループがあるものとする。また、既存水路と検出溝との関係であるが1・2・3区では、俯瞰するとその有機的な関係が認められなくもないが、今回の調査結果からはその関係を証する積極的な資料は得られなかった。ただ、4区においては西側に接する南北方向の直線的な水路は新しいものとしても、それ以外の水路は当時の区画溝が残存しているのではという印象を受ける。ちなみにこの地点は、地元呼称「中島」である。平成5年度発掘調査地点は地元呼称「土生島」といい、ここは神代氏の砦跡であったことを考え合わせるとこの地点も土生島と有機的な繋がりをもつ居館であった可能性が高い。「何々島」という名称は、統計的な意味での分母の少なさの問題はあるが、広範囲にわたる水田中の高畑部分を指し、そこが中世の館跡である場合が多いのかもしれない。

## 2. 周溝状遺構について

この種の遺構については、すでに多数の研究者によってその性格について論ぜられているところであるが、いまだ確定できる資料が得られていない。この章でも確定する資料は提示できないが、その作業の一助にでもなればと思い、現在までに判明したことを佐賀市域に限定し、以下に述べてみる。

#### 遺構の性格等の位置付けの変遷

佐賀市域でこの種の遺構を検出したのは、昭和63年度に発掘調査を実施した立野遺跡であった。この遺構は「周溝状遺構」・「周溝遺構」・「円形周溝」・「方形周溝」・「溝」等と呼称されていたが、我々は「周溝状遺構」を選択した。その性格については、当初「祭祀遺構であり、集落を見渡せる地点に位置する」としていた。その後、「祭祀の性格」は変わらないものの、「集落を見渡せる地点に位置する」との位置付けは撤回せざるをえない調査結果が数多く得られた。現在では弥生中期～後期にかけての掘立柱建物群等より「わずかに」先行し、それら遺構群と渾然として存在するという調査結果を得ている。以下に佐賀市域における調査例を提示し、現在の位置付けの確認をしてみたい。

佐賀市域における調査例

遺跡名	形状	名称	法 量 (m)			時期決定 の 根 拠	時 期	備 考
			周溝外径	幅	深さ			
1. 立野遺跡	円形	SX001	2.9~ 3.05	0.3~ 0.4	0.2 ~0.27	弥生土器 検出	後期	
	隅丸 方形	SX002	4.85~	0.4~ 0.7	0.2 ~0.27	弥生土器 細片検出	後期か?	西側周溝被削平
	楕円形	SX003	3.2~ 3.8	0.3~ 0.54	0.08 ~1.0	弥生土器 細片検出	?	
2. 南宿遺跡	楕円 形?	SR002	3.25~	0.3~ 0.4	0.18 ~0.23	弥生土器 検出	中期末~ 後期前半	遺構の西半部は調査 区外 長軸2.3・短軸 1.0・深さ0.08~0.18
	楕円 形?	SR003	5.35~	0.3~ 0.4	0.02 ~0.15	弥生土器 検出	後期前半	遺構の西半部は調査 区外
3. 村徳永 遺跡 F地区	隅丸 方形?	SR045	4.40~ 4.44	0.8~ 1.2	0.3 ~0.4	掘立柱建 物群との 切り合い 関係	後期 前半か?	SB079 掘立柱建物に 切られている。 建物群の年代を後期 前半としている。
	隅丸 方形	SR046	4.66~ 5.24	0.8~ 1.20	0.3 ~0.4	弥生土器 細片検出	後期前半	丹塗り高杯等検出。
	楕円 形?	SR047	3.80~	0.3	0.10 ~0.15	弥生土器 検出	後期前半	遺構の南西半部は調 査区外。丹塗り高杯・ 甕・土製等検出。
		SR065	3.48~	0.64	0.4 ~0.5			

遺跡名	形状	名称	法 量 (m)			時期決定 の 根 拠	時 期	備 考
			周溝外径	幅	深さ			
	隅 丸 方形?	SR066	3.90~	0.80	0.4 ~0.5	065と 066 の結合 部分で 弥生 土器を 検 出	後期前半	3基ともほぼ同時期の 所産と判断されてい る。
		SR067	3.20~	0.8~ 0.9	0.36 ~0.40			
	円形?	SR113	4.0以上	1.2	0.6 ~0.7	弥生土器 検 出	後期前半	
4. 村徳永 遺 跡 J 地区	隅 丸 方形?	SR027	3.9~ 4.35	0.3~ 0.4	0.35 ~0.4	弥生土器 検 出	後期前半	周溝内部に12基の小 穴が所在するが当遺 構との関係は不明
	円 形	SR150	5.35~	0.3~ 0.4	0.02 ~0.15	弥生土器 検 出	後期前半	遺構の西半部は調査 区外
	円形?	SR152	4.4~	0.6~ 0.8	0.08	弥生土器 細片検出	後 期 か	SB192・160より古
	不定形	SR153	4.4以上~ 6.0	0.4~ 0.5	0.08	弥生土器 検 出	後 期	東端部削平
	堯形?	SR154	5.7以上(長軸) 3.6 (短軸)	0.4~ 0.5	0.15	弥生土器 細片検出	後 期 か	SB221と切り合い関 係あり
	円 形	SR155	3.2	0.4~ 0.6	0.1 ~0.2	弥生土器 細片検出	後 期 か	SR156を切る
	円 形	SR156	4.2	0.4~ 0.6	0.1 ~0.2	弥生土器 細片検出	後 期 か	

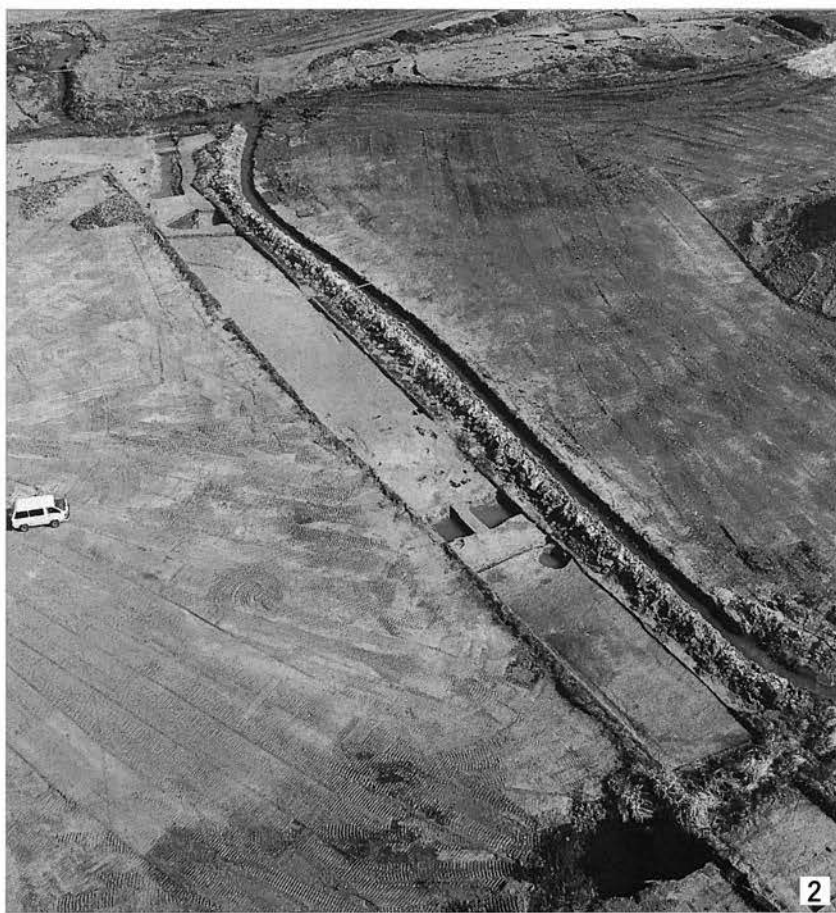
遺跡名	形状	名称	法 量 (m)			時期決定 の根拠	時 期	備 考
			周溝外径	幅	深さ			
5. 村徳永 遺 跡 L 地区	円形?	SR011	4.9前後	0.4~ 0.6	0.2~ 0.4	弥生土器 片 検 出	中期末か	
	円 形	SR012	4.7前後	0.4~ 0.8	0.2~ 0.3	弥生土器 片 検 出	後 期	SR013との切り合い はなく元来連結して いた可能性あり
	円 形	SR013	4.5前後	0.4~ 0.8	0.2~ 0.3	弥生土器 片 検 出	後 期	SB101 古 SK018 より新
	円 形	SR014	4.0程度か	0.8	0.2~ 0.3	弥生土器 片 検 出	後期後半	SB111・SD002・P81 に切られている
	隅丸三 角形?	SR037	6.0前後(長軸)	0.5~ 0.6	0.2	弥生土器 片 検 出	後期後半	壺は丹塗り
	隅 丸 長方形	SR051	5.7(長軸) 4.0(短軸)	0.8~ 1.0	0.2~ 0.3	弥生土器 片 検 出	後期後半	SK059・SD064に切 られる
	隅 丸 長方形	SR052	5.2(長軸) 3.4(短軸)	1.0~ 1.1	0.4~ 0.5	弥生土器 片 検 出	後期後半	
	円 形	SR053	4.1程度(長軸) 4.3 (短軸)	0.6~ 0.9	0.2~ 0.3	弥生土器 片 検 出	後期後半	SB114に切られる
	円形か	SR056	2.5(長軸) 2.2(短軸)	0.5~ 0.7	0.2~ 0.3	弥生土器 細片検出		SH076・SH058に切 られている

以上の表のとおり、現在佐賀市域で検出した周溝状遺構は28基に及んでいる。これと言えることは、1.概ね弥生時代中期後半～後期の所産であるということ。2.いわゆる円形周溝墓とは違うものと思料されること。3.丹塗り土器も溝内から検出され、何らかの祭祀行為があったことも想定できること。4.溝土層の観察から、自然堆積の状況が観察され、この遺構を活用したときには、溝は埋まっていなかったこと。等がある。

これは佐賀市域という限定された調査域での検討である。この種の遺構は他地域でも数多く検出されている。今後は佐賀市域の資料をさらに収集していきながら、他地域のそれとの関連の考察もしていしたい。諸兄のご指摘・ご指導を乞うていきたいと考えている。

# 圖 版





1. 1区・2区北半

2. 2区南半

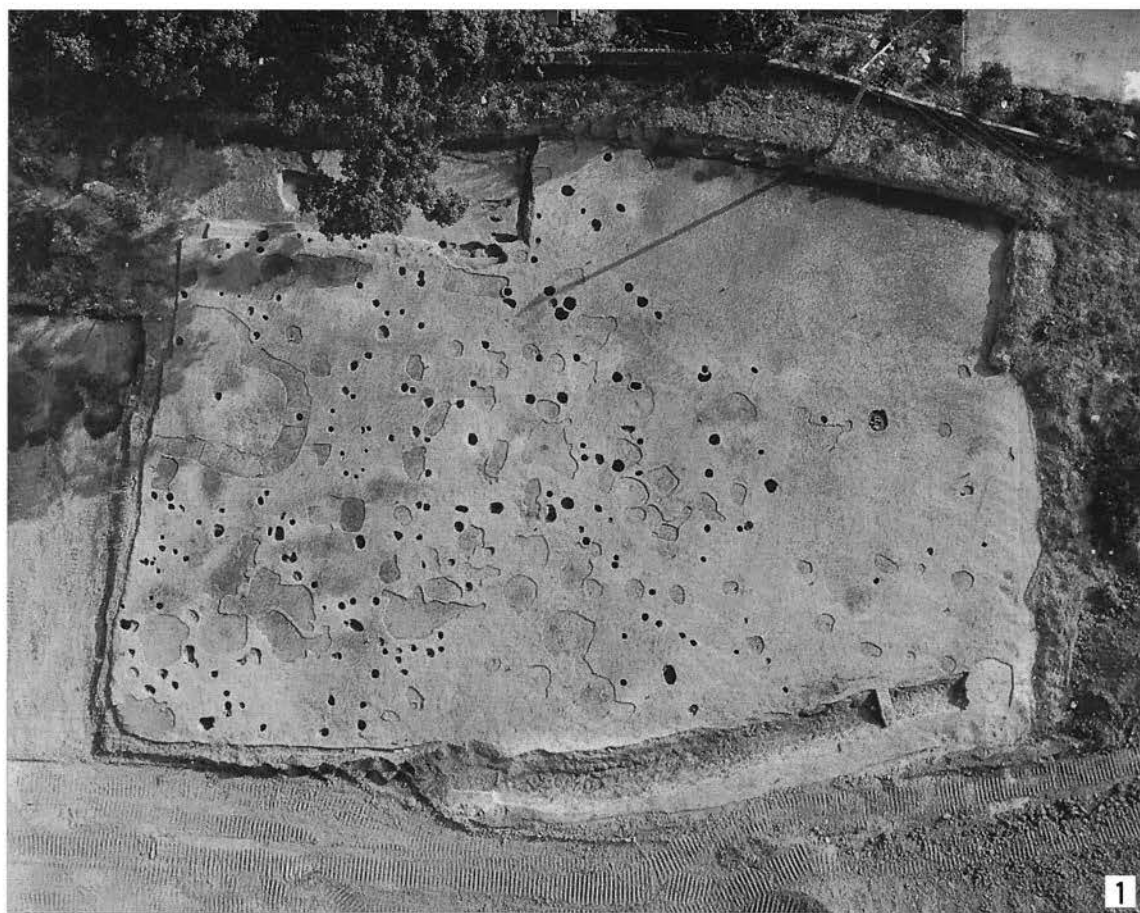


1. 3区全景

2. 4区東部

3. 4区西部





1. 5区遺構検出状況

2. 5区調査終了  
後全景

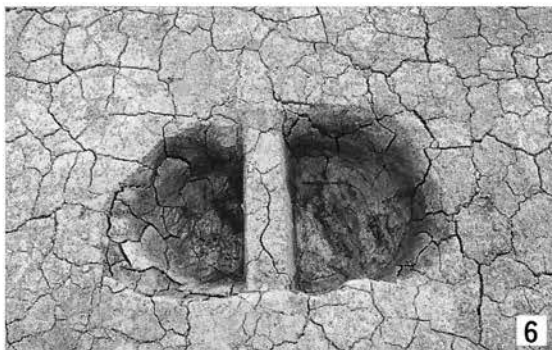
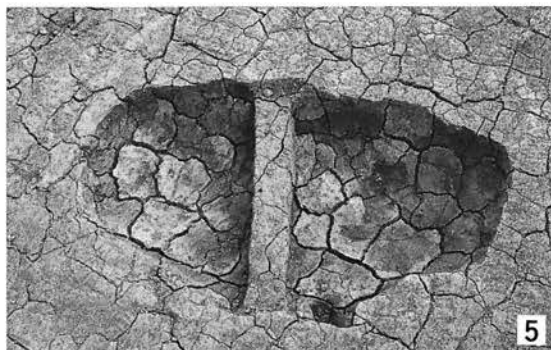




[1・2区]

- 1. 1区全景 (東から)
- 2. SK006
- 3. SK007
- 4. SK008

- 5. SD102全景
- 6. " 土層観察
- 7. SD102 (西から)
- 8. SD105 (南から)



[2区]

- 1. SK115
- 2. SK116
- 3. SK117
- 4. SK118

- 5. SK120
- 6. SK121
- 7. SK122
- 8. SK124



[ 3区 ]

- 1. SK314
- 2. SK317
- 3. SK328
- 4. SK329

- 5. SK335
- 6. SK335
- 7. SK333
- 8. 3区柱穴群

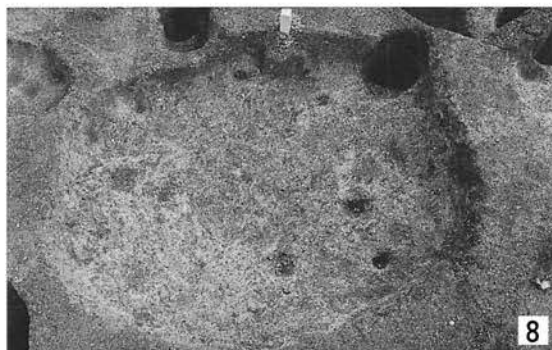
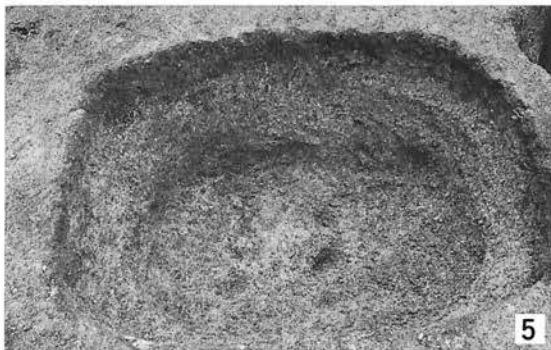
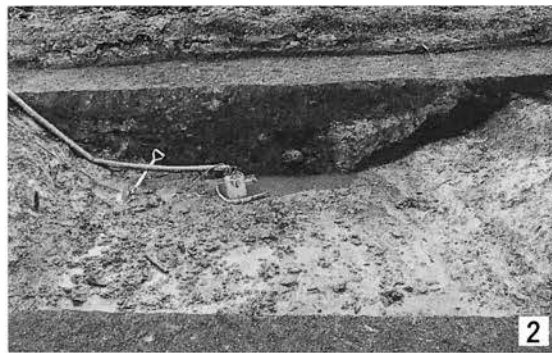


〔3区〕

- 1. SD302
- 2. 同上
- 3. SD325・326
- 4. SD330

〔4区〕

- 5. SK405
- 6. SK414
- 7. SK415
- 8. SK416

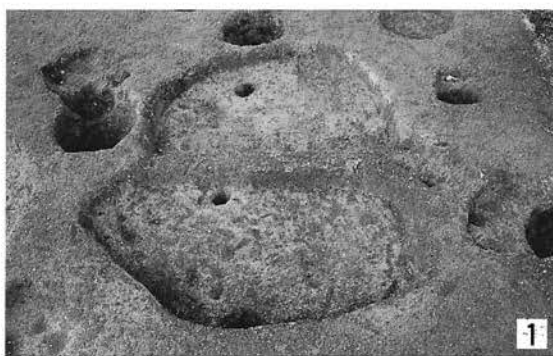


[ 4 区 ]

- 1. SD401
- 2. SD406
- 3. SD412
- 4. SD418

[ 5 区 ]

- 5. SK528
- 6. SK526
- 7. SK538
- 8. SK504



## 〔5区〕

1. SK541 (手前) ・550

2. SK549

3. SK505

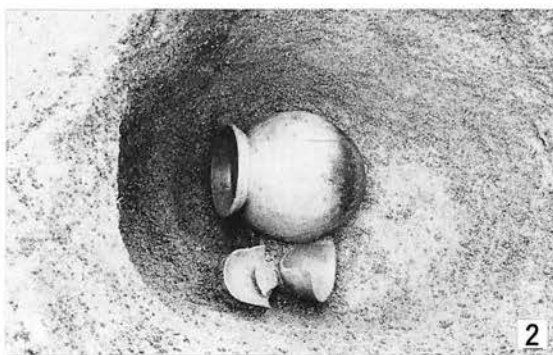
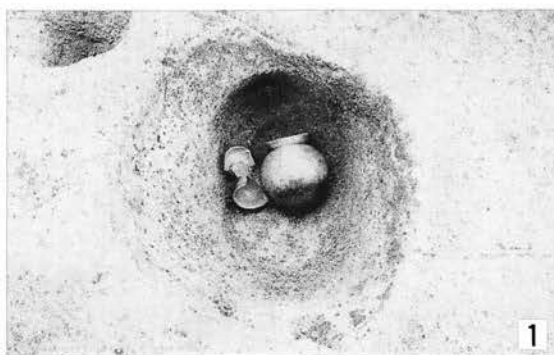
4. SK517

5. SK517

6. SK526

7. SK537

8. SK542



[5区]

- 1. SK557
- 2. 同上
- 3. SB502
- 4. SB503

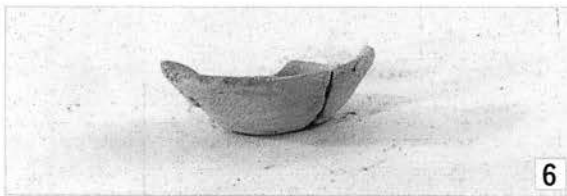
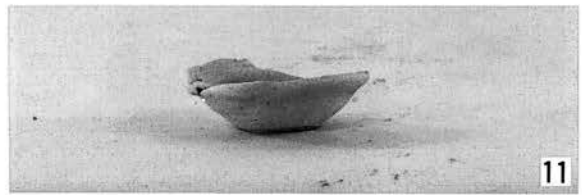
- 5. SB552
- 6. SB553
- 7. SB554
- 8. SB557



[ 5区 ]

- 1. SB556
- 2. SB559
- 3. SE513
- 4. SE531

- 5. SE531
- 6. SE532
- 7. SR504



- |                |                |
|----------------|----------------|
| 1. (Fig 8 - 1) | 8. (Fig29-23)  |
| 2. (Fig 8 - 6) | 9. (Fig44-57)  |
| 3. (Fig 8 - 7) | 10. (Fig44-59) |
| 4. (Fig 8 -12) | 11. (Fig48-66) |
| 5. (Fig 8 -17) | 12. (Fig48-67) |
| 6. (Fig 8 -18) | 13. (Fig48-68) |
| 7. (Fig29-21)  |                |



1



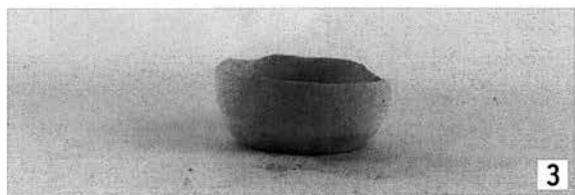
8



2



9



3



10



4



11



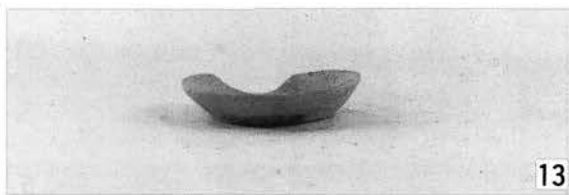
5



12



6



13



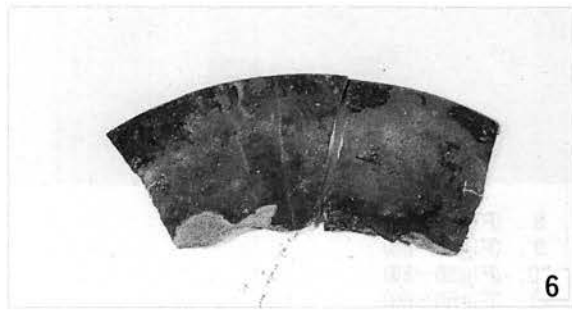
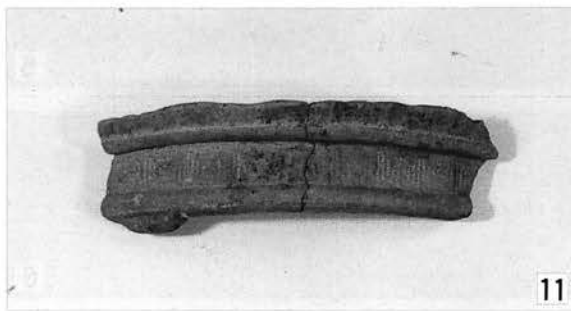
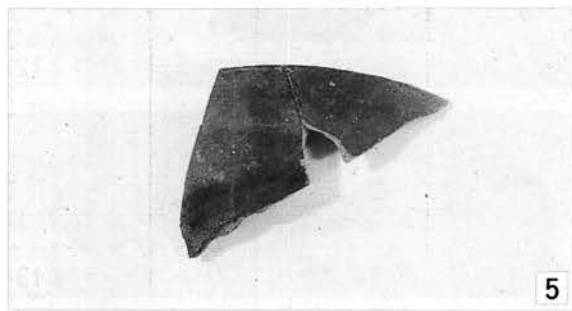
7



14

1. (Fig48-69)
2. (Fig48-70)
3. (Fig48-74)
4. (Fig48-75)
5. (Fig48-76)
6. (Fig50-82)
7. (Fig50-83)

8. (Fig50-84)
9. (Fig50-86)
10. (Fig50-88)
11. (Fig50-89)
12. (Fig50-92)
13. (Fig51-108)
14. (Fig51-109)



- |                |                 |
|----------------|-----------------|
| 1. (Fig51-112) | 7. (Fig72-189)  |
| 2. (Fig51-113) | 8. (Fig73-193)  |
| 3. (Fig51-120) | 9. (Fig73-194)  |
| 4. (Fig51-129) | 10. (Fig73-202) |
| 5. (Fig52-149) | 11. (Fig74-205) |
| 6. (Fig52-154) | 12. (Fig74-210) |



1



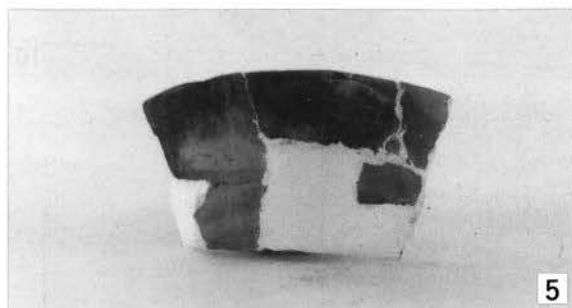
2



3



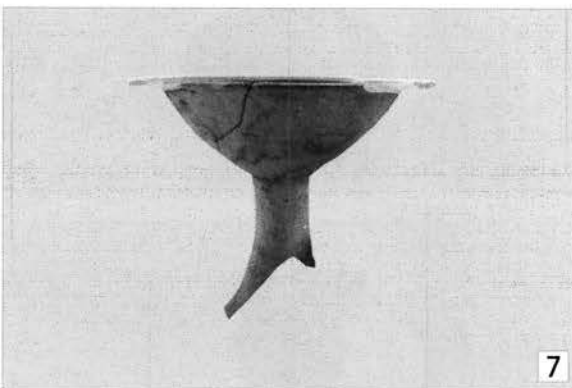
4



5



6



7



8



9

1 . (Fig74-209)

6 . (Fig76-230)

2 . (Fig76-219)

7 . (Fig93-254)

3 . (Fig76-224)

8 . (Fig95-257)

4 . (Fig76-225)

9 . (Fig95-258)

5 . (Fig76-226)



1



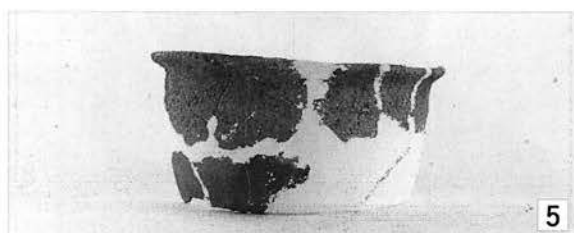
2



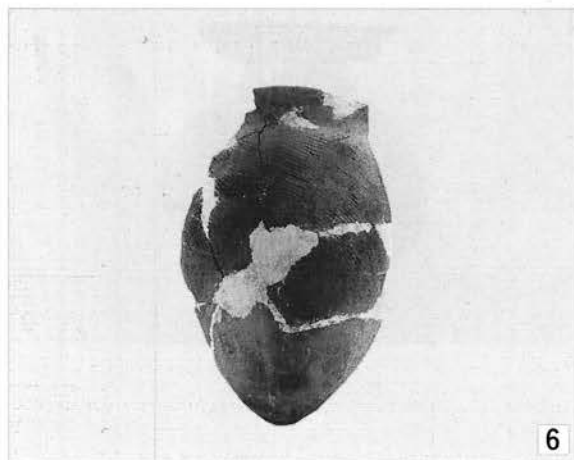
3



4



5



6



7



8



9



10



11

- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1. (Fig97-261)  | 7. (Fig103-269)  |
| 2. (Fig97-262)  | 8. (Fig105-270)  |
| 3. (Fig99-263)  | 9. (Fig107-272)  |
| 4. (Fig101-264) | 10. (Fig107-273) |
| 5. (Fig101-266) | 11. (Fig107-274) |
| 6. (Fig101-268) |                  |



1



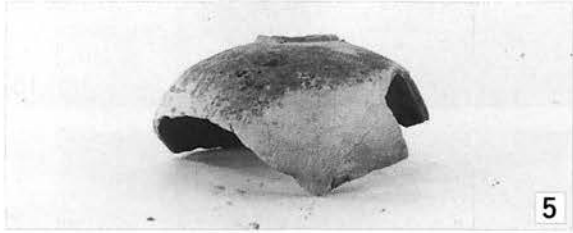
2



3



4



5



6



7



8



9



10

1. (Fig109-279)

7. (Fig113-290)

2. (Fig109-280)

8. (Fig113-291)

3. (Fig111-281)

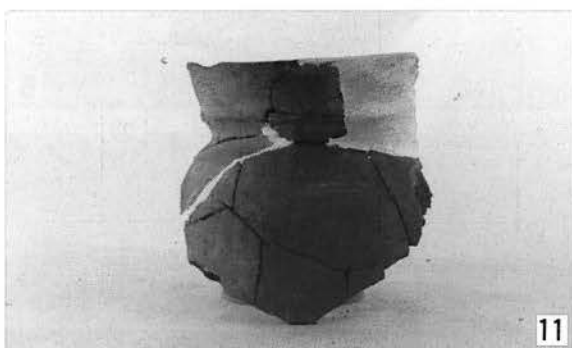
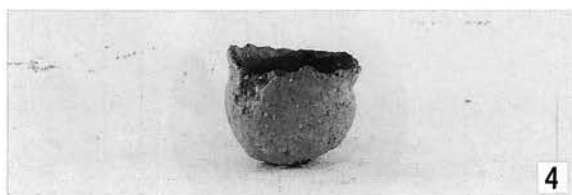
9. (Fig113-292)

4. (Fig111-283)

10. (Fig113-293)

5. (Fig111-285)

6. (Fig113-289)



- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1. (Fig114-296) | 6. (Fig116-304)  |
| 2. (Fig116-297) | 7. (Fig116-305)  |
| 3. (Fig116-298) | 8. (Fig116-311)  |
| 4. (Fig116-299) | 9. (Fig117-312)  |
| 5. (Fig116-303) | 10. (Fig117-313) |
|                 | 11. (Fig128-315) |

佐賀市文化財調査報告書第53集

## 友貞遺跡（1区～6区）

平成6年3月31日

発行 佐賀市教育委員会  
佐賀市栄町1番1号

印刷 ㈱弘文社印刷  
佐賀市天神二丁目4-21